

令和7年11月伊勢原市教育委員会定例会会議 日程表

日時：令和7年11月26日（水）

午前9時30分から

場所：伊勢原市役所 3階 第3委員会室

開 会

議 事

日程第 1 前回議事録の承認

日程第 2 教育長報告

その他

閉会

伊勢原市立小中学校の望ましい学校規模等に関する基本方針（案）

教育部 教育総務課

1 方針策定体制(経過)

- 庁内検討委員会(関係7部21課等)
 - 7回開催(R6.7~R7.9 ※R7.11月 時点)
- 庁外の在り方検討会議(10人)
 - 学識経験者、保護者代表、小・中学校長、地域住民代表、地域学校協働活動推進員、特定非営利活動法人代表、公募市民
 - 8回開催(R6.7~R7.10 ※R7.11月 時点)

2 方針の構成

- 第1章 方針の概要
- 第2章 市立小中学校を取り巻く現状・課題
- 第3章 本市がめざす「これからの学校」
- 第4章 望ましい学校規模・配置の考え方及び基準
- 第5章 望ましい学校規模等に近づけるための対応策及び時期
- 第6章 望ましい学校規模等に向けた対応策の検討

3 方針の概要

(1) 方針策定の背景と目的

学校教育を取り巻く環境変化や、これからの教育の在り方を踏まえ、将来にわたり望ましい教育環境を整え、教育水準の維持向上を図るため、その指針となる本市の方針を定めます。

(2) 対象校

市立小・中学校 全14校

(3) 期間

概ね20年

策定後10年を目安に必要な見直し

(4) 本市がめざす「これからの学校」

望ましい学校規模等の検討を進めるにあたり、その前提となる「これからの学校像」を示します。

これからの学校像

多様な人や社会との関わりの中で、児童生徒一人ひとりの可能性を引き出す学校

学校像の実現に向けた「学校教育のめざす方向性」

- ◆視点1 きめ細やかで、切れ目のない教育のために
 - ◆視点2 地域に根ざした持続可能な教育のために
 - ◆視点3 「新しい時代」の学びを支える教育環境のために
- ➡ 3つの視点ごとに「主な推進方策」を位置付ける

伊勢原市立小中学校の望ましい学校規模等に関する基本方針（案）

(5) 望ましい学校規模(学級数)の基準

法令や国の手引き、学級規模の偏りによる学習・生活面、学校運営上のメリット・デメリット、アンケート結果等を踏まえて定めます。

本市にとって望ましい学校規模(学級数)※通常学級

小学校 12学級～24学級(1学年:2～4学級)

中学校 9学級～18学級(1学年:3～6学級)



上記の基準にR7年度の学級数をあてはめた場合

[小学校]

- ・ 基準を下回る学校: 大山小学校(6学級)
- ・ 基準を上回る学校: なし

[中学校]

- ・ 基準を下回る学校: なし
- ・ 基準を上回る学校: 成瀬中学校(19学級)

<国が定める基準(目安)>

小・中学校共に、12学級から18学級
(小学校:1学年あたり2学級から3学級)
(中学校:1学年あたり4学級から6学級)

(6) 望ましい学校配置(通学距離・通学時間)の基準

国の基準(目安)や各学校の現状の通学距離を踏まえて定めます。

本市にとって望ましい学校配置(通学距離と時間の上限)

小学校 概ね4km以内、60分以内

中学校 概ね6km以内、60分以内



現状、本市で最長の通学距離

[小学校] 3.4km(高部屋小学校)

[中学校] 5.3km(山王中学校)

「現状の通学時間」と「望ましいと思う通学時間」

アンケート結果では、「現状の通学時間」と、「望ましいと思う通学時間」の各設問に対し、小中学校共に「45分未満」と回答した割合が最も多く、概ね基準と一致

<国が定める基準(目安)>

小学校で概ね4km、60分以内
中学校で概ね6km、60分以内

伊勢原市立小中学校の望ましい学校規模等に関する基本方針（案）

(7) 望ましい学校規模に近づけるための対応策

ア、小規模校対策

対応策	形態
■地域の状況を踏まえた工夫	①小規模特認校制度 (大山小で実施中)
	②小規模校を分校化
■通学区域の変更	—
■統合 ※小中一貫教育校を含む	①既存校への統合
	②新用地に新設統合

イ、大規模校対策

大規模校化が予測される学校に対しては、児童生徒数の推移を見極めながら、必要な対応策を総合的に検討

地理的条件や地域特性を理由に、統合を含む通学区域の再編成が困難な場合は、対象校の存続に向けて小規模校のメリットを最大限生かす方策等を検討します。

(8) 検討を開始する基準及び時期

<基本的 検討パターン> 現時点で対象校なし

学校規模の状態 (小中学校共通)	1つ以上の学年が単学級、かつ今後、学校規模の更なる縮小が見込まれる状態
検討開始時期	児童生徒数の見込みが把握できる6年前から検討開始

<優先的 検討パターン>

学校規模の状態 (小中学校共通)	全ての学年が単学級
検討開始時期	本基本方針に基づき、早期に検討を開始

学校名	基準該当年度	学級数/児童数	検討開始年度
大山小学校	令和7年度	6学級/54人	令和8年度以降



伊勢原市立小中学校の望ましい学校規模等に関する基本方針（案）

(9) 小規模校対策の検討の考え方及び手順

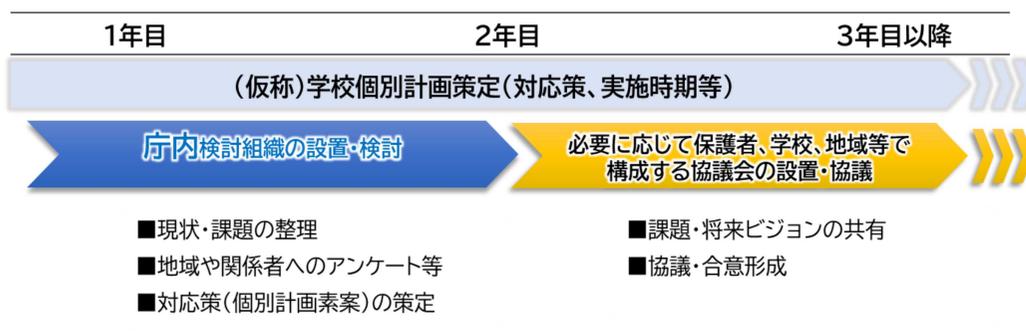
ア、考え方

教育機会等の確保や学びの保障の視点、**これまでの学校活動や地域との関わりなど、対象校を取り巻く環境や地域の実情**を十分踏まえ、長期的な児童生徒数の動向も見定めながら慎重に検討を行います。

イ、手順

- ① 庁内における現状・課題・方向性の整理
- ② 保護者、地域住民、学校関係者等との合意形成
- ③ 「(仮称)学校個別計画」の策定及び計画に基づく対応

(検討のイメージ)



(10) 小中一貫教育の検討

望ましい学校教育に向けた対応策の検討と併せ、本方針で示す「**きめ細かな教育の実現**」を図るため、**9年間を通じた教育課程の編成等**により、**系統的かつ連続性のある教育の実現**を目指す小中一貫教育の検討を進めます。

4 今後のスケジュール(予定)

- 11/20 議会全員協議会等
(計画案の説明及びパブコメ実施)
- 12/8 パブリックコメント開始(30日間)
- 12/14 市民説明会 於)中央公民館
- 2/中 議会全員協議会等
- 2/27 教育委員会議2月定例会(議案上程)
- 3/下 市議会3月定例会(行政報告)公表

伊勢原市立小中学校の望ましい
学校規模等に関する基本方針（案）

伊勢原市教育委員会

目次

第1章 方針の概要	1
1 方針策定の背景と目的	1
2 方針の対象校	1
3 方針の期間	1
4 方針の位置付け	2
5 方針策定にあたっての視点	3
第2章 市立小中学校を取り巻く現状・課題	4
1 児童生徒数・学級数の推移と推計	4
2 学校施設の状況	10
3 通学区域及び通学距離の状況	14
4 学校運営に係る経費	15
5 特色ある教育活動	16
6 多様な支援の状況	21
7 地域とともにある学校	25
8 教職員が本来の業務に専念できる環境づくり	26
第3章 本市がめざす「これからの学校」	27
1 国の動向	27
2 本市がめざす学校教育	28
3 これからの学校像	29
第4章 望ましい学校規模・配置の考え方及び基準	34
1 望ましい学校規模	34
2 望ましい学校配置	39
第5章 望ましい学校規模等に近づけるための対応策及び時期	41
1 望ましい学校規模等に近づけるための対応策	41
2 小規模校対策の検討を開始する基準及び時期	44
3 大規模校対策の考え方	44
第6章 望ましい学校規模等に向けた対応策の検討(小規模校対策)	45
1 小規模校対策の基本的な検討の考え方及び手順	45
2 対応策の検討にあたり配慮すべき事項	46
3 望ましい学校規模等に向けた対応策と併せた小中一貫教育の検討	47

第1章 方針の概要

1 方針策定の背景と目的

本市¹⁾の市立小中学校の児童生徒数²⁾は、昭和58(1983)年の12,498人をピークに減少傾向で推移し、令和7(2025)年時点は6,735人で、ピーク時と比較し約45%減少しています。今後も更なる児童生徒数の減少が見込まれる中、学校の小規模化に伴う教育活動や学校運営等への影響が懸念されています。

また、本市の学校施設は、昭和40年代後半から昭和50年代に集中して建設された結果、約8割の建物が建築から40年以上を経過するなど老朽化が進行し、今後、計画的な施設改修や建替え等を行う必要に迫られています。

こうした中、国は令和3(2021)年に「公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律」を一部改正し、公立小学校における「35人学級」への段階的な移行を進め、令和7(2025)年度をもって全ての学年で移行が完了したことから、今後は、公立中学校における令和8年度からの段階的な「35人学級」への移行を進めていく考えです。

本市教育委員会では、こうした学校教育を取りまく環境変化やこれからの教育の在り方を踏まえ、将来にわたり児童生徒にとって望ましい教育環境を整え、教育水準の維持向上等を図るため、「伊勢原市立小中学校の望ましい学校規模等に関する在り方検討会議(令和6年7月設置)」等における様々な視点からの検討協議を経た上で、「伊勢原市立小中学校の望ましい学校規模等に関する基本方針」(以下「方針」という。)を策定します。

2 方針の対象校

市立小中学校 全14校(小学校10校、中学校4校)

3 方針の期間

本方針の期間は、令和8(2026)年度から令和27(2045)年までの概ね20年間とし、策定後10年を目安に必要な見直しを行います。

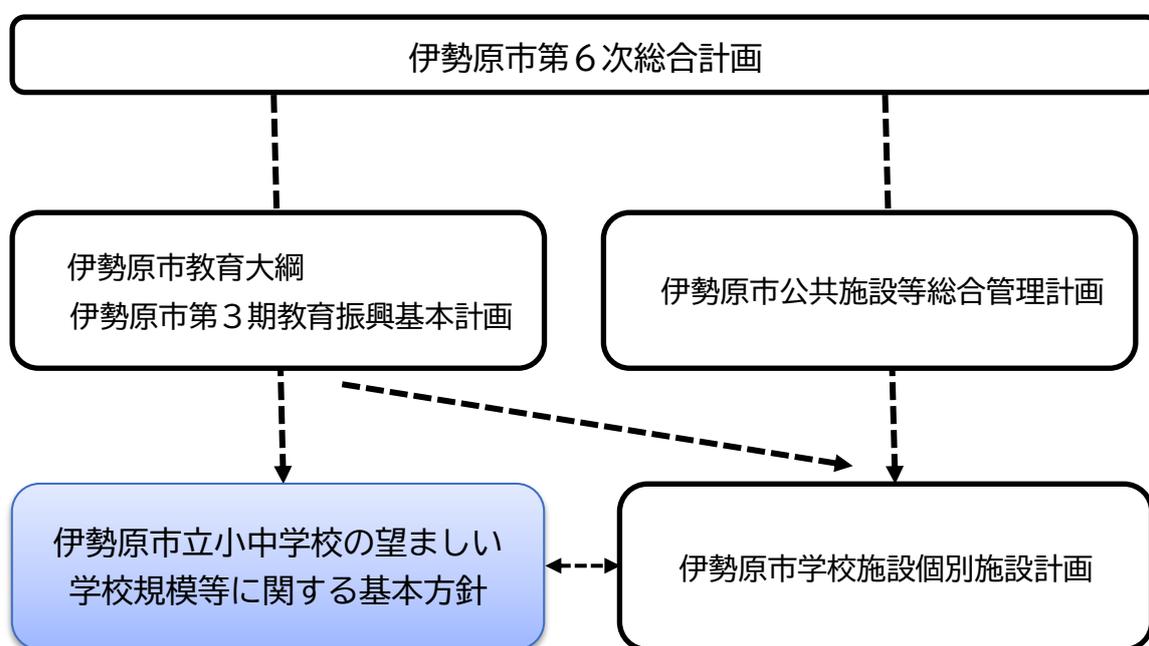
¹⁾ 本方針では、固有名詞(例:伊勢原市〇〇計画)を除き、他自治体と区別するために伊勢原市を表す場合は「本市」(例:本市の児童生徒数)を用い、特段の固有性がなく、一般的な行政単位として表す場合は「市」(例:市全体)を用います。

²⁾ 本方針では、「児童」とは市立小学校に通う小学校1～6年生、「生徒」とは市立中学校に通う中学校1～3年生を指します。

なお、児童生徒数の推計の変動や学校施設の老朽化状況、国が示す教育方針の見直し等を継続的に確認し、本方針の修正等が必要と判断した場合には、柔軟に対応することとします。

4 方針の位置付け

本方針は、本市の最上位計画である「伊勢原市第6次総合計画」をはじめ、「伊勢原市教育大綱」や「伊勢原市第3期教育振興基本計画」に則るとともに、「伊勢原市学校施設個別施設計画」³⁾等、他の関連する個別計画とも整合を図りながら策定しています。



³⁾ 伊勢原市学校施設個別施設計画
学校施設の中長期的な維持管理に係る経費の縮減と予算の平準化を図りつつ、学校施設に求められる機能・性能を確保することを目的に、令和3年度に策定した計画。

5 方針策定にあたっての視点

望ましい学校規模等の検討は、様々な要素を含む課題であることから、本方針は、次の視点等に留意して策定を行います。

(1) 児童生徒の教育条件の改善の視点

学校規模の適正化の検討は、これからの時代の学びを支えるためのソフト・ハード両面からの教育環境整備など、学びの主体である児童生徒の教育条件の改善の視点を中心に据え、学校教育の目的や目標をより良く実現するために行います。

(2) 教育機会均等確保・学びの保障の視点

少子化により学校の小規模化がさらに進むことが予想される中、基本方針の策定にあたっては、児童生徒が集団の中で多様な考えに触れながら資質や能力を伸ばす機会の確保を図るなど、義務教育の機会均等確保とともに、共生社会の形成に向け、多様な教育的ニーズに対する学びの保障の視点を踏まえます。

(3) 公共施設の最適化の視点

限られた財源の中で学校施設の老朽化や様々な教育ニーズに対応し、質の高い教育を継続的に提供していくため、基本方針の策定にあたっては「伊勢原市公共施設等総合管理計画」が掲げる「公共施設等の最適化」の視点を踏まえます。

(4) 地域コミュニティへの配慮の視点

学校は児童生徒の教育のための施設であるだけでなく、地域コミュニティの拠点施設として災害時の避難所、地域の交流やスポーツの場、さらには子どもの放課後における居場所など様々な機能を併せ持っていることから、基本方針の策定にあたっては、学校の地域コミュニティにおける役割を踏まえます。

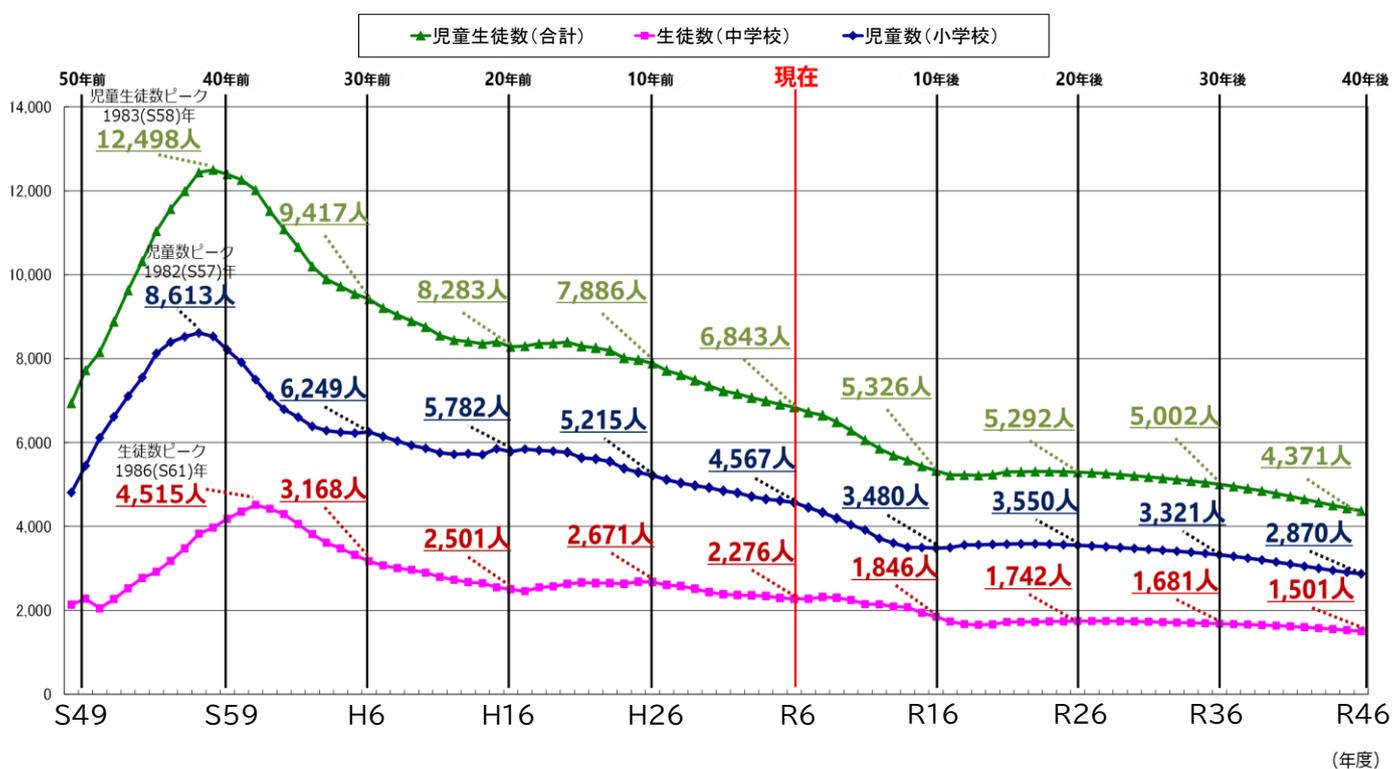
第2章 市立小中学校を取り巻く現状・課題

1 児童生徒数・学級数の推移と推計

(1) 市全体の児童生徒数の推移と推計

本市の児童生徒数は、令和6(2024)年時点(現在)で 6,843 人となっており、昭和58(1983)年のピーク時から45%(▲5,655 人)減少しています。また、20年後の令和26(2044)年には 5,292 人となり、現在から22%(▲1,551 人)減少、40年後の令和46(2064)年には 4,371 人となり、現在から36%(▲2,472 人)減少すると推計されています。

【市全体の児童生徒数の推移及び推計】



出典: 令和6年度伊勢原市教育委員会推計

※児童生徒数の推計は、令和6年5月1日時点の住民基本台帳人口を基準に、国立社会保障人口問題研究所が令和5年に実施した本市の将来人口推計の仮定値等を用いたコーホート要因法⁴⁾を用いて推計しています。

⁴⁾ コーホート要因法

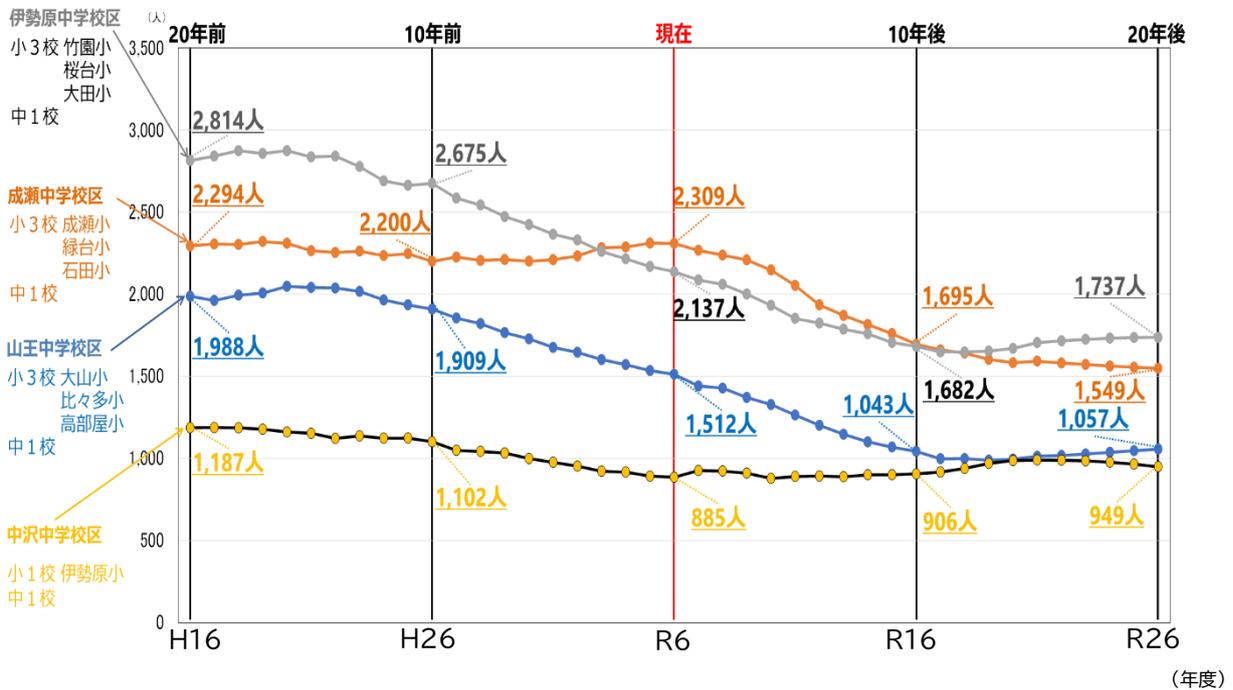
自然増減と社会増減の仮定に基づいて、ある年(期間)に生まれた集団の人口変化を一定期間観察することで将来人口を推計する方法。

(2) 中学校区別の児童生徒数の推移と推計

過去20年間における中学校区別の児童生徒数は、ほぼ横ばいであった成瀬中学校区を除く3中学校区で2割程度減少しています。

また、現在から令和26(2044)年までの今後20年間で最も大きく減少すると見込まれるのは成瀬中学校区で、現在の2,309人から1,549人と、33%(▲760人)減少する見込みです。一方で、中沢中学校区は、今後20年間は微増傾向で推移すると見込まれます。

【中学校区別の児童生徒数の推移及び推計】



出典: 令和6年度伊勢原市教育委員会推計

【平成16年度から令和6年度までの変化】

	H16	R6	変化率
山王中	1,988	1,512	-24%
成瀬中	2,294	2,309	1%
伊勢原中	2,814	2,137	-24%
中沢中	1,187	885	-25%

【令和6年度から令和26年度までの変化】

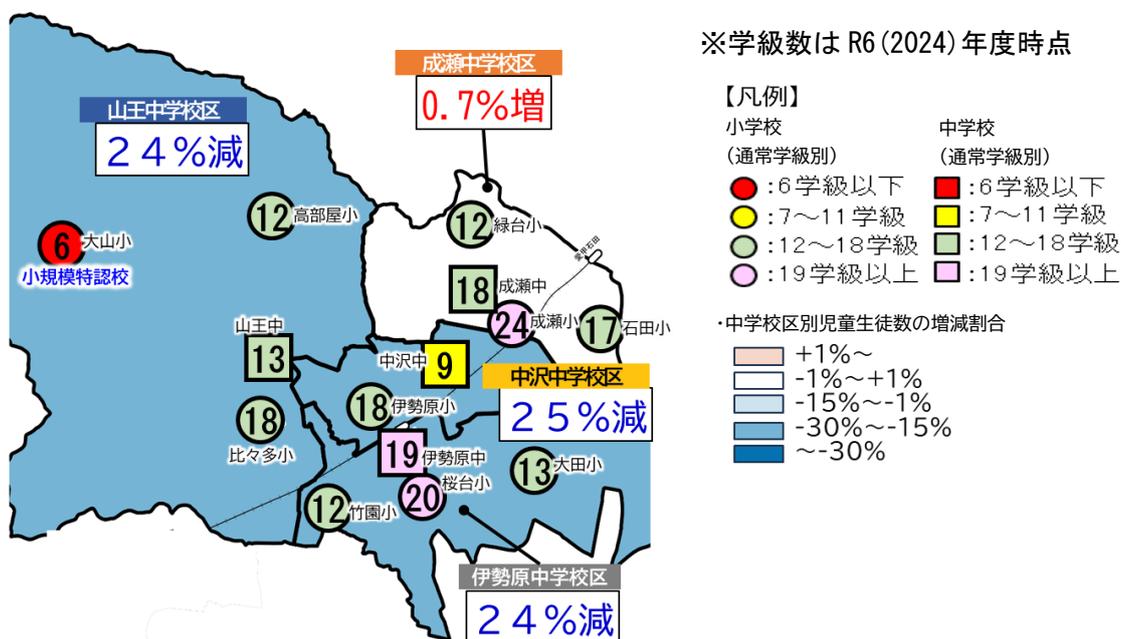
	R6	R26	変化率
山王中	1,512	1,057	-30%
成瀬中	2,309	1,549	-33%
伊勢原中	2,137	1,737	-19%
中沢中	885	949	7%

(3) 中学校区別の学級数の変化

① 過去から現在(平成16(2004)年→令和6(2024)年)

令和6(2024)年時点で、国が定める学校規模の標準⁵⁾を下回る学校は、大山小学校と中沢中学校の2校となっています。一方、標準を上回る学校は、小学校が成瀬小学校及び桜台小学校の2校、中学校が伊勢原中学校の1校の計3校となっています。

【過去から現在(2004年→2024年)の児童生徒数の増減割合及び学級数】



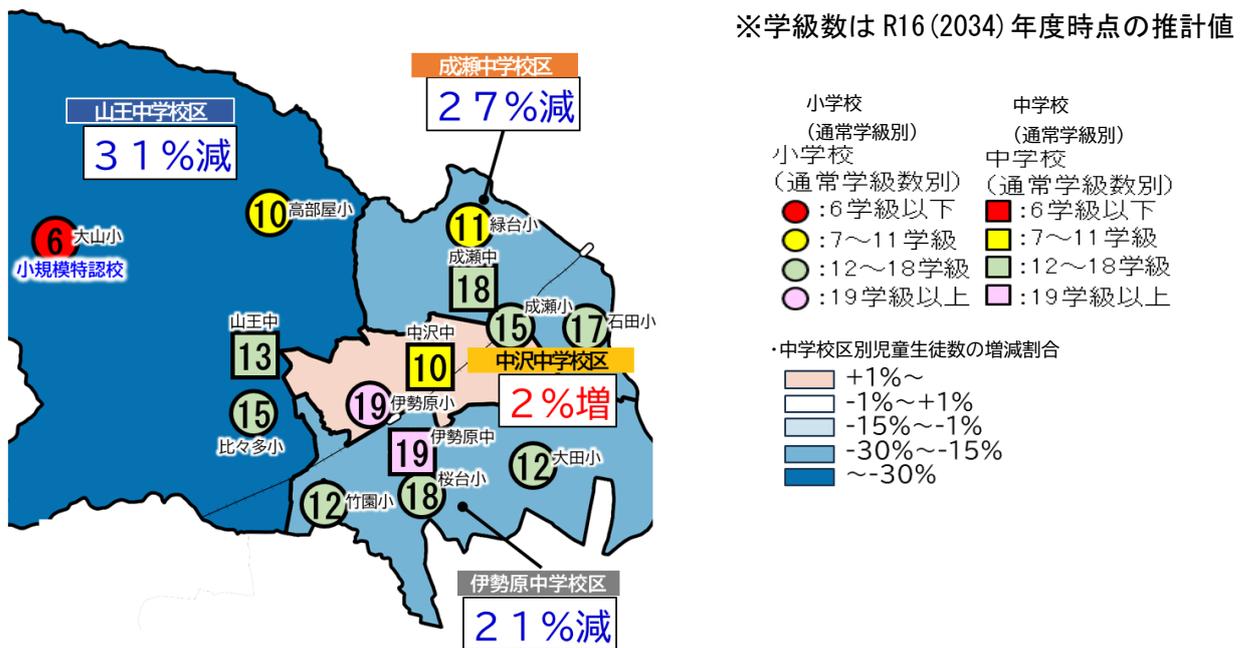
出典: 令和6年度伊勢原市教育委員会推計

⁵⁾ 国は、小・中学校の標準的な学級数について、学校教育法施行規則第41条及び79条において、小・中学校の学級数12学級以上18学級以下を標準と定めています。なお「地域の実態その他により特別の事情のあるときは、この限りでない」としています。

② 現在から10年後(令和6(2024)年→令和16(2034)年)

令和6(2024)年から10年後には、児童生徒数の減少に伴い、大山小学校、高部屋小学校、緑台小学校、及び中沢中学校の4校が12学級未満となり、19学級以上は、伊勢原小学校及び伊勢原中学校の2校が見込まれます。

【現在から10年後(R6(2024)年→R16(2034)年の児童生徒数の増減割合及び学級数】



※中学校については、令和8(2026)年度からの段階的な35人学級への移行を見据え、1学級当たりの人数を35人⁶⁾として推計しています。

出典: 令和6年度伊勢原市教育委員会推計

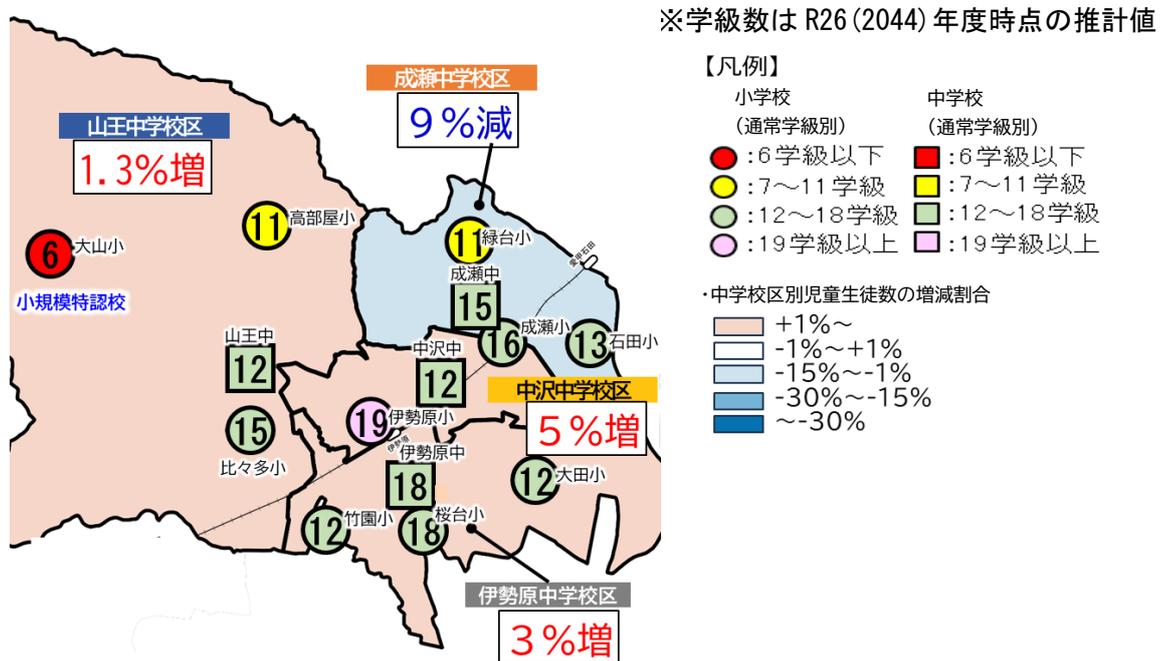
⁶⁾ 令和7(2025)年6月に改正された「公立の義務教育諸学校等の教育職員の給与等に関する特別措置法等の一部を改正する法律」附則第4条に、令和8(2026)年度からの公立中学校の「35人学級」の導入に向けた法制上の措置等を講ずることが規定されました。

③ 10年後から20年後(令和16(2034)年→令和26(2044)年)

20年後の令和26(2044)年には、中沢中学校が生徒数の増加により12学級になることが見込まれますが、大山小学校、高部屋小学校、及び緑台小学校の3校が12学級未満となる見込みです。

また、19学級以上は、伊勢原小学校のみとなる見込みです。

【10年後から20年後(2034年→2044年)の児童生徒数の増減割合及び学級数】



出典: 令和6年度伊勢原市教育委員会推計

【学校別児童生徒数及び学級数の推移と推計】

学校名	項目名	2004年度 (H16)	2024年度 (R6)	2034年度 (R16)	2044年度 (R26)
伊勢原小学校	児童数	752	567	605	589
	通常学級数	21	18	19	19
大山小学校	児童数	43	54	31	32
	通常学級数	6	6	6	6
高部屋小学校	児童数	502	355	215	261
	通常学級数	16	12	10	11
比々多小学校	児童数	830	585	412	426
	通常学級数	24	18	15	15
成瀬小学校	児童数	523	791	429	434
	通常学級数	16	24	15	16
大田小学校	児童数	605	398	286	306
	通常学級数	18	13	12	12
桜台小学校	児童数	831	627	559	552
	通常学級数	23	20	18	18
緑台小学校	児童数	360	330	260	228
	通常学級数	12	12	11	11
竹園小学校	児童数	566	364	261	318
	通常学級数	17	12	12	12
石田小学校	児童数	770	496	422	404
	通常学級数	23	17	17	13
小学校計	児童数	5,782	4,567	3,480	3,550
	通常学級数	176	152	135	133

学校名	項目名	2004年度 (H16)	2024年度 (R6)	2034年度 (R16)	2044年度 (R26)
山王中学校	生徒数	613	518	385	338
	通常学級数	16	13	13	12
成瀬中学校	生徒数	641	692	584	483
	通常学級数	17	18	18	15
伊勢原中学校	生徒数	812	748	576	561
	通常学級数	22	19	19	18
中沢中学校	生徒数	435	318	301	360
	通常学級数	12	9	10	12
中学校計	生徒数	2,501	2,276	1,846	1,742
	通常学級数	67	59	60	57

※学級数の推計は小・中学校ともに35人学級で算出。

出典: 令和6年度伊勢原市教育委員会推計

2 学校施設の状況

(1) 小中学校施設

本市の学校施設の保有量は、小中学校全14校で校舎等65棟、延床面積は約10.1万㎡です。

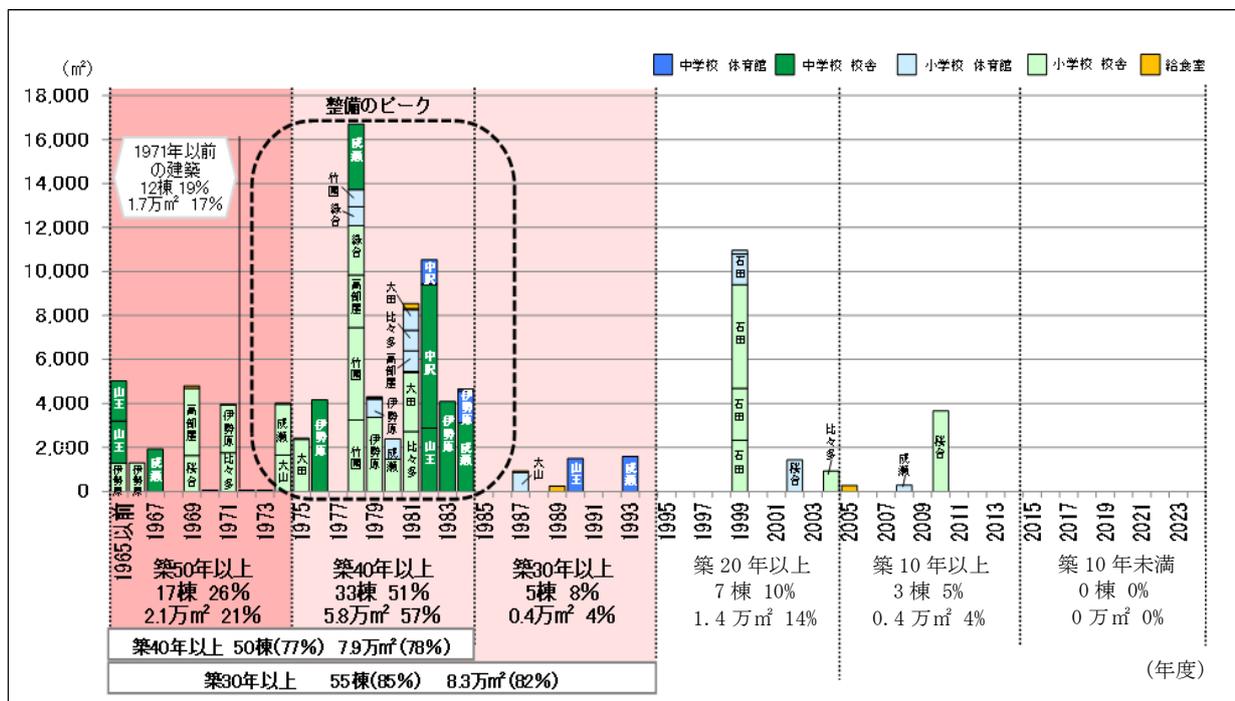
児童生徒数の増加に伴う分離新設校の建設は、昭和44(1969)年に桜台小学校が伊勢原小学校から、昭和53(1978)年に緑台小学校が成瀬小学校から、竹園小学校が桜台小学校から、昭和57(1982)年に中沢中学校が伊勢原中学校から、平成11(1999)年に石田小学校が成瀬小学校からそれぞれ分離し、現在の14校となっています。

また、棟ごとの築年別整備状況をみると、整備のピークは昭和49(1974)年から昭和59(1984)年に集中して建設されています。この結果、築40年以上経過した施設が約7.9万㎡と約8割を占め、老朽化が進行している状況です。

今後、改修や改築の時期が集中することが見込まれるため、学校施設個別施設計画に基づく計画的な整備が必要です。

【学校施設の築年数の状況】

令和7年4月1日時点



出典:伊勢原市教育委員会

【学校施設一覧】

令和7年4月1日時点

施設区分	施設名	所在地	建築年	築年数	延床面積
小学校	伊勢原小学校	伊勢原4-1-1	昭和37 (1962)年	63年	6,818㎡
	大山小学校	大山209	昭和49 (1974)年	51年	2,634㎡
	高部屋小学校	西富岡1090-1	昭和44 (1969)年	56年	5,879㎡
	比々多小学校	神戸521-1	昭和46 (1971)年	54年	6,673㎡
	成瀬小学校	高森1481-3	昭和46 (1971)年	54年	7,409㎡
	大田小学校	下谷1471-1	昭和50 (1975)年	50年	6,256㎡
	桜台小学校	桜台4-16-1	昭和44 (1969)年	56年	8,314㎡
	緑台小学校	高森482	昭和53 (1978)年	47年	5,089㎡
	竹園小学校	岡崎6611-1	昭和53 (1978)年	47年	5,481㎡
	石田小学校	石田1168-1	平成11 (1999)年	26年	10,961㎡
	小学校計				65,514㎡
中学校	山王中学校	上粕屋804-2	昭和37 (1962)年	63年	8,168㎡
	成瀬中学校	高森2-22-1	昭和42 (1967)年	58年	9,675㎡
	伊勢原中学校	桜台4-2-1	昭和51 (1976)年	49年	9,780㎡
	中沢中学校	下糟屋231-1	昭和57 (1982)年	43年	7,648㎡
	中学校計				35,271㎡
小中学校計				100,785㎡	

※建築年及び築年数は、各校の最も古い施設(棟)の年数を表しています。

出典:伊勢原市教育委員会

(2) 小中学校のプール施設

小学校のプール施設は、全10校中8校が築40年以上経過し、このうち、伊勢原小学校、高部屋小学校、比々多小学校、及び大田小学校の4校は、50年以上が経過しています。

また、中学校においても、全4校の施設が築40年以上経過しており、山王中学校及び成瀬中学校の2校は、50年以上経過するなど、老朽化が進行しています。

こうした中、本市では、比々多小学校、桜台小学校、及び山王中学校の3校で民間施設を活用した水泳授業の試行を行っています。

今後は、水泳授業の在り方や施設の維持管理コスト、民間施設の活用成果など、総合的な観点から学校プールの在り方を整理する必要があります。

【小中学校のプール施設一覧】

凡例 ■ 築50年以上経過 ■ 築40年以上経過 ■ 水泳指導をスイミングスクールで行っている学校

【小学校】

プール名	プール基礎情報			
	建設年度	経過年数(R6)	長さ(縦×横)	水深
伊勢原小学校	S46 (1971)	53	25m×13m	0.8~1.1
大山小学校	S56 (1981)	43	25m×13m	0.8~1.1
高部屋小学校	S48 (1973)	51	25m×13m	0.8~1.1
比々多小学校	S49 (1974)	50	25m×13m	0.8~1.1
成瀬小学校	H20 (2008)	16	25m×13m	0.8~1.1
大田小学校	S47 (1972)	52	25m×13m	0.8~1.1
桜台小学校	S50 (1975)	49	25m×13m	0.8~1.1
緑台小学校	S54 (1979)	45	25m×13m	0.8~1.1
竹園小学校	S54 (1979)	45	25m×13m	0.8~1.1
石田小学校	H11 (1999)	25	25m×13m	0.8~1.1

【中学校】

プール名	プール基礎情報			
	建設年度	経過年数(R6)	長さ(縦×横)	水深
山王中学校	S40 (1965)	59	25m×13m	0.9~1.2
成瀬中学校	S45 (1970)	54	25m×13m	1.1~1.3
伊勢原中学校	S59 (1984)	40	25m×13m	0.9~1.2
中沢中学校	S56 (1981)	43	25m×13m	0.9~1.2

出典:伊勢原市教育委員会

(3) 小学校給食施設

本市では、小学校全10校で自校方式の給食を提供しており、令和7(2025)年時点で民間に運営を委託している学校は、伊勢原小学校、大山小学校、高部屋小学校及び桜台小学校の4校で、残りの6校は、市の直営による運営となっています。

また、給食施設については、半数以上の6校の施設が築40年以上経過し、老朽化が進行しています。

今後は学校給食の運営方式及び給食施設について、デリバリー方式で実施している中学校給食も含め、総合的な視点から在り方を検討する必要があります。

【小学校の給食施設一覧】

凡例 築50年以上経過 築40年以上経過

学 校 名	設置 年度	経過年数 (R6)	構造	面積 (㎡)	方式	建物等
					ドライ ⁷⁾ ・ ウェット ⁸⁾	併設・独立
伊勢原小学校	S54 (1979)	45	RC	277	ウェット	校舎併設
大山小学校	S62 (1987)	37	RC	102	ウェット	独立型
高部屋小学校	S53 (1978)	46	RC	216	ウェット	校舎併設
比々多小学校	H17 (2005)	19	RC	314	ドライ	独立型
成瀬小学校	H1 (1989)	35	RC	337	ウェット	独立型
大田小学校	S56 (1981)	43	RC	264	ウェット	独立型
桜台小学校	S44 (1969)	55	RC	208	ウェット	独立型
緑台小学校	S53 (1978)	46	RC	211	ウェット	校舎併設
竹園小学校	S53 (1978)	46	RC	214	ウェット	校舎併設
石田小学校	H11 (1999)	25	RC	438	ウェット	校舎併設

※施設面積(㎡)には、配膳室を含みます。

出典:伊勢原市教育委員会

⁷⁾ ドライ方式

乾いた状態の床で、調理場内の湿度を低く保つことで細菌増殖を抑え、食中毒の発生要因を少なくする方式。

⁸⁾ ウェット方式

常に水で濡れた状態の床で、調理場全体を洗浄しながら衛生を保つ方式。

3 通学区域及び通学距離の状況

通学距離に関する国の基準⁹⁾は小学校が概ね4km以内、中学校は概ね6km以内とされる中、本市の現状で最長となる通学距離は、小学校が3.4km、中学校が5.3kmとなっています。

【通学区域と通学距離】



※最も遠い通学距離（令和6年度時点）

伊勢原中学校区		中沢中学校区		成瀬中学校区		山王中学校区	
●桜台小学校	約2.2km	●伊勢原小学校	約1.9km	●緑台小学校	約2.6km	●大山小学校	約1.7km
●竹園小学校	約2.1km	●成瀬小学校	約1.5km	●石田小学校	約1.7km	●高部屋小学校	約3.4km
●大田小学校	約2.8km					●比々多小学校	約3.3km
■伊勢原中学校	約4.9km	■中沢中学校	約3.0km	■成瀬中学校	約3.9km	■山王中学校	約5.3km

出典：伊勢原市教育委員会

⁹⁾ 国は、公立小・中学校の通学距離について、小学校で概ね4km 以内、中学校で概ね6km 以内という基準を、義務教育諸学校等の施設費の国庫負担等に関する法律施行令 第4条 第1項第2号に基づく国庫負担対象となる通学条件として定めています。

4 学校運営に係る経費

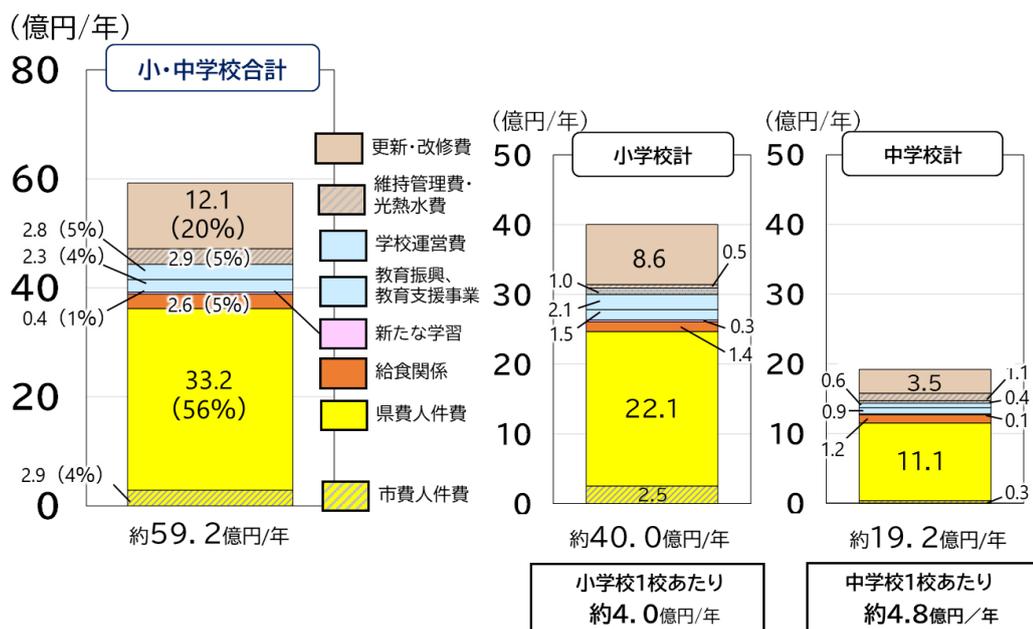
学校運営には、施設・設備の保守点検や日常の維持管理をはじめ、光熱水費や学校運営等で使用する備品購入費、保健衛生に係る経費、また、児童生徒の多様なニーズに応えるための人件費等、様々な経費が必要です。

今後の学校運営にあたっては、本市の行財政改革推進計画の理念である「持続的な行財政運営の実現」や、「公共施設等総合管理計画」が目的とする「公共施設の最適化」の考えを踏まえた効率的な運営が求められています。

令和5(2023)年度における本市の学校運営経費は、小中学校全14校で約59.2億円/年(県費負担教職員の人件費等を除く市費負担分は約26億円)となっており、小学校は10校平均で約4.0億円/年(同約1.8億円/年)、中学校は4校平均で4.8億円/年(同約2.0億円/年)となっています。

なお、児童生徒数が少ない小規模な学校では、教員配置や施設の維持管理に係る固定的な経費の割合が大きくなり、児童生徒一人あたりの運営経費が多くなる傾向にあります。

【経費の内訳】



出典:伊勢原市教育委員会

- ※ 更新・改修費は、「伊勢原市学校施設個別施設計画(令和4年3月)」に記載されている14校を今後も維持した場合の整備費用をもとに算出。
- ※ 県の職員人件費は、「令和5年度 神奈川県給与・定員管理等について」の教職員平均給与と期末手当・勤勉手当をもとに算出。
- ※ 更新・改修費・県の職員人件費以外は、令和5(2023)年度の教育費決算額を基に集計。
- ※ 市の職員人件費は、令和5年度教育費における報酬、給料、職員手当、共済費等を集計。
- ※ 小・中分かれてない費目は、学校数で按分。

5 特色ある教育活動

(1) きめ細やかな指導・支援体制の充実

ア、小学校教科担当制の推進

本市では国に先駆け、平成25(2013)年度から小学校における教科担当制¹⁰⁾に係る非常勤講師を配置しました。令和7(2025)年度には非常勤講師10名を配置し、全ての小学校において高学年を中心に、教員等が教科を分担して授業を行う体制を整えています。

今後は、低・中学年への教科担当制による指導・支援の充実が必要です。

イ、少人数指導の推進

本市では、児童一人ひとりに対するきめ細やかな指導・支援による基本的な生活習慣の定着や、基礎的な学力の向上を図るため、国に先駆け、平成14(2002)年度に小学校1年生、平成15(2003)年度に小学校2年生に非常勤講師を配置し、35人学級を実施してきました。(その後、法改正により段階的に拡充)

また、各小中学校の実態に応じて非常勤講師を配置(令和7(2025)年度:6名)し、対象学年や教科を定めた少人数指導、複数の教員が協力して授業を行うティーム・ティーチング等を行う中で、児童生徒一人ひとりに応じた学習指導・支援に努めています。

今後は個別最適な学習環境の実現に向け、少人数指導の対象となる学年や教科、指導法等の更なる工夫改善が必要です。

ウ、ICT教育の推進

本市では、令和3年(2021)年4月から全ての小中学校で1人1台タブレットの運用を開始しました。教育委員会では、各学校に対してその利活用情報や施策動向を提供するとともに、効果的な実践や成果を学校間で共有することで情報教育の推進を図っています。また、ICT支援員を計画的に配置し、更なる活用及び適切な運用支援を行っています。

今後もICTの計画的な整備・活用により、児童生徒の情報活用能力の育成を図ることが必要です。

¹⁰⁾ 教科担当制

小学校において教員が当該学年のいくつかの教科において専門の教科を担当し、授業を実施する指導形態。国は中学校・高等学校と同じ「教科担任制」という名称を用いていますが、本市では、より実態に近い名称として「教科担当制」を用いています。

エ、地域の人材や大学生等の活用

本市では、地域の人材や退職教員、教員を目指す大学生等が、各小中学校において、教員による指導を補助する役割を担っています。平成14(2002)年度から小学校、平成15(2003)年度から中学校に指導補助員を配置(令和7(2025)年度時点で、小学校16名、中学校6名)しました。

また、平成18(2006)年度からは、学習や人間関係等について気軽に相談できる大学生等をハートフルフレンド¹¹⁾として各小中学校に派遣(令和6(2024)年度:21名)しています。

児童生徒が抱える困難が複雑化・多様化する中、今後は個別最適な学習環境の実現に向け、教員と異なる視点を持つ地域の人材や大学生等による支援の充実が必要です。

オ、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーの活用

いじめや不登校等が社会問題となる中、児童生徒が抱える精神的な課題や家庭環境上の課題など、教員だけでは対応が難しい諸課題の改善に向け、国・県の制度とは別に本市独自で、平成23(2011)年度から全小学校にスクールカウンセラー¹²⁾を配置(令和7(2025)年度:4名)しています。また、平成28(2016)年度からはスクールソーシャルワーカー¹³⁾を派遣(令和7(2025)年度:2名)しています。

不登校傾向の児童生徒が増えるなど、児童生徒が抱える困難が複雑化・多様化する中、今後は、そうした困難をできるだけ早期に把握し、心理や医療、福祉等の専門的な支援につなげることができるよう、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーの更なる配置・活用の充実が必要です。

11) ハートフルフレンド

話し相手がいらない、集団活動に適応しにくい、学習活動に自信がないなどの児童生徒が、友人や家族関係、学校生活等について気軽に相談できたり、学習への声かけをしてもらえたりする大学生等(ボランティア)を「ハートフルフレンド」として配置。

12) スクールカウンセラー

いじめ、暴力行為、不登校、発達、精神科領域、家庭環境や親子関係等、児童生徒が抱える様々な課題について、児童生徒、保護者、教職員に対し、カウンセリングや情報収集・見立て、専門家による指導・助言を含めた検討等を行う心理の専門性を有した者。

13) スクールソーシャルワーカー

教育の分野に加え、社会福祉に関する専門的な知識や技術を有する者で、問題を抱える児童生徒が置かれた環境への働きかけや、関係機関等とのネットワークの構築等、多様な支援方法を用いて課題解決への対応を図る人材。

(2) 児童生徒の体験的な学びの充実

ア、創意ある学校づくりの推進

体験活動を通じて児童生徒の豊かな心を育むことが求められる中、各学校では、本市の多様な地域資源を活用しながら、地域の方たちの協力の下、農業や歴史文化の体験学習をはじめ、戦争体験を通じた平和学習や地域の美化活動等の様々な取組を行っています。

今後はこうした体験活動が、小中学校9年間を通じた系統的な学びとなることや、より本市の特色を生かした取組となるよう、各学校の創意工夫のほか、学校運営協議会や地域学校協働活動の仕組みを活用した取組の充実が必要です。

イ、地域資源の活用

本市には、豊かな自然や歴史の中で生まれ、継承されてきた数多くの文化財や伝統文化があります。それらの郷土の歴史文化を学ぶ取組として、市の文化財担当者が学校をまわり、昔の民具を使って行う出前授業や縄文土器づくりなどの体験授業を長年にわたり行っています。また、副読本「いせはらのむかし」を小学校6年生全員に配付し、活用を図っています。

今後もこうした本市の魅力ある地域資源を生かしながら、児童生徒がより主体的に学ぶ機会の充実を図り、郷土への関心を更に高めていくことが必要です。

また、市立図書館及び子ども科学館と小中学校が連携した取組として、電子図書を活用した児童生徒の読書活動の促進や、プラネタリウム等を活用した天文学習や実験をはじめ、科学館職員を学校へ派遣する授業等、数多くの連携した取組を行っています。今後も両館を有効活用しながら、児童生徒の読書する心、科学する心を育むことが必要です。

ウ、中学校における部活動

本市の中学校における部活動は、様々な体験を通じて必要な資質・能力を育む重要な教育活動の一環として捉え、長年にわたり全教職員の参加・協力・理解による運営体制を基本として実施してきました。さらに、こうした体制を補完するため、専門的な技術を有する地域等の人材を指導協力者として派遣しています。

こうした取組の下、令和7(2025)年度時点において、全中学校で計54部(運動部35、文化部19)が活動するなど、全生徒の約80%が部活動に加入している状況です。

現在、全国的には少子化や教員の働き方、指導の専門性等の観点から、部活動の地域移行・展開が求められていますが、本市では、これまでの部活動の意義や成果を十分に踏まえながら、「地域移行ありき」ではなく、伊勢原らしい部活動

の在り方を改めて検討していく必要があります。

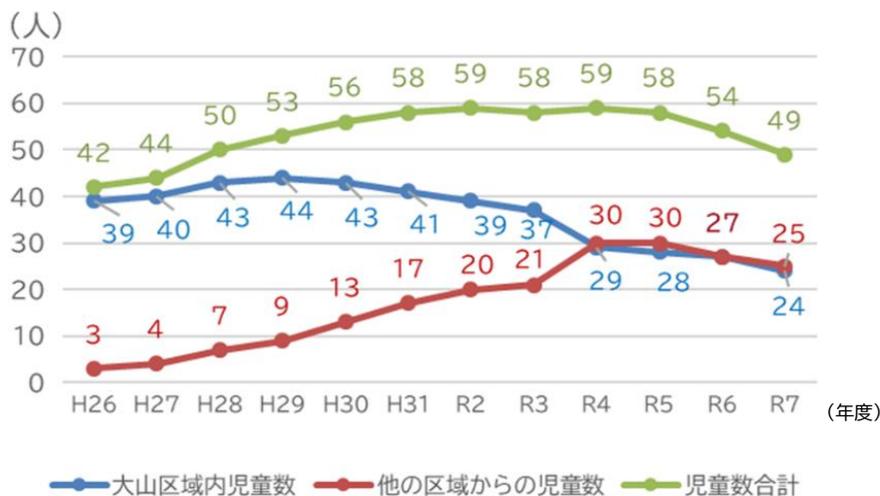
(3) 大山小学校における小規模特認校制度

大山小学校では、平成26(2014)年から文部科学省の教育課程特例校の指定を受け、就学指定校変更の運用により全市域から児童を受け入れ、外国語教育やICT教育などの先進的な取組を進める「特色ある教育モデル推進事業」を行ってきました。現在も小規模特認校制度¹⁴⁾を活用し、少人数を生かした体験活動の充実や異学年交流等を通じた豊かな教育活動をはじめ、自然環境や地域に根ざした伝統文化を生かした教育活動を行っています。

こうした取組により、令和7(2025)年5月1日時点の全児童数49人のうち、区域外からの就学者は25人となっており、半数を超えている状況です。

引き続き、少人数ならではの特色ある教育活動を推進しながら学校運営の活性化を図るとともに、今後の児童数の動向に注視が必要です。

【大山小学校の児童数の推移（平成26年度～令和7年度）】



出典:伊勢原市教育委員会

(4) 異校種間連携の取組

ア、地域教育機関等連絡協議会

本市では、平成5(1993)年度から市内にある全ての教育機関を対象とした「地域教育機関等連絡協議会」を開催し、各教育機関の教職員及び子どもたちの交流や情報交換を行ってきました。同協議会は、幼稚園、保育所、認定こども園、

¹⁴⁾ 小規模特認校制度

特色のある教育活動を行っている小規模校で、お子さんを学ばせたいという希望がある場合に、一定の就学条件のもと、市内全域からの児童の入学を認める制度。

小・中学校、県立高校、私立高校、及び県立特別支援学校を4つの中学校区にブロック分けして構成し、ブロックごとに情報交換や校種間の円滑な接続につながる取組を行っています。

今後も教育活動の更なる充実に向け、本市のスケールメリットを生かし、同協議会の仕組みを有効活用していくことが必要です。

【ブロック協議会の構成校】

中学校	山王中学校	成瀬中学校	伊勢原中学校	中沢中学校
幼稚園・認定こども園	大山保育園 高部屋愛育保育園 比々多保育園 伊勢原山王幼稚園	林台保育園 伊勢原ふたば保育園 成瀬幼稚園 中央マドカ幼稚園 東海大学付属本田記念幼稚園 なるせ保育園	伊勢原愛児園 大原こども園 大原第2保育園 伊勢原こぼと保育所 伊勢原ひかり幼稚園 伊勢原みのり幼稚園 伊勢原立正幼稚園	ベルガーデン保育園 リスブラン保育園 伊勢原幼稚園 伊勢原白百合幼稚園 伊勢原八雲幼稚園
小学校	大山小学校 高部屋小学校 比々多小学校	成瀬小学校 緑台小学校 石田小学校	大田小学校 桜台小学校 竹園小学校	伊勢原小学校
高校・特別支援学校等	伊勢原高等学校	伊勢原支援学校 向上高等学校	自修館中等教育学校	伊志田高等学校
市役所	教育指導課・教育センター			

出典:伊勢原市教育委員会

イ、小中学校9年間を見通した教育活動(小中一貫教育)

小中学校の連携強化や円滑な接続とともに、小学校1年生から中学校3年生までの連続した学習指導や児童生徒指導が求められる中、本市では、各中学校ブロックにおいて、小中学校交流会や情報交換会を開催し、授業公開や研究協議をはじめ、各ブロックの実情に応じて「出前授業」「母校訪問」「挨拶運動」といった取組を行っています。また、教職経験10年目の教員を異校種へ派遣(小学校から中学校へ、中学校から小学校へ)し、異校種における日常の指導等を学び、更なる小中連携に生かす取組を行っています。

国の手引き¹⁵⁾では、小中一貫教育を「小中学校段階の教員が目指す子ども像を共有し、9年間を通じた教育課程を編成し、系統的な教育を目指す教育」としています。

本市においても、教育内容や学習活動の充実をはじめ、児童生徒を取り巻く様々な課題に対応するため、地域の実情を踏まえながら本市における小中一貫教育の有効性についての研究を進め、将来的な導入に向けた検討を進める必要があります。

¹⁵⁾ 「小中一貫した教育課程の編成・実施に関する手引き(平成28年12月文部科学省)」

6 多様な支援の状況

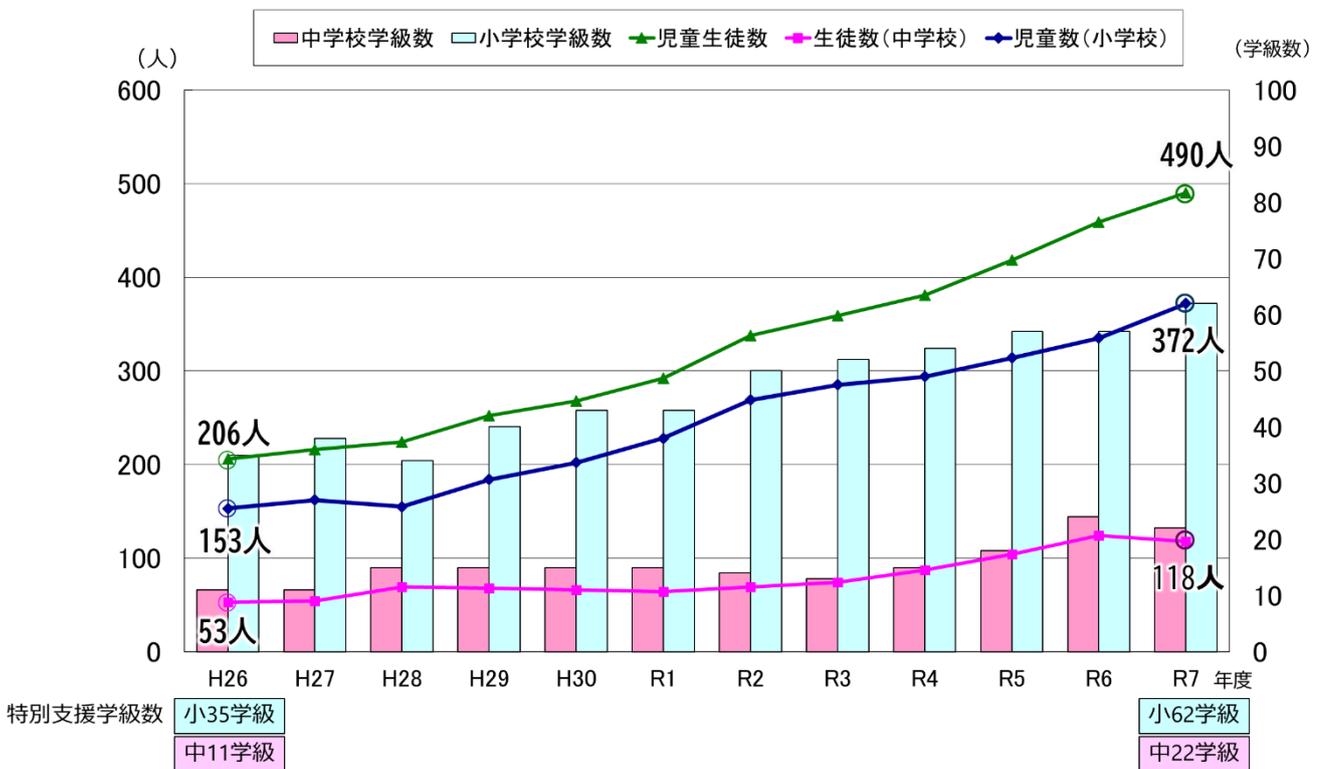
(1) 特別な支援を要する児童生徒への支援

ア、特別支援学級の児童生徒数及び学級数

本市における特別支援学級の児童生徒数は、過去10年間で約2.2倍に増加するなど、右肩上がりで推移しています。

全ての児童生徒が共に学び共に育つインクルーシブな学校づくりが求められている中、今後も、児童生徒一人ひとりの教育的ニーズに応じた適切な就学先の決定や更なる支援体制の充実が必要です。

【特別支援学級の児童生徒数・学級数の推移（平成26年度～令和7年度）】



出典：伊勢原市教育委員会

イ、介助員の配置

本市では、特別支援学級で学ぶ児童生徒の安全・安心な学校生活を確保するため、平成3(1991)年度から小学校に、平成5(1993)年度から中学校に、特別支援学級介助員を配置(令和7(2025)年度：小学校44名、中学校13名)しています。また、医療的ケアを要する児童生徒に対し、看護師資格のある介助員を派遣する取組も行っています。

ウ、通級による指導・支援

① ことばの教室

小学校の通常の学級に在籍する言語の発達に課題のある児童を対象に、通級指導教室「ことばの教室」を桜台小学校に開設し、児童、保護者、及び児童の在籍校への指導・支援を行っています。

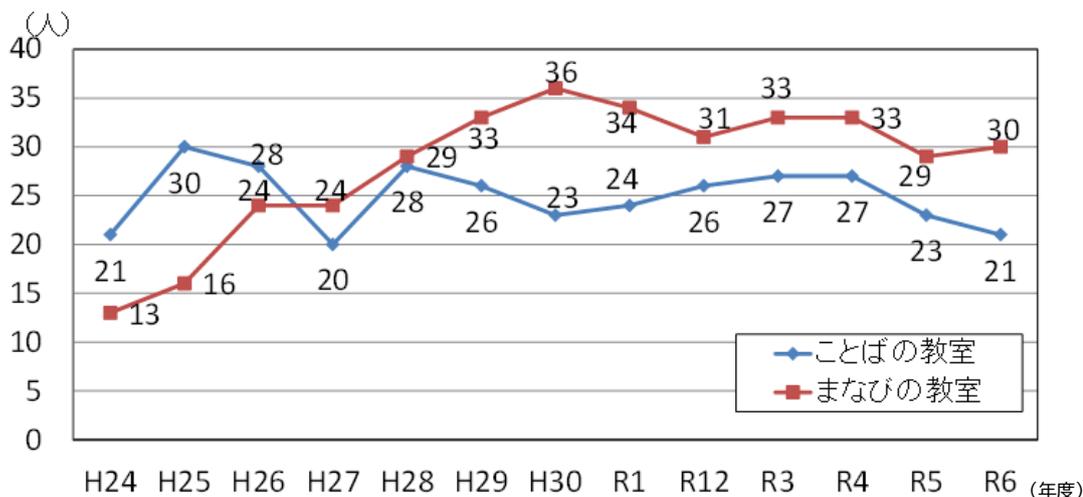
今後も、児童一人ひとりの教育的ニーズに応じた指導・支援の充実を図るとともに、中学生への支援拡大の検討も必要です。

② まなびの教室

小学校の通常の学級に在籍する集団生活への適応に課題のある児童を対象に、通級指導教室「まなびの教室」を桜台小学校に開設し、児童、保護者、及び児童の在籍校への指導・支援を行っています。

全ての児童生徒が共に学び共に育つインクルーシブな学校づくりが求められている中、今後はできるだけ身近な場で通級指導が受けられるなど、通級に係る児童一人ひとりの実情を踏まえた指導・支援体制の充実や、中学生に対する通級指導についても検討が必要です。

【参考 通級指導教室へ通う児童数の推移（平成24年度～令和6年度）】



出典：伊勢原市教育委員会

(2) 不登校に関する取組

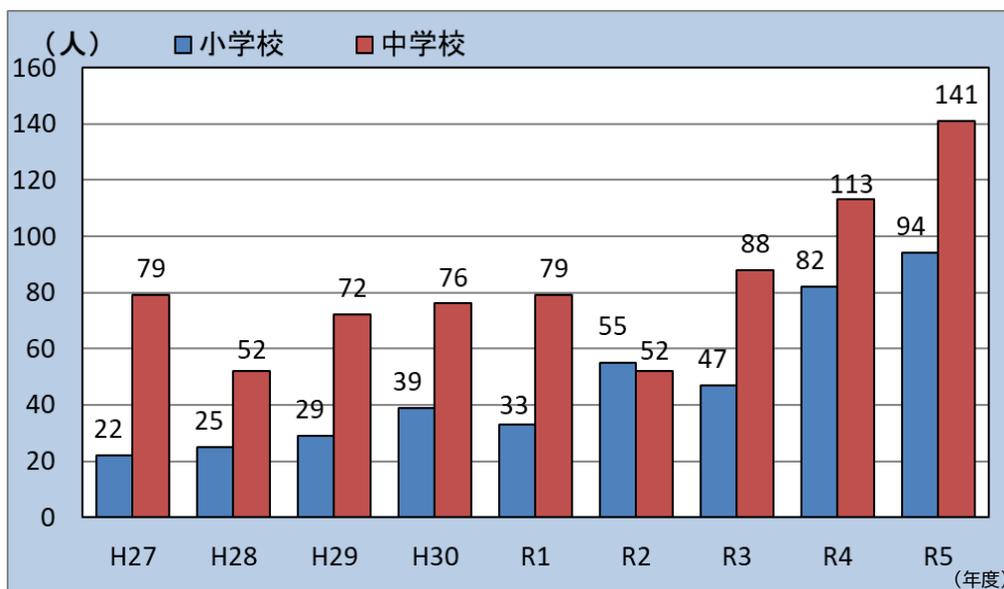
ア、不登校の状況

本市における不登校の児童生徒数は、特にコロナ禍以降、小中学校共に増加傾向にあり、令和5(2023)年度は小学校が94人、中学校が141人となっています。

また、様々な支援を受けることで登校ができるようになったり、状況が改善する児童生徒が着実にいる一方で、新たに不登校になる児童生徒がその数を上回っており、結果として不登校の児童生徒数が増加する状況となっています。

今後は、不登校の児童生徒への「継続支援」「早期発見・早期対応」「未然防止」の各観点から、市全体であらゆる不登校対策の早急な推進が必要です。

【不登校の児童生徒数の推移（平成27年度～令和5年度）】



出典：伊勢原市教育委員会

イ、不登校の児童生徒への継続支援・早期発見・早期対応・未然防止の取組

本市では、不登校の児童生徒の心の居場所や学習機会を確保するため、スクールカウンセラーや教育センター相談員による教育相談をはじめ、スクールソーシャルワーカーの活用や教育支援教室「やまどり」における指導・支援・相談等を行っています。

今後は、これらの取組に加え、多様な学びの機会の確保をはじめ、NPO等の民間団体との密なる連携による取組とともに、より早い段階からの組織的な対応、さらには、新たな不登校を生まない更なる魅力ある学校づくりに取り組んでいくことが必要です。

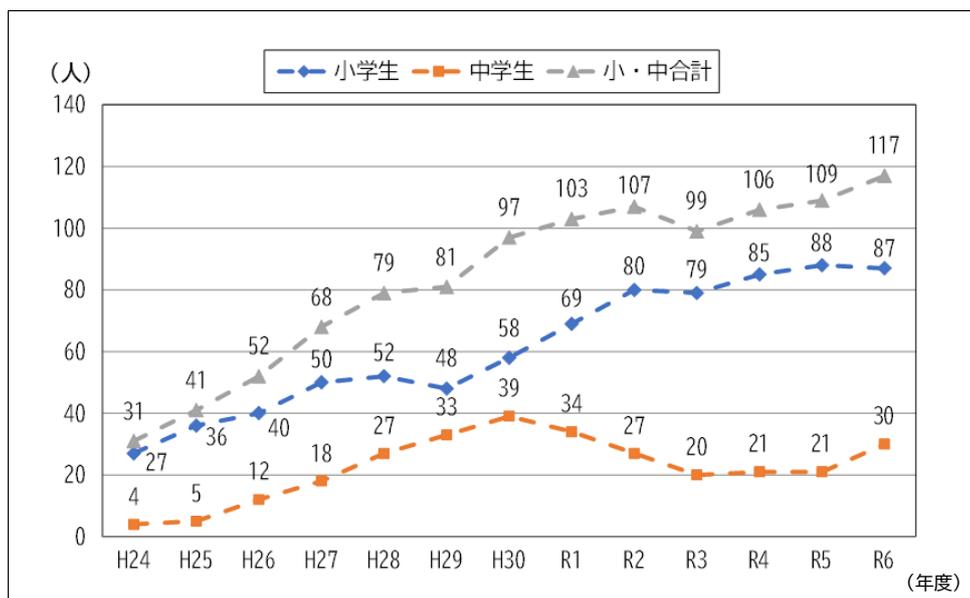
(3) 外国につながるの児童生徒への支援

ア、日本語指導を必要とする児童生徒の状況

外国につながりがあり、日本語指導を必要とする児童生徒が年々増加する中、こうした児童生徒を支援するため、小中学校へ日本語指導協力者を派遣(令和6(2024)年度:14名)するなど、日本語指導や学習支援等を行っています。

今後とも取り扱う言語の多様化や来日したばかりの児童生徒への対応など、協力者の派遣等の支援策拡大が必要です。

【日本語指導を必要とする児童生徒の推移(平成24年度～令和6年度)】



出典:伊勢原市教育委員会

イ、国際教室による指導・支援

神奈川県基準では、外国籍の日本語指導を要する児童生徒数が1学校あたり5名以上在籍する場合に国際教室の担当教員が配置されます。本市における令和6年(2024)年度の国際教室設置校は、小学校10校中6校(伊勢原小学校、高部屋小学校、比々多小学校、成瀬小学校、桜台小学校、石田小学校)、中学校4校中2校(山王中学校、伊勢原中学校)となっています。

今後とも、外国につながるの児童生徒への支援及び全ての児童生徒への国際理解教育推進の観点から、国際教室の取組の充実が必要です。

7 地域とともにある学校

(1) 学校運営協議会(コミュニティ・スクール)と地域学校協働活動の連携

ア、学校運営協議会(コミュニティ・スクール)¹⁶⁾

本市の各小中学校では、従前より地域住民による教育活動への協力・支援が行われてきました。そうした中で、学校週5日制や総合的な学習の時間の新設をきっかけに、各学校に教職員、保護者、及び地域代表者等からなる「学校地域連絡会」が平成6(1994)年度に設置され、「開かれた学校づくり」に努めてきました。

その後、平成29(2017)年に「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」が改正され、学校運営協議会の設置が努力義務化されたことを踏まえ、本市では、令和4(2022)年度からは全小中学校で、「学校地域連絡会」に代わり「学校運営協議会(コミュニティ・スクール)」を導入しました。

イ、地域学校協働活動¹⁷⁾

平成29(2017)年の「社会教育法」の改正により地域学校協働活動が法で位置付けられたことから、令和4(2022)年には大山小学校区及び比々多小学校区に本市として初めて地域学校協働活動推進員を配置しました。令和7(2025)年度には、全ての小中学校区に地域学校協働活動推進員を配置し、子どもを中心に据えた地域づくりを目指し、地域の特色を生かした様々な活動を行っています。

今後は学校運営協議会(コミュニティ・スクール)との相乗効果を発揮した取組を推進するため、更なる連携・協働体制の構築が必要です。

(2) 学校施設が担う様々な役割や機能(学校と地域の関わり)

学校施設は、児童生徒の学習と生活の場であると同時に、地域コミュニティの拠点施設として様々な機能を併せ持つ可能性を有する、最も身近な公共施設の一つです。令和7(2025)年度現在、小中学校全14校が地震災害や風水害等の広域避難場所及び広域避難所に指定されており、地域の防災拠点施設としての役割を担っています。また、児童生徒の放課後の居場所・活動場所として、小学校全10校に

¹⁶⁾ 学校運営協議会(コミュニティ・スクール)

学校に設置する附属機関で保護者や地域住民等の代表を委員に任命し、校長が作成する学校運営の基本方針の承認など、一定の権限と責任を持って学校運営に参画する制度。

¹⁷⁾ 地域学校協働活動

地域住民、学生、保護者、PTA、民間企業、団体等の幅広い人材の参画を得て、地域全体で子どもたちの学びや成長を支えるとともに、子どもを中心に据えた地域づくりをめざして地域と学校がパートナーとして連携・協働して行う様々な活動。

「児童コミュニティクラブ」及び「いせはら未来っ子クラブ(放課後子ども教室)」が設置されています。さらに、小中学校のグラウンド及び体育館の開放により、地区の運動会や祭りなど、地域住民をはじめとする様々な団体のスポーツ活動や地域交流の拠点としての役割を担っています。

このように、学校施設は地域コミュニティと密接な関係にあるため、今後も地域住民の声を聞きながら、学校施設が有する多様な機能の有効活用に努める必要があります。

8 教職員が本来の業務に専念できる環境づくり

(1) ICT支援員の活用

本市では、児童生徒の1人1台端末の導入やそれらを活用した教育活動を進める中、教員がICTをより有効かつ円滑に活用できるよう、令和3(2021)年度からICT支援員を各学校に派遣(令和7(2025)年度:3名)しています。

ICT支援員は、教員への助言に加え、各種アプリ等のアカウント設定や機器の破損状況・動作確認、次年度への端末の円滑な移行など、多岐にわたる支援を行い、児童生徒や教員が安心してICTを利用できる環境を整えています。

本市のこうした取組は、国の事例集にも掲載・公開されるなど、先進的な特色ある取組であり、今後も更なる充実が必要です。

(2) 給食費等の公会計化

教職員の事務負担軽減や保護者の利便性の向上を図るため、これまで各学校で行っていた学校給食費及び学校教材費等の集金と執行について、令和7(2025)年度から市の会計に組み入れる公会計としました。

今後も、教職員の時間外勤務の削減や授業充実のための時間の確保とともに、教職員が児童生徒に向き合う本来業務に専念できる環境づくりが必要です。

(3) スクールロイヤー

複雑化・多様化する教育問題に対し、法律等の専門的な知識を活用した対応を図るとともに、法的課題に対する教員負担を軽減するため、令和5(2023)年度より教育保障やいじめ事案の推進役としてスクールロイヤー¹⁸⁾を配置(令和7(2025)年度:1名)しています。児童生徒の抱える問題が深刻化する中、今後もこうした専門家の活用を図っていく必要があります。

¹⁸⁾ スクールロイヤー

学校で起こるいじめや保護者対応、学校事故対応等、学校現場における様々な問題について法的な側面から解決に向けた支援を行う弁護士資格を有する者。

第3章 本市がめざす「これからの学校」

1 国の動向

(1) 令和の日本型学校教育の構築

中央教育審議会では、令和3(2021)年に「令和の日本型学校教育の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～」を答申し、その実現に向けた具体的な方策として、次の事項についての検討や対応を求めています。

- 9年間を見通した新時代の義務教育の在り方
- 学びを支える環境整備
- 人口動態を踏まえた学校運営や施設整備の在り方 等

(2) 第4期教育振興基本計画

国の第4期教育振興基本計画(令和5年6月16日閣議決定)では、総括的な基本方針・コンセプトとして、「令和22(2040)年以降の社会を見据えた持続可能な社会の創り手の育成」及び「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」を掲げ、これらの相互循環的な実現に向けた取組が進められるよう、教育政策を講じていくことが必要であるとしています。

また、上述の総括的な基本方針の下、次の5つの基本的な方針を定めています。

- ① グローバル化する社会の持続的な発展に向けて学び続ける人材の育成
- ② 誰一人取り残されず、全ての人の可能性を引き出す共生社会の実現に向けた教育の推進
- ③ 地域や家庭で共に学び支え合う社会の実現に向けた教育の推進
- ④ 教育デジタルトランスフォーメーション(DX)の推進
- ⑤ 計画の実効性確保のための基盤整備・対話

2 本市がめざす学校教育

(1) 伊勢原市第6次総合計画

令和5(2023)年度にスタートした「伊勢原市第6次総合計画」では、伊勢原の将来を担う子どもたちが、伊勢原への愛着と誇りを持ち、たくましく未来を切り拓いていくことのできる力を育てていくことを基本政策に掲げています。

具体的な施策においては、きめ細やかな指導体制の充実とともに、多様化・複雑化する課題に対応するため、切れ目のない相談・支援体制の充実を図ること、また、地域と共にある学校づくりを推進していくこととしています。

学校施設については、老朽化した施設の計画的な改修を図るとともに、教育の公平性や教育水準の維持向上を図るため、学校の規模及び配置の検討を進めることとしています。

(2) 伊勢原市第3期教育振興基本計画

本市の教育振興基本計画は、平成22(2010)年3月に策定した第1期の計画以降、「人がつながり 未来を拓く 学びあうまち伊勢原」を基本理念に掲げ、様々な教育施策を推進しています。

令和5(2023)年2月策定の第3期教育振興基本計画の基本理念では、人と人とのつながりや、学校・家庭・地域の相互の連携と協働により、子どもたちの可能性を引き出しながら、一人ひとりの「生きる力」を培い、持続可能な社会の担い手として未来を切り拓いていくための資質・能力をはぐくんでいくことを掲げています。

この基本理念の実現に向けて、学校教育分野においては、「一人ひとりの子どもの健やかな成長を支える」という視点の下、次の3つの「めざす教育の方向性」を示しています。

<めざす教育の方向性>

- 知・徳・体のバランスのとれた「生きる力」の育成
- 教育施策推進のための基盤と環境整備
- 学校・家庭・地域と連携・協働して行う教育の推進

(3) 伊勢原市学校施設個別施設計画

本市では令和4(2022)年3月に、学校施設の中長期的な維持管理に要する経費の縮減と予算の平準化を図りつつ、学校施設に求められる機能・性能を確保することを目的とした伊勢原市学校施設個別施設計画を策定しました。

本計画では、その整備方針において、次の4つの「学校施設の目指すべき姿」を掲げています。

<学校施設の目指すべき姿>

- 安全に過ごせる学校施設
- これからの教育に対応する学校施設
- 環境変化に対応できる学校施設
- 地域に開かれた学校施設

3 これからの学校像

本市の望ましい学校規模や学校配置に向けた検討を進めるにあたり、児童生徒数の減少など、学校教育を取り巻く現状や課題、国や本市が掲げる学校教育の方向性等を踏まえ、本市がめざす「これからの学校像」を次のとおり示します。

これからの学校像

多様な人や社会との関わりの中で、
児童生徒一人ひとりの可能性を引き出す学校

この学校像の実現に向けて、「学校教育のめざす方向性」として3つの視点ごとに、「主な推進方策」を示します。

なお、「これからの学校像」「学校教育のめざす方向性」「主な推進方策」については、国・県の動向等も踏まえ、教育振興基本計画の見直しに合わせ、改めて検討・確認することとします。

【学校教育のめざす方向性】

- ◆ 視点1 きめ細やかで、切れ目のない教育のために
- ◆ 視点2 地域に根ざした持続可能な教育のために
- ◆ 視点3 「新しい時代」の学びを支える教育環境のために

◆ 視点1 きめ細やかで、切れ目のない教育のために

【主な推進方策】

● チームによる指導体制の充実

授業の質の向上や児童生徒の自己肯定感、学びに向かう力等の醸成のため、教科担当制や少人数学級の推進等による指導体制の充実を図ります。



【実現イメージ】

より深い教材研究や指導法研究が行われ、授業の充実につながっている。

多くの教員が関わることで多面的な児童生徒理解につながっている。

● 多様なニーズに応じた支援

障がいや特性、不登校、外国とつながりのある児童生徒等、児童生徒一人ひとりの教育的ニーズに応じた支援を適切に提供できるよう、連続性のある「多様な学びの場」の充実を図ります。

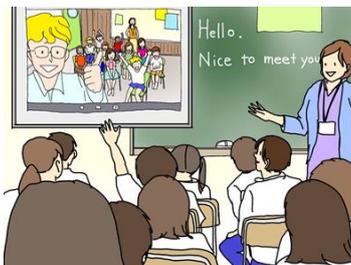


【実現イメージ】

自由度の高い間仕切りやパーテーションが整い、児童生徒の発達の段階や特性等に応じた学習が行われている。

● ICTの活用

従来の紙媒体での学習とともに、ICTの特性や強みを生かした教育を推進し、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図ります。



【実現イメージ】

一人ひとりの学習進度に応じた学びやオンラインでの交流学习などが行われている。

●小中一貫教育に向けた検討

小学校と中学校が目指す児童生徒像を共有するとともに、小学校6年間と中学校3年間を合わせた9年間を通じた教育課程の編成等により、系統性・連続性のある教育の実現を図ります。



【実現イメージ】

小学生の授業に中学生が関わるなど、小中学校の垣根を越えた交流が行われている。

◆ 視点 2 地域に根ざした持続可能な教育のために

【主な推進方策】

●体験活動の推進

地域の人材や文化財等の地域資源を活用した社会体験など、様々な体験活動や、それらを通じた児童生徒の主体的かつ探究的な学習の充実により、児童生徒の自己肯定感や豊かな人間性、自ら学び、自ら考える力等の育成を図ります。



【実現イメージ】

地域の人材が部活動や授業に関わるなど、地域人材の活用と交流が積極的に行われている。



【実現イメージ】

地元食材の活用等により、地域への興味や関心を促し、地域への愛着が育まれている。

●学校運営協議会(コミュニティ・スクール)と地域学校協働活動の推進

地域社会全体で子どもたちの豊かな学びや成長を支えるため、学校と地域の連携・協働により、学校運営協議会(コミュニティ・スクール)と地域学校協働活動を一体的に推進します。



【実現イメージ】

学校運営協議会(コミュニティ・スクール)では、学校のあり方について、さまざまな立場から意見交換が行われている。



【実現イメージ】

放課後や課外活動として、地域ボランティアと協力した地域のイベントや活動などが行われている。

◆ 視点3 「新しい時代」の学びを支える教育環境のために

【主な推進方策】

●多様な学習形態に対応するスペースの整備

1人1台端末をはじめ、学習・活動内容の変化を踏まえた教室整備や、多目的な学びに対応できる空間整備、教室周辺スペースの改善・充実等を検討し、多様な学習活動を展開できる教室空間の実現を図ります。

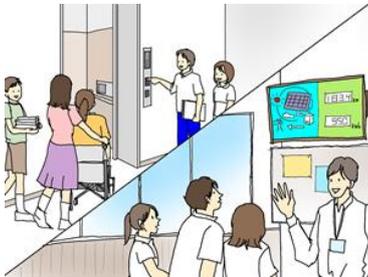


【実現イメージ】

様々な変化に対応する可変性のある教室が整備され、グループ学習など協働的な学びが効果的に行われている。

●安全・快適に利用できる持続可能な教育環境の整備

共生社会の実現に向け、みんなのトイレやエレベーター等のバリアフリー化を推進するとともに、脱炭素社会「ゼロカーボンシティいせはら」の実現に向け、再生可能エネルギーの導入と省エネルギー化の取組を推進します。



【実現イメージ】

全ての児童生徒が校舎内を円滑に移動できるよう、校内にはエレベーターが設置されている。

太陽光発電システムの導入により、校内に電気量を表示するシステム等が設置され、エネルギーの循環が見える化されている。

●教職員の執務環境の改善

教職員がより効果的・効率的に授業やその準備、校務等を行い、望ましい「学校風土」が醸成できるよう、必要なスペースと機能を確保するなど、教室や職員室、準備室等の執務環境の改善を図ります。



【実現イメージ】

教職員が打ち合わせをするスペースが整い、気軽に必要なコミュニケーションを図ることができている。

●地域コミュニティエリア等の整備

学校施設がこれまで担ってきた役割や機能を踏まえ、地域のコミュニティ機能や防災拠点機能、子育て支援機能など、学校施設の多機能化を推進し、学校と地域の連携・協働の活性化や多様な世代との交流の促進を図ります。



【実現イメージ】

学校に地域の公共施設の機能が併せて整備され、多様な世代の交流が行われている。

体育館には空調設備が整備され、地域の防災拠点としての機能が向上している。

第4章 望ましい学校規模・配置の考え方及び基準

1 望ましい学校規模

(1) 学校規模の定義

将来にわたる望ましい教育環境整備と教育水準の維持向上、及び本方針に掲げる「これからの学校像」の実現に向けて、本市における望ましい学校規模の基準を示します。

学校規模の基準は、平成27(2015)年1月に文部科学省より公表された「公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引き」(以下「国の手引き」という。)を踏まえ、「学級数(通常学級数)」で定めることとします。

(2) 国の基準(目安)

国では、小学校及び中学校の標準的な学級数について、学校教育法施行規則において、次のとおり定めています。

	標準的な学校規模(学級数)
小学校 中学校	1 2 学級から 1 8 学級 (小学校：1 学年当たり 2 学級から 3 学級) (中学校：1 学年当たり 4 学級から 6 学級)

また、本規則では、標準的な学級数について、地域の実態や特別の事情があるときはこの限りでないと規定されており、実際の判断については、学校設置者である各市町村が判断できる弾力的なものとなっているため、本市の実情に応じた「望ましい学校規模」の設定が求められています。

(3) 学校規模の偏りによるメリット・デメリット

国の手引き等を踏まえ、学校規模の偏りによる主なメリット・デメリットについて、次のように整理しました。

ア、学級数が少ないことによるメリット・デメリット

【主なメリット・デメリット】

項目	主なメリット	主なデメリット
学習面	<ul style="list-style-type: none"> 一人ひとりの学習状況を的確に把握でき、きめ細やかな指導を行いやすい。 体験学習や校外学習を機動的に行える。 異年齢の学習活動を組みやすい。 運動場や体育館、特別教室が余裕をもって使える。 授業等で意見や感想を発表できる機会が多くなる。 	<ul style="list-style-type: none"> 多様な発言が引き出しにくく、授業展開に制約が生じる。 習熟度別指導などクラスの枠を超えた多様な指導体系が取りにくい。 グループ学習や班行動が行いにくい。 球技や合唱・合奏のような集団学習の実施に制約が生じる。
生活面	<ul style="list-style-type: none"> きめ細やかな生活指導ができる。 一人ひとりがリーダーを務める機会が多くなる。 	<ul style="list-style-type: none"> 集団の中での社会性やコミュニケーション能力が身に付きにくい。 児童生徒の人間関係や相互の評価が固定化しやすい。 多様なものの見方や考え方、表現の仕方に触れることが難しい。 指導上課題がある子どもの問題行動に、クラス全体が大きく影響を受ける。
学校運営面	<ul style="list-style-type: none"> 児童生徒の家庭の状況、地域の教育環境などを把握しやすいため、保護者や地域と連携した効果的な生徒指導が行いやすい。 	<ul style="list-style-type: none"> クラス替えが全部または一部の学年でできない。 クラブ活動や部活動の種類が限定される。 教員それぞれの専門性を生かした教育が受けられない可能性がある。 教職員一人あたりの校務負担が重くなる。

イ、学級数が多いことによるメリット・デメリット

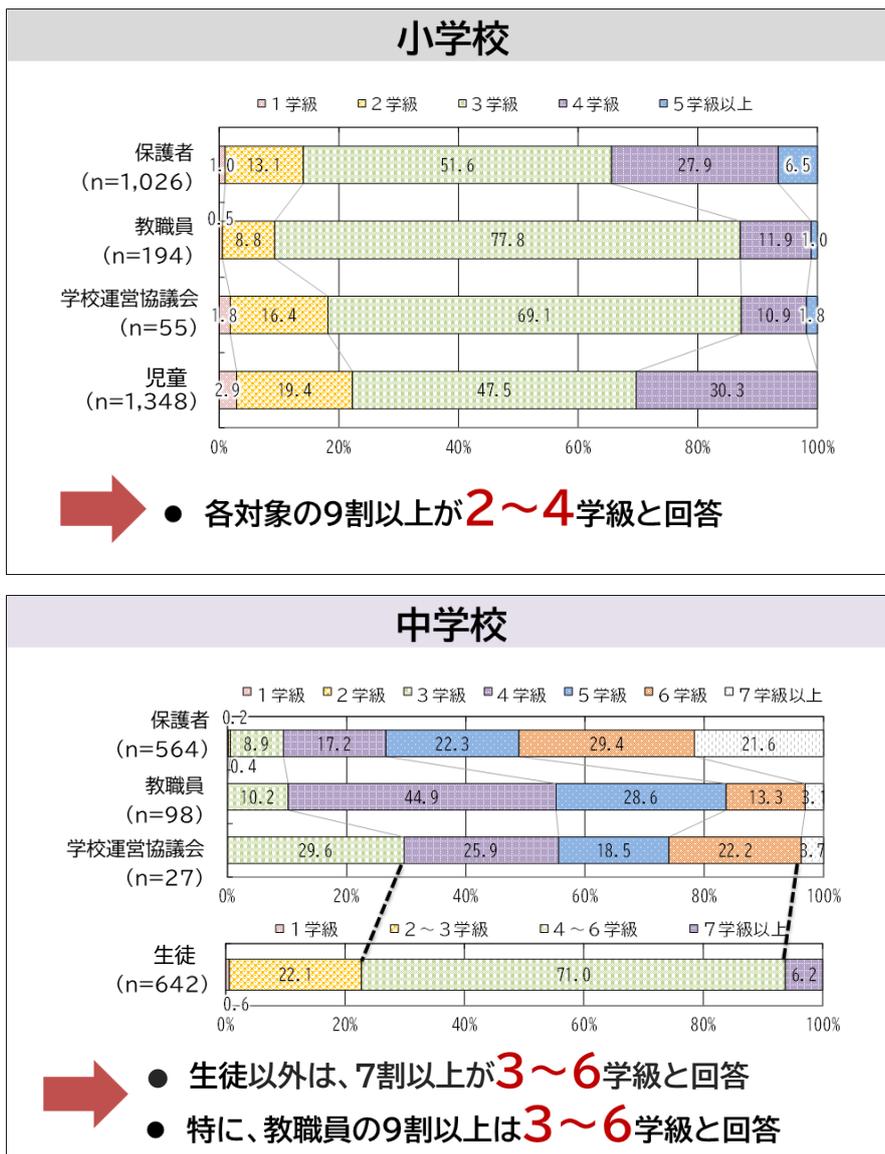
【主なメリット・デメリット】

項目	主なメリット	主なデメリット
学習面	<ul style="list-style-type: none"> ・切磋琢磨する環境の中で学力や学習意欲の向上が図りやすい。 ・グループ学習や班学習が活性化しやすい。 ・音楽、体育等の集団で行う活動や、クラブ活動が活性化しやすい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・グループ活動や学校行事等において、一人ひとりが活躍する場や機会が少ない。 ・特別教室や体育館、プール、グラウンド等の利用が制限される。
生活面	<ul style="list-style-type: none"> ・気の合う友人をつくりやすい。 ・男女比の偏りが発生しにくい。 ・多様な意見に触れる機会が得やすく、コミュニケーション能力が育ちやすい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・同学年の結びつきが中心となり、異学年交流の機会が設けにくい。
学校運営面	<ul style="list-style-type: none"> ・多くの教職員による多面的な観点で指導しやすい。 ・校内研修の活性化など、教職員間での協力意識が高まりやすい。 ・児童・生徒の人間関係を考慮したクラス替えがしやすい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教員が児童生徒一人ひとりの個性や行動を把握し、きめ細かな指導を行うことが難しい。 ・学校運営全般にわたり、校長が一体的なマネジメントを行ったり、教職員の共通理解が難しい場合がある。 ・教室不足により、特別支援教室等新しいニーズへの対応が難しい場合がある。

(4) 伊勢原市立小中学校の教育環境に関するアンケート結果

本方針の策定にあたり実施した「伊勢原市立小中学校の教育環境に関するアンケート¹⁹⁾」(以下「アンケート」という。)の結果では、「1学年あたりの望ましい学級数」という設問に対して、小学校では「2学級から4学級」と回答した割合が最も多く、中学校では「3学級から6学級」と回答した割合が最も多くありました。

【1学年あたりの望ましい学級数(アンケート結果抜粋)】



出典:伊勢原市教育委員会(令和6年度市立小中学校の教育環境に関するアンケート)

¹⁹⁾ 本方針の検討にあたり、保護者、教職員、児童生徒、及び地域関係者等の意識や考えを把握するため、令和6年度に市立小中学校の教育環境に関するアンケートを実施しました。

(5) 本市における望ましい学校規模(学級数)の基準

ア、基準の設定にあたっての基本的な考え方

学校規模の基準を「学級数(通常学級)」で定めるにあたっては、国の制度改正や市独自の少人数学級の取組の進捗状況のほか、インクルーシブ教育の推進に伴う学級数への影響に留意します。

また、特別支援学級については、近年増加傾向にあり、その動向に留意する必要がありますが、特別支援の学級編成が個々の支援ニーズに配慮した少人数の編成であるため、児童生徒数の多寡を測る基準となる学級数に含めることは適当ではないことから、特別支援学級は、学校規模(学級数)の基準に含めないこととします。

イ、本市における望ましい学校規模

基準の設定にあたっては、上記の基本的な考え方の下、法令や国の手引きをはじめ、学校規模の偏りによる学習・生活面や学校運営上のメリット・デメリット、さらには、アンケート結果等を踏まえ、本市における望ましい学校規模(学級数)の基準を次のとおり定めます。

	望ましい学校規模(学級数)
小学校	12学級から24学級 (1学年あたり2学級から4学級)
中学校	9学級から18学級 (1学年あたり3学級から6学級)

なお、これ以降は、本市における望ましい学校規模(学級数)を下回る学校を小規模校、上回る学校を大規模校と定義します。

2 望ましい学校配置

(1) 学校配置に関する基本的な考え方

学校配置の基準については、学校規模と同様に国の手引きを踏まえ、「通学距離と通学に要する時間」で定めることとします。

(2) 国の基準(目安)

ア、通学距離の考え方と目安

国の手引きでは、通学距離に関し、義務教育諸学校等の施設費の国庫負担等に関する法律施行令において、公立小中学校の通学距離を「小学校で概ね4キロメートル以内、中学校で概ね6キロメートル以内」と定めていることから、通学条件を通学距離によって捉えることが一般的であるとしています。

イ、通学時間の考え方と目安

国の手引きでは、スクールバスや公共交通機関を活用した自治体の事例が増えていることを踏まえ、通学時間は「概ね1時間以内」を一応の目安とし、地域の実情や児童生徒の実態に応じて判断を行うことが適当としています。

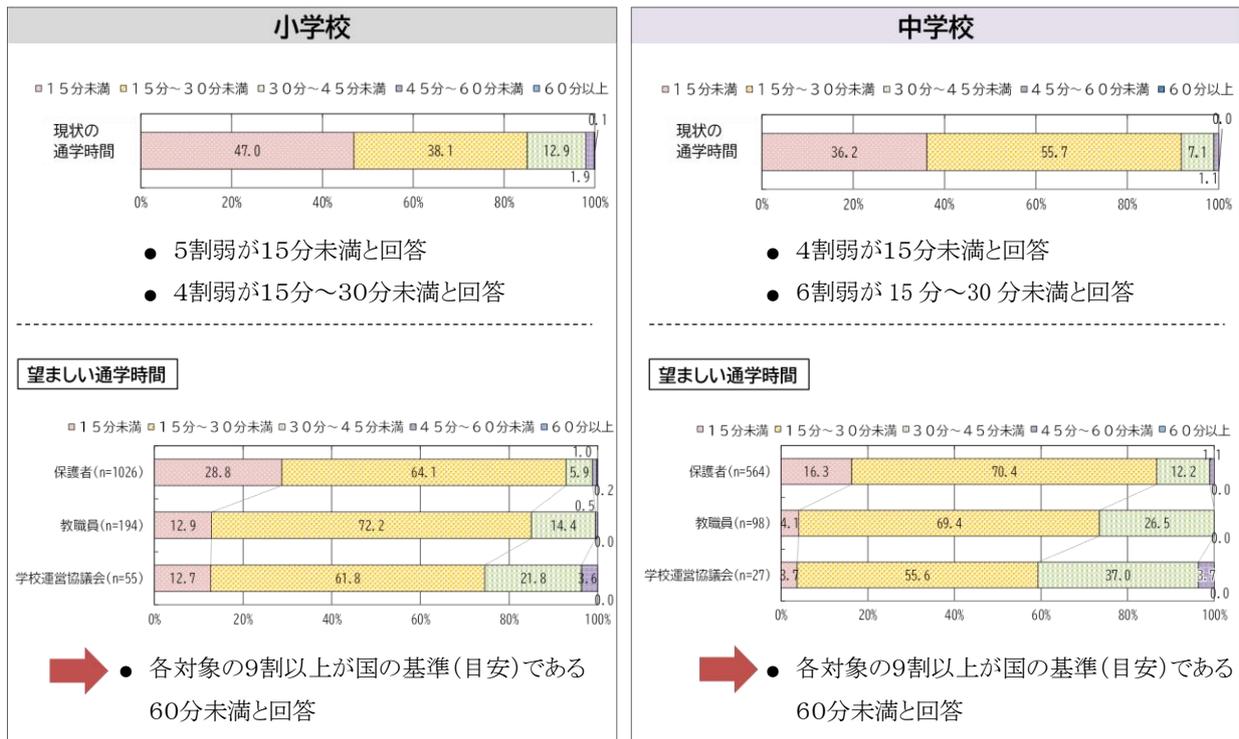
(3) 本市における通学距離の現状

第2章「3 通学区域及び通学距離」で述べたとおり、令和6年(2024)度時点の本市の児童生徒の通学距離は、大山小学校で実施している小規模特認校制度による通学区域外からの通学を除き、全ての小中学校で、国の基準である小学校4km圏内、中学校6km圏内となっています。

(4) 通学時間に関するアンケート結果

アンケート結果では、「現状の通学時間」と「望ましい通学時間」という各設問に対して、小・中学校共に「45分未満」と回答した割合が最も多く、現状の通学時間と望ましいと考える通学時間が概ね一致しています。

【現状の通学時間及び望ましい通学時間(アンケート結果抜粋)】



出典:伊勢原市教育委員会(令和6年度市立小中学校の教育環境に関するアンケート)

(5) 本市における望ましい学校配置(通学距離・通学時間)の基準

国の基準(目安)や各小中学校の現状の通学距離を踏まえ、本市の望ましい学校配置(通学距離と通学時間の上限)の基準を次のとおり定めます。

	望ましい学校配置(通学距離と時間の上限)	主な通学手段
小学校	概ね4km以内、60分以内	徒歩 等
中学校	概ね6km以内、60分以内	徒歩・自転車 等

第5章 望ましい学校規模等に近づけるための対応策及び時期

1 望ましい学校規模等に近づけるための対応策

(1) 想定される小規模校対策

本方針で定める本市の望ましい学校規模(学級数)の基準を下回る小規模校に対する対応策について、国が示す対応策を踏まえ、想定される本市の対応策を次のとおり示します。

【想定される対応策】

対応策	形態	対応策の説明	主なメリット	主な課題
地域の状況を踏まえた工夫	①小規模特認校制度 (大山小で実施中)	市全域から就学を容認	・学校規模の維持 ・特色ある教育が可能	・就学先として選択されない可能性 ・通学手段の確保
	②小規模校を分校化	小規模校を近隣の標準規模校の分校として位置付け	・小規模校及び標準校のメリットを享受 ・地域の学校を維持	・母体校と分校の行き来による専科教員等の負担増
通学区域の変更		通学区域の変更・再編成	・既存施設の有効活用	・通学距離の延長の可能性 ・学区と自治会の不整合等の懸念
統合 ※小中一貫教育校を含む	①既存校への統合	小規模校を標準規模校へ統合等	・既存施設の有効活用	・通学距離の延長の可能性 ・施設増設の必要性
	②新用地に新設統合	新たに用地を確保し、複数校を統合	・通学距離、学校規模の適正化	・用地選定 ・用地取得及び新規施設整備に伴う財政負担

(2) 小規模校対策の検討における学校区域の考え方

対応策を検討する学校区域の枠組みは、これまでの生活圏や地域の特性を考慮し、原則、昭和46(1971)年の市制施行前の旧町村域である、大山、高部屋、比々多、伊勢原、成瀬、大田の6地区(以下「地域ブロック」という。)とし、地域ブロック内における対応策を検討します。

地域ブロック内で効果的な対応策を行うことが困難な場合等においては、地域ブロックを越えた対応策を検討することとし、この場合は、現行の4つの中学校区の枠組みを基本とした対応策を検討します。

なお、地理的条件や地域特性を理由に、統合等の通学区域の再編成を伴う対応策を採用することが困難な場合は、対象校の存続に向けて小規模校のメリットを最大限生かす方策やデメリットの解消策等を検討します。

【地域ブロックの構成】

地区名	大山	高部屋	比々多	成瀬	伊勢原		大田
小学校	大山小学校	高部屋小学校	比々多小学校	石田小学校	伊勢原小学校	竹園小学校	大田小学校
				緑台小学校		桜台小学校	
				成瀬小学校			
中学校区	山王中学校			成瀬中学校	中沢中学校	伊勢原中学校	

出典:伊勢原市教育委員会

(3) 望ましい学校規模を実現する際の通学対策

望ましい学校規模の範囲に近づけるための対応策の検討に当たり、望ましい通学距離・通学時間を上回る場合等の想定される通学対策について、次のとおり示します。

【想定される通学対策】

対策	対策の説明	主なメリット	主な課題
公共交通機関(バス等)の利用	バス等の公共交通機関の利用	<ul style="list-style-type: none"> ・定期運行が可能 ・市による乗降場所の確保等が不要 ・公共交通の利用促進により、路線バス等の維持に寄与 ・公共交通機関の乗り方の習得 	<ul style="list-style-type: none"> ・バス路線、本数の減少 ・バス代に対する支援 ・路線バスの運行がない地域への対応 ・満員で乗車できない場合や車内トラブルの危険性 ・公共交通機関の乗り方指導
スクールバスの運行	児童・生徒が通学する専用のバスを運行	<ul style="list-style-type: none"> ・乗降場所の設定が可能 ・満車で乗車できないことや車内トラブルの危険性が低い 	<ul style="list-style-type: none"> ・市の財政負担 ・乗降場所の確保 ・乗り遅れた場合の対応
自転車での通学を容認(中学校のみ)	自転車を利用した通学を認める	<ul style="list-style-type: none"> ・自転車を保有している場合は、金銭的な負担が少ない ・自転車の乗り方に関する安全意識の醸成 	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭の自転車購入の負担 ・自転車事故等に対する安全対策 ・学校敷地への駐輪場整備
住所地から近接する学校への通学を容認	住所地により定められている就学指定校から、通学距離が短い学校への通学を認める	<ul style="list-style-type: none"> ・通学に係る家庭及び市の負担軽減 ・制度導入が容易 	<ul style="list-style-type: none"> ・就学指定校より近い場所の学校が存在しない可能性 ・学校選択により学校規模が偏る可能性 ・通学路の安全対策

2 小規模校対策の検討を開始する基準及び時期

(1) 基本的な考え方

国の手引きでは、学校規模の標準を下回る場合の検討を始める目安について、学級数に応じてその段階を区分しています。また、児童生徒数や中長期的な児童生徒数の予測、学習状況等を踏まえ、総合的な判断が必要だとしています。

本市では、基準を下回る場合の対応策の検討を始める時期について、国の目安や対応内容、地域の実情を踏まえ、次のとおり示します。

なお、今後、単学級の学年が生じる学校(または既に生じている学校)については、学校規模の縮小や児童生徒数の減少が更に進むことが見込まれる段階で検討を開始します。

(2) 検討を開始する基準及び時期

ア、基本的な検討開始の基準

学校規模の状態 (小中学校共通)	1つ以上の学年が単学級、かつ 今後、学校規模の更なる縮小が見込まれる状態※ ※児童生徒数の将来推計において、半分を越える学年で単学級となる ことが見込まれる状態。(小学校:8学級以下、中学校:4学級以下)
検討開始時期	毎年度、住民基本台帳を基に6年後までの児童生徒数及び学級数の推計を行っていることから、上記の状態が見込まれる時期の6年前から検討を開始します。

イ、優先的に検討を開始する基準及び時期

学校規模の状態 (小中学校共通)	全ての学年が単学級
検討開始時期	本基本方針に基づき、早期に検討を開始する。

《上記基準に基づき、優先的に対応策を検討する学校》

学校名	基準該当年度	学級数/児童数	検討開始年度
大山小学校	令和7(2025)年度	6学級/54人	令和8(2026)年度以降

3 大規模校対策の考え方

基準を上回る大規模校化が予測される学校に対しては、児童生徒数の推移を見極めながら、将来にわたって適正な学校運営を維持するため、必要な対応策を総合的に検討し、課題の解決を図ります。

第6章 望ましい学校規模等に向けた対応策の検討(小規模校対策)

1 小規模校対策の基本的な検討の考え方及び手順

(1) 検討の考え方

小規模校に対する対応策の検討は、第5章で示した「小規模校対策の検討を開始する基準及び時期」に基づき開始します。

対象校の検討にあたっては、児童生徒の教育機会等の確保や学びの保障の視点はもとより、これまでの学校活動や地域との関わりなど、対象校を取り巻く環境や地域の実情を十分踏まえ、長期的な児童生徒数の動向も見定めながら慎重な検討を行います。

(2) 検討の手順

ア、庁内における現状・課題、及び方向性の整理

対象校の実情に応じた幅広い視点による検討を行うため、対象校の現状や課題の整理をはじめ、アンケート等により保護者や学校関係者、地域住民の意識を把握しながら慎重な検討を進め、市としての方向性をまとめる「(仮称)学校個別計画(素案)」を作成します。

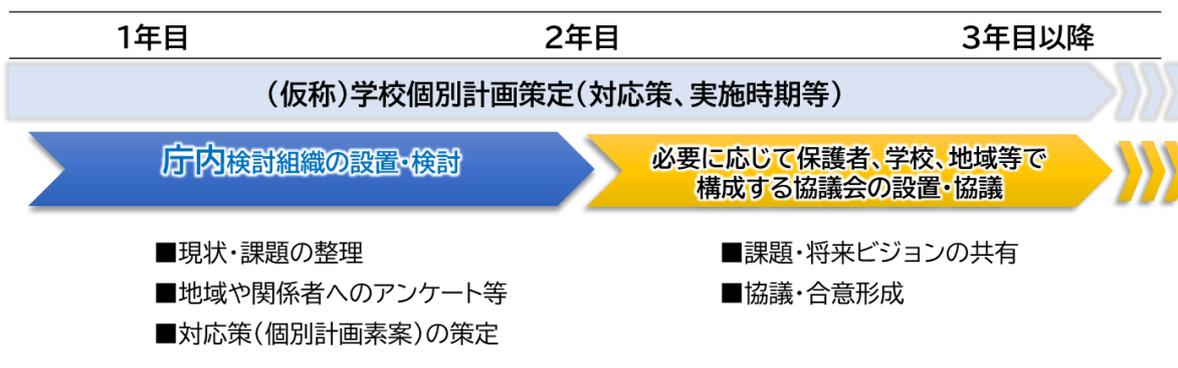
イ、保護者、地域住民、学校関係者等との協議による合意形成

「(仮称)学校個別計画(素案)」に基づき、保護者や地域住民、学校等の様々な関係者と課題や将来ビジョンの共通認識を図りながら、対象校のより良い将来の在り方を協議し、合意形成を諮ります。

ウ、「(仮称)学校個別計画」の策定及び計画に基づく対応

保護者や地元住民等との合意形成を踏まえて「(仮称)学校個別計画」を策定し、同計画に基づく対応に向けた取組を進めます。

【対応策の検討スケジュール(イメージ)】



2 対応策の検討にあたり配慮すべき事項

(1) 児童生徒を取り巻く環境への配慮

いずれの対応策の検討にあっても、児童生徒の学習環境や生活環境への影響及び教育条件の改善の観点を考慮して検討します。

(2) 通学時の安全確保と負担軽減

通学区域の再編成が必要な場合は、通学時の安全確保を図るとともに、通学距離や通学時間が延長する場合の通学負担の軽減を考慮し、第5章で述べた通学対策を検討します。

(3) 地域との連携と配慮

学校は地域におけるスポーツ・文化活動等の多様な交流やコミュニティの拠点であるほか、防災や子育て等の拠点施設としての機能を有することから、検討にあたっては児童生徒の教育的な観点を第一としつつ、地域とのつながりや多面的な側面を考慮し、地域住民との丁寧な話し合いを行いながら進めます。

また、統合等により通学区域の再編成を伴う場合は、地域コミュニティへの様々な影響(希薄化、分断、活力低下等)を考慮し、必要な対応を併せて検討します。

(4) 公共施設の最適化と学校施設個別施設計画との整合

学校施設の整備を伴う場合は、学校施設に求められる社会的要請等を考慮し、社会教育施設等の他の公共施設との複合化についても検討します。また、必要に応じて、学校施設個別施設計画に位置付ける検討対象校の施設整備(建替え、長寿命化改修等)の時期との整合・調整を図りながら検討します。

(5) 都市づくりの視点

対応策の検討にあたっては、中長期的な視点から将来都市像や都市づくりの方向性を示す「伊勢原市都市マスタープラン」や「伊勢原市立地適正化計画」など、本市の都市づくりの考え方に留意します。

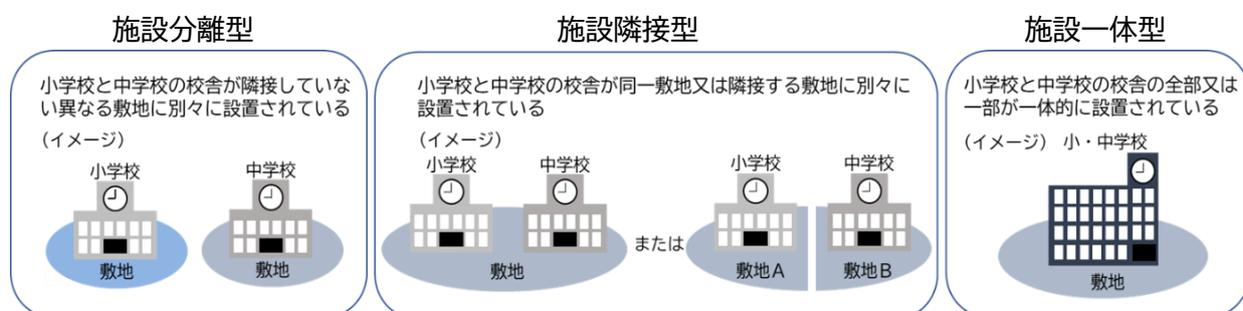
3 望ましい学校規模等に向けた対応策と併せた小中一貫教育の検討

～きめ細やかな教育の実現に向けて～

望ましい学校教育に向けた対応策の検討と併せ、本方針でも示している「きめ細やかな教育の実現」を図るため、9年間を通じた教育課程の編成等により、系統적かつ連続性のある教育の実現を目指す小中一貫教育の検討を進めます。

なお、小中一貫教育や学校施設の効果的かつ効率的な再整備を推進するため、小規模校対策の検討開始基準に合致しない場合であっても、関連する学校の児童生徒数の動向等を踏まえながら、通学区域の再編成を伴う小中一貫教育の検討を進める場合があります。

【(参考)小中一貫教育における施設形態の分類】



※分類の定義は文部科学省 HP「小中一貫教育に適した学校施設の在り方について～子供たちの9年間の学びを支える施設環境の充実に向けて～(平成27年7月 学校施設の在り方に関する調査研究協力者会議)」より引用。

伊勢原市立小中学校の望ましい学校規模等に関する基本方針

令和8(2026)年●月

伊勢原市教育委員会 教育総務課

住所 〒259-1188 伊勢原市田中 348 番地

電話 0463-74-5104(直通)

E-mail k-soumu@isehara-city.jp

令和7年度
全国学力・学習状況調査

結果及び分析



伊勢原市公式イメージキャラクター
クルリン

伊勢原市教育委員会教育指導課

令和7年度 全国学力・学習状況調査の伊勢原市結果の分析について

伊勢原市教育委員会

伊勢原市では、児童生徒の学力や学習状況に関し、継続的な検証改善サイクルの確立を目的として、文部科学省「令和7年度 全国学力・学習状況調査」を実施しました。

伊勢原市立小中学校の調査結果の概要をお知らせします。

【調査日時】 令和7年4月14日(月)～17日(木)

【調査対象学年・参加人数】 小学校6年生 725人 中学校3年生 654人

【調査内容】

1 教科に関する調査

- ・小学校:国語、算数、理科 中学校:国語、数学、理科
- ・出題範囲:調査する学年の前学年まで
- ・出題内容:「知識・技能」及び「活用」に関する問題を一体的に出題
- ・出題形式:記述式の問題を一定割合で導入

2 児童生徒に対する質問調査、学校に対する質問調査

【調査結果についての留意事項】

- 実施教科が国語、算数・数学、理科の3教科であり、学習指導要領のすべてを網羅するものではないことから、児童生徒が身に付けるべき学力の特定の一部であること。
- 年度によって問題の質が異なるため、平均正答率の経年変化のみから、学力の向上、低下の傾向を評価することは難しいこと。

1 教科に関する調査の結果から

(1)平均正答率

小中学校共に、全国及び神奈川県と比較して、正答数・正答率と大きな差は見られませんでした。

《令和7年度 教科に関する調査の平均正答数と平均正答率(%) (公立小中学校)》

令和7年度	小学校調査						中学校調査					
	国語		算数		理科		国語		数学		理科	
	(14問)		(16問)		(17問)		(15問)		(16問)		(26問)	
	正答数 (問)	正答率 (%)	IRT スコア									
伊勢原市	9.2	66	9.0	56	9.6	56	7.8	56	7.7	52	525	

※市の平均正答率は、国から小数第1位を四捨五入した整数値で提供されています。

※「IRT」とは、正答・誤答が、問題の特性(難易度、測定精度)によるのか、児童・生徒の学力によるのかを区別して分析し、児童・生徒の学力スコアを推定する統計理論のこと。

※「IRT スコア」とは、IRT に基づいて500を基準にした得点で表すもの。

(2)教科・設問ごとの分析結果

教科に関する調査結果について、各教科・設問ごとに分析したところ、習得の状況が良好であると見られる特長と指導の改善・充実が求められる課題が見られました。

小学校各教科の主な特長と課題

小 学 校	国 語	特 長	<ul style="list-style-type: none"> ・時間の経過による言葉の変化や世代による言葉の違いに気づくことができる。 ・自分が聞こうとする意図に応じて、話の内容を捉え、話し手の考えと比較しながら、自分の考えをまとめることができる。
		課 題	<ul style="list-style-type: none"> ・情報と情報との関連付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し使うことができる。 ・目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりするなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができる。 ・目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見つけることができる。
	算 数	特 長	<ul style="list-style-type: none"> ・角の大きさについて理解している。 ・伴って変わる二つの数量の関係に着目し、必要な数量を見いだすことができる。
		課 題	<ul style="list-style-type: none"> ・数直線上で、1の目盛りに着目し、分数を単位分数の幾つ分として、捉えることができる。 ・目的に応じて適切なグラフを選択して出荷量の増減を判断し、その理由を言葉や数を用いて記述できる。 ・分数の加法について、共通する単位分数を見だし、加数と被加数が、共通する単位分数の幾つ分かを数や言葉を用いて記述できる。
	理 科	特 長	<ul style="list-style-type: none"> ・電流がつくる磁力について、電磁石の強さは巻数によって変わることの知識が身に付いている。 ・赤玉土の粒の大きさによる水のしみ込み方の違いについて、赤玉土の量と水の量を正しく設定した実験の方法を発想し、表現することができる。 ・赤玉土の粒の大きさによる水のしみ込み方の違いについて、【結果】や【問題に対するまとめ】を基に、他の条件での結果を予想して、表現することができる。
		課 題	<ul style="list-style-type: none"> ・身の回りの金属について、電気を通す物、磁石に引き付けられる物があることの知識が身に付いている。 ・乾電池のつなぎ方について、直列つなぎに関する知識が身に付いている。 ・発芽するために必要な条件について、実験の条件を制御した解決の方法を発想し、表現することができる。 ・レタスの種子の発芽の条件について、差異点や共通点を基に、新たな問題を見だし、表現することができる。

中学校各教科の主な特長と課題

中 学 校	国 語	特 長	<ul style="list-style-type: none"> ・ 事象や行為を表す語彙について理解している。 ・ 目的に応じて、集めた材料を整理し、伝えたい事を明確にすることができる。 ・ 文章全体と部分との関係に注意しながら登場人物の設定の仕方を捉えることができる。
		課 題	<ul style="list-style-type: none"> ・ 文脈に即して漢字を正しく使うことを理解している。 ・ 資料や機器を用いて、自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫することができる。 ・ 文章の構成や展開について、根拠を明確にして考えることができる。
	数 学	特 長	<ul style="list-style-type: none"> ・ 必ず起こる事柄の確率について理解している。 ・ 事象に即して、グラフから必要な情報を読み取ることができる。
		課 題	<ul style="list-style-type: none"> ・ 素数の意味を理解している。 ・ 一次関数 $y = ax + b$ について、変化の割合を基に、x の増加量に対する y の増加量を求めることができる。 ・ 式の意味を読み取り、成り立つ事柄を見だし、数学的な表現を用いて説明することができる。 ・ ある事柄が成り立つことを構想に基づいて証明することができる。
	理 科	特 長	<ul style="list-style-type: none"> ・ 身近な電化製品の電気回路について探究する学習場面において、回路に抵抗がついている理由を問うことで、抵抗に関する知識が概念として身に付いている。 ・ 気圧に関する身近な事象を問うことで、気圧の知識が概念として身に付いている。 ・ スケッチから分かることを問うことで、スケッチに関する知識及び技能が身に付いている。 ・ ガス警報器の設置場所が異なる理由を考える学習場面において、実験の様子と、密度に関する知識および技能を関連付けて、それぞれの気体の密度の大小関係を分析して解釈できる。
		課 題	<ul style="list-style-type: none"> ・ 水の中の生物を観察する場面において、呼吸を行う生物について問うことで、生命を維持する働きに関する知識が概念として身に付いている。 ・ 塩素の元素記号を問うことで、元素を記号で表すことに関する知識及び技能が身に付いている。 ・ 【考察】をより確かなものにするために、音に関する知識及び技能を活用して、変える条件に着目した実験を計画し、予想される実験の結果を適切に説明できる。 ・ 化学変化に関する知識及び技能を活用して、実験の結果を分析して解釈し、化学変化を原子や分子のモデルで表すことができる。

※上記の各教科の課題を踏まえた方策については、p. 10～11（「4 学校がよりよい授業実践に向けて重視していきたいこと」）に示してあります。

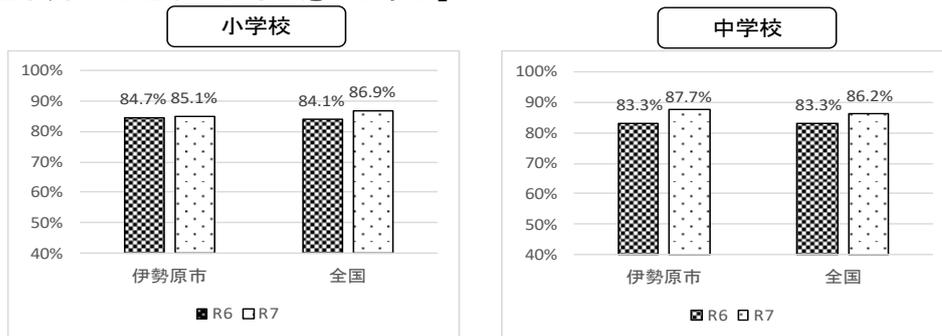
2 児童生徒質問調査の結果から

* 各グラフの数値は、質問に対して「あてはまる」「ややあてはまる」と回答した児童生徒の割合を示しています。

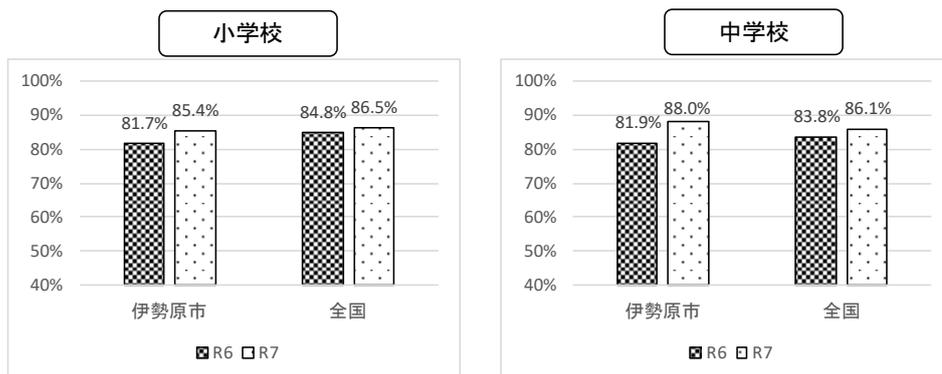
(1) 児童生徒の生活に対する意識に関して

- ・「自分にはよいところがある」と感じている児童生徒の割合は、昨年度から小学校では0.4%、中学校では4.4%増加した。また、「学校に行くのが楽しい」と感じている児童生徒の割合は、昨年度から小学校では3.7%、中学校では6.1%増加した。
- ・一方で、1～2割程度の児童生徒が「自分にはよいところがある」「学校に行くのが楽しい」と感じていないことを踏まえ、これからも引き続き、日ごろからの教職員のあたたかな声かけなどを通して、児童生徒のよさや可能性を積極的に認めるとともに、児童生徒がお互いを認め合える授業づくりや学級づくりに取り組んでいくことが大切である。

Q「自分には、よいところがありますか」

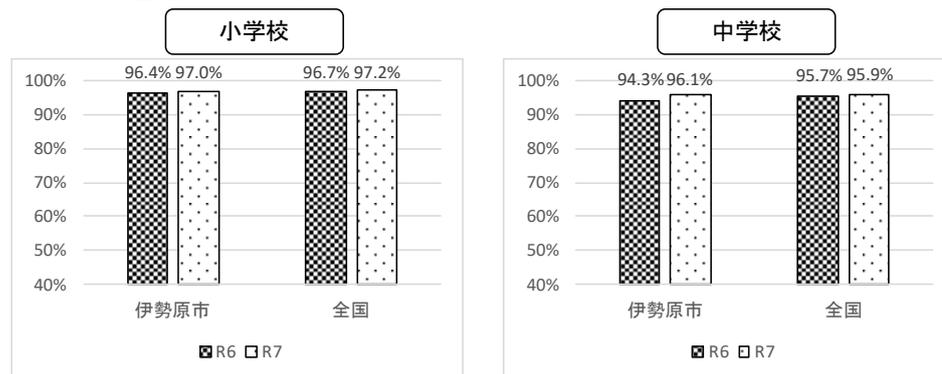


Q「学校に行くのは楽しいと思いますか」



- ・「いじめはどんな理由があってもいけないことだと思う」と回答している児童生徒の割合は、昨年度から小学校では0.6%、中学校では1.8%増加した。「どちらかという当てはまる」と回答した児童生徒の割合は昨年度から小学校で0.8%、中学校で0.6%減少したが、「当てはまる」と回答した児童生徒の割合が、昨年度から小学校では1.4%、中学校では2.4%増加した。
- ・「いじめはどんな理由があってもいけないこと」という認識を高める取組については、引き続き、日ごろの学校生活の中で、児童生徒の発言や行動に目を配り、冗談やふざけの場面であっても、受けとめた児童生徒が、心身の苦痛を感じている内容になってないかどうか十分に注意を払い、個に応じて指導していく必要があると考える。

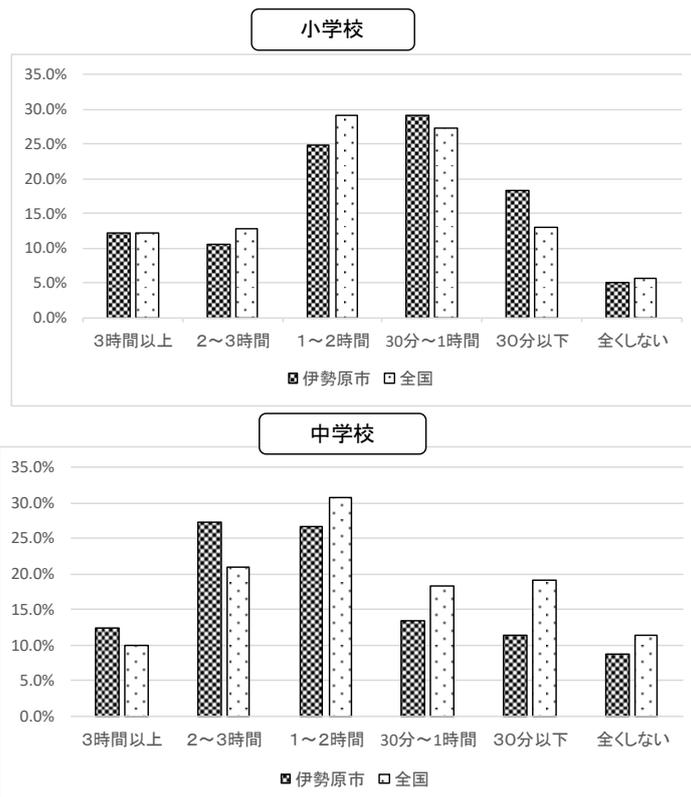
Q「いじめはどんな理由があってもいけないことだと思いますか」



(2) 家庭学習に関して

- ・学校の授業時間以外で月曜日から金曜日についての1日あたりの勉強に充てる時間の割合は、小学校では全国と比較して大きな差はないが、昨年度と比較すると小学校では「3時間以上」の割合が増加した。中学校では全国と比較すると昨年度と同様、学習時間が2時間以上の割合が高い状態であった。
- ・家庭学習においては、学習時間のみを重視するのではなく勉強方法や学習課題が明確になることで、主体的に学習に取り組む意欲につながると考える。また、学校と家庭が連携を図り、学校の学びを家庭へつなげる指導や工夫も大切である。

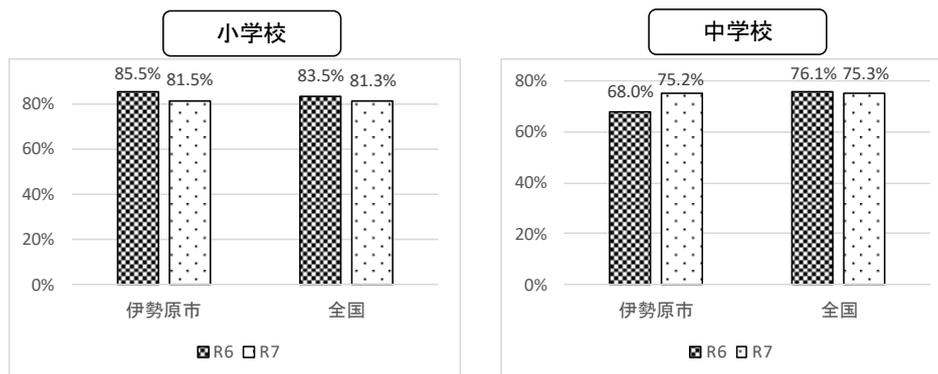
Q「学校の授業時間以外に、普段(月曜日から金曜日)、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか(学習塾で勉強している時間や家庭教師に教わっている時間、インターネットを活用して学ぶ時間も含む)」



(3) 地域や社会に関わる活動等の状況について

- ・「地域や社会をよくするために何かしてみたい」と考える児童生徒の割合は、昨年度から小学校では4%減少し、中学校では7.2%増加した。
- ・今後も引き続き、地域や社会の魅力やよさを生かした学習活動だけではなく、地域や社会の抱える課題を見つけるなど、地域や社会に関わろうという意識を育むため、地域や家庭と連携をより図ることが必要である。

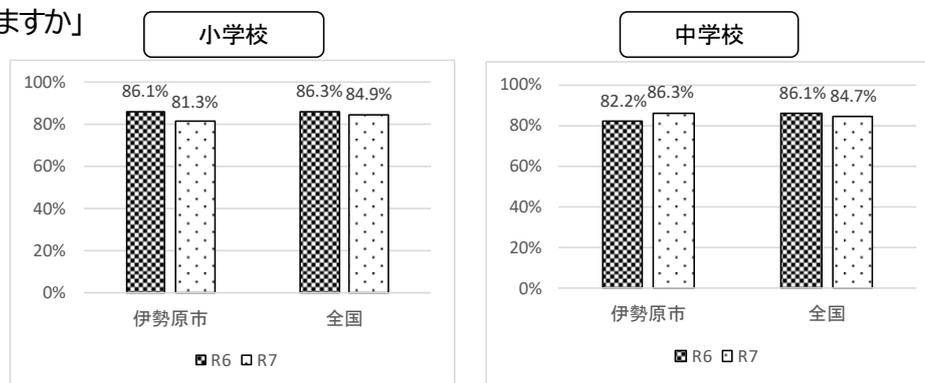
Q「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか」



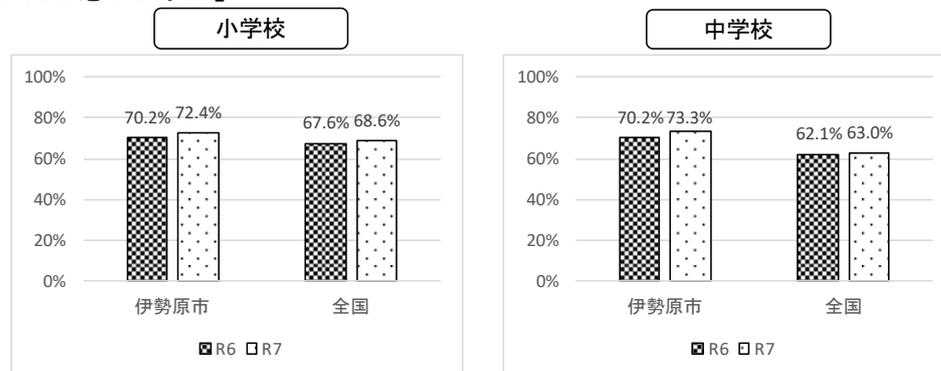
(4) 主体的・対話的で深い学びの視点から

- ・「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気づいたりすることができている」と感じている児童生徒の割合は、昨年度から小学校では4.8%減少し、中学校では4.1%増加した。引き続き、身に付けさせたい力を明確にし、意図的・計画的に他者と交流する活動を取り入れた授業を行うことが大切である。
- ・「自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表している」と感じている児童生徒の割合は、昨年度と比較すると小学校で2.2%、中学校で3%増加しており、全国と比較しても依然として高い。
- ・「課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる」と感じている児童生徒の割合は昨年度と比較して、小学校では3.6%、中学校で2.5%減少した。発達段階に応じた課題の設定や発問の工夫が重要であるとともに、解決の過程を振り返る活動等を通して、充実感や達成感が実感できるような場面の設定も大切である。

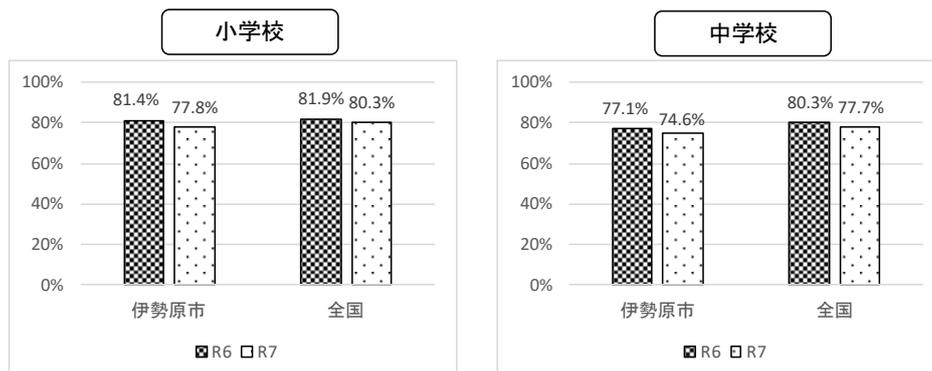
Q「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気づいたりすることができていると思いますか」



Q「自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していたと思いますか」



Q「課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」

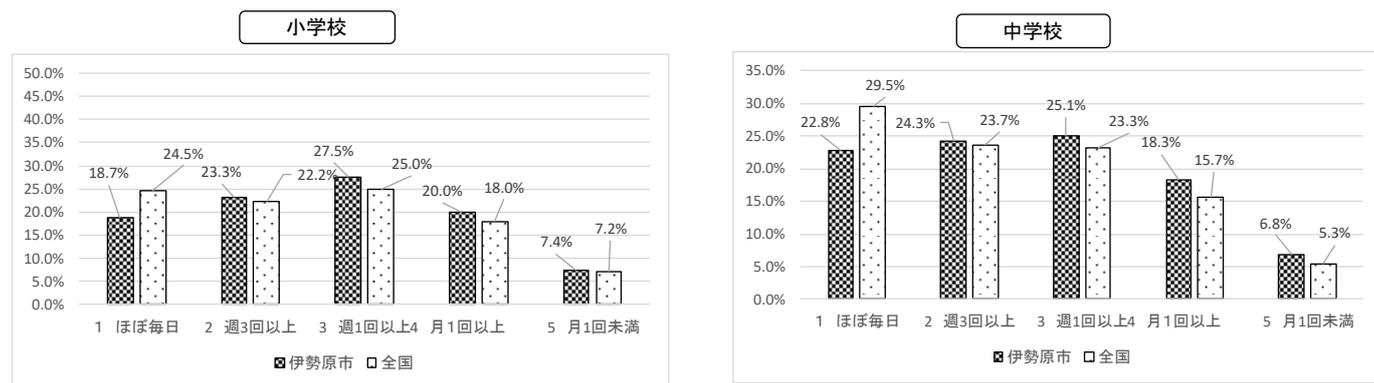


(5) ICTを活用した学習状況

・授業でのPC・タブレットの利用の頻度は、小学校では昨年度と比較すると、「ほぼ毎日」は2%増加し、「週3回以上」で18.2%、「週1回以上」で3.2%減少しており、週1回以上使用している数値は69.5%である。中学校では昨年度と比較すると、「ほぼ毎日」は4.1%増加し、「週3回以上」で15.8%、「週1回以上」で5.5%減少した。

・PC・タブレットは、黒板や紙、鉛筆、ドリルといった学習用具や教材の一つとして、児童生徒のよりよい学びにつながるよう、より効果的な活用を図っていくことが大切である。具体的には、知りたいことを調べる場面、他者と意見共有したり試行錯誤する場面、自分の考えをまとめたり発表したりする場面など、育みたい資質能力や児童生徒の実態や発達段階、教科の特性により工夫する必要がある。

Q「5年生(2年生)までに受けた授業で、PC・タブレットなどのICT機器をどの程度使用しましたか」



3 児童生徒質問調査と教科に関する調査のクロス集計結果から

児童生徒質問調査の結果と教科に関する調査結果との関係を見ると、次のような児童生徒の方が、教科の正答率が高い傾向が見られました。

◇ 基本的な生活習慣等

- ・朝食を毎日食べている。
- ・毎日、同じくらいの時刻に寝ている。
- ・毎日、同じくらいの時刻に起きている。
- ・自分には、よいところがあると思う。

◇ 家庭学習のようす

- ・分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することができる。
- ・家に本がある(雑誌、新聞、教科書は除く)。
- ・新聞を読んでいる。

☆学習習慣を確立することは、その後の生涯にわたる学習に影響する極めて重要な課題であることから、家庭との連携を図りながら、宿題や予習・復習など家庭での学習課題を適切に課したり、発達の段階に応じた学習計画の立て方や学び方を促したりするなど家庭学習も視野に入れた指導を行う必要がある。

小学校学習指導要領解説 総則編 平成29年3月 第3章第1節2(1)

中学校学習指導要領解説 総則編 平成29年3月 第3章第1節2(1)

◇ ICT を活用した学習状況

- ・PC・タブレットなどの ICT 機器で文章を作成する(文字、コメントを書くなど)ことができる。
- ・インターネットを使って情報を収集する(検索する、調べるなど)ことができる。
- ・PC・タブレットなどの ICT 機器を使って情報を整理する(図、表、グラフ、思考ツールなどを使ってまとめる)ことができる。
- ・PC・タブレットなどの ICT 機器を使って学校のプレゼンテーション(発表のスライド)を作成することができる。

◇ 言語活動の充実、主体的・対話的で深い学びの視点

- ・5年生まで(中学校調査では「1、2年生のとき」)に受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していた。
- ・5年生まで(中学校調査では「1、2年生のとき」)に受けた授業で、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいた。
- ・5年生まで(中学校調査では「1、2年生のとき」)に受けた授業では、各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行っていた。
- ・学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気づいたりすることができている。
- ・学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができている。

☆主体的に、対話的に、深く学んでいくことによって、学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解したり、未来を切り拓くために必要な資質・能力を身に付けたり、生涯にわたって能動的に学び続けたりすることができる。

次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ 平成28年8月26日

☆学校の教育活動を進めるに当たっては、各学校において、第3の1に示す主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を通じた特色ある教育活動を展開する中で、..(中略)..児童・生徒に生きる力を育むことを目指すものとする。

小学校学習指導要領解説 総則編 平成29年3月 第3章第1節2

中学校学習指導要領解説 総則編 平成29年3月 第3章第1節2

4 学校がよりよい授業実践に向けて重視していきたいこと

各学校では、引き続き、次の点を重視し、全学年・全教科を通じて主体的・対話的で深い学びの視点から授業改善を図る必要があります。

- ・知識及び技能の習得。
- ・習得した知識及び技能を活用して、思考力、判断力、表現力等の資質能力を育むこと。
- ・ICT機器の効果的な活用や個に応じた指導の充実を図ること。
- ・各学年・各教科の課題設定の工夫や言語活動の取組状況について職員間で情報共有を図ること。
- ・家庭との連携を図りながら、児童生徒が自主的に学ぶ力を育むために、学習計画の立て方や学び方について指導すること。
- ・本調査の結果を分析し、学校全体の教育活動の改善に生かすこと。
- ・引き続き、保護者や地域の方との協力・連携を進めること。

小学校各教科の課題（p 3）を踏まえた方策

小 学 校	国 語	<ul style="list-style-type: none"> ・「書く」の指導では、内容の中心を明確にし、内容のまとまりで段落をつくったり、段落相互の関係に注意したりして、文章の構成を考える指導を充実させる。 ・「読む」の指導を進める上で、まずは読む目的を明確にする。複数の資料を結び付けて読む学習活動を設定し、それぞれの資料がどのような関係にあるのかを考えながら読む。その際、それぞれの資料にある、語句や情報を丸や四角で囲んだり、線などでつないだりするなどして、どの部分と結び付くのか視覚的に明らかにしながら読む指導を行う。
	算 数	<ul style="list-style-type: none"> ・複数の資料から、目的に応じて、適切なグラフを選択して、データの傾向や特徴を捉え、判断できるようにする。 ・具体物を用いて、元の大きさとそれを分数にした大きさを直接比べて、その観察を通して、分数を確かめ、分数の表現を用いることができるようにする。 ・異分母の分数の加法の計算の際、分母を共通にすることによって、共通単位分数の幾つ分とみることで、整数の加法に帰着できることに気づくことができるようにする。
	理 科	<ul style="list-style-type: none"> ・ものづくりの活動について、問題解決の活動の一形態であることを意識し、児童が明確な目的を設定し、その目的を達成するために行う活動となるようにする。つくったものを動かし、構想したとおりになっているかを振り返り、修正するといった活動を通して、知識と知識、知識と具体物とを相互に関係付けて意味を捉えたり、図や言葉で表現したりしながら目的の達成具合や修正点の確認等を行うことで、学習内容を深めることができるように授業づくりを行う。 ・観察や実験を行う際には、条件制御の重要性や意味を確認し、条件を制御した場合の結果を見通しながら、予想や仮説を基に観察、実験の方法を計画するような授業づくりを行う。 ・自然の事物・現象を比較し、差異点や共通点を基に問題を見いだすことを意識した授業づくりを行う。また、見いだした問題等を言い回しや言葉を工夫しながら書き記したり、考えた過程がわかるように説明したりする等の活動を取り入れるなど、児童が表現できる機会を設けた授業づくりを行う。

中学校各教科の課題（p 4）を踏まえた方策

中 学 校	国 語	<ul style="list-style-type: none"> ・漢字の指導においては、字体、字形、音訓、意味や用法などの知識を習得し、文脈に即して漢字を正しく使うように指導する。 ・資料や機器を用いて、自分の考えがわかりやすく伝わるように表現を工夫する際には、伝えたい内容が適切に伝わるよう効果的に資料や機器を活用できるよう指導する。 ・自分の考えが伝わる文章にするためには、意見とそれを支える根拠を明確にして書くことが重要である。伝えたい事柄とその根拠とを適切に結び付けたり、事実や事柄を具体的に示したりして書くように指導する。
	数 学	<ul style="list-style-type: none"> ・数学の用語の意味の理解については、用語が具体的な内容から離れ、形式的な指導に陥らないようにする。素数については、1は素数に含まれると考える生徒がいるため、その後の学習において素数を用いる際に、1は素数に含まれないことを再確認する場面を設定する。また、変化の割合については、xの増加量やyの増加量をxやyの値と捉える生徒がいるため、形式的に変化の割合を計算して求めることに偏らず、変化の割合を事象の考察やその表現に適切に用いることができるよう一次関数の表、式、グラフと関連づけて考える場面を設定する。 ・数学的活動を日々の学習に意図的、計画的に設定する。例えば、文字を用いた式を使って、ある命題が成り立つことを説明する場面を設定し、文字を用いて表現したり、文字を用いた式の意味を読み取ったり、証明に用いた前提や証明の根拠、結論を整理するなどして証明を振り返り、新たな性質を見いだす活動を取り入れるなど、数学的な表現を用いて説明し伝え合う活動を取り入れる。
	理 科	<ul style="list-style-type: none"> ・身近な自然の事物・現象から見いだした問題を解決するために、自ら課題を設定し、「エネルギー」、「粒子」、「生命」、「地球」の領域を横断して多面的、総合的に探究することで、理科を学ぶことの意義や有用性の実感を高める授業づくりを行う。 ・考察の妥当性を検討するために、観察、実験、その結果から考察を深めたり、観察、実験が難しい内容ではWeb ページなどの情報の信頼性を吟味したりして、適切に情報収集する。その際は、一つの情報だけを信頼するのではなく、複数の情報を参照して、信頼性を吟味する授業づくりを行う。 ・化学変化を質的・実体的な視点で捉えるために、化学変化における「反応する物質」と「生成してできた物質」を整理した上で、「化学変化の前後で原子の種類は変わらず、原子の数も変化しない」という知識を確認しながら、微視的に事象を捉えることができる授業づくりを行う。

5 家庭にお願いしたいこと

進んで学ぶ子どもを育てるために、家庭においても特に次の点について、ご指導をお願いします。

- ・ 規則正しい生活習慣を心がけましょう。
例) 早寝・早起き・朝ごはん、家庭学習や読書等の習慣 等
- ・ 家族で、学校や地域、社会での出来事、将来のことなどについて話題にしてみましょう。
- ・ 日常生活の中での「達成感」を大切にしましょう。
例) 家庭の中で子どもに役割を与えましょう。子どものがんばりをほめましょう。
- ・ ボランティア活動や地域の行事等と一緒に参加しましょう。
例) 公民館まつり、総合防災訓練、地区・学区体育祭などへの参加 等
- ・ テレビゲームや携帯電話・スマートフォン等の使い方について、話し合きましょう。
「スマートフォンの使い方 フォン当に大丈夫? ~STOP!! 1タップ~」
(令和3年度伊勢原市中中学生からのスローガン)

伊勢原市教育委員会では、家庭学習の手引きとして、冊子『学びのすすめ』を作成し、学校を通じて家庭に配布しています。ぜひご活用ください。

参考 冊子『学びのすすめ』は、伊勢原市教育センターのウェブサイト内リンクリストからダウンロードできます。伊勢原市教育センターURL <http://www.isehara.ed.jp/center/>



令和7年度全国学力・学習状況調査の結果の分析及び活用について

学校名	伊勢原市立伊勢原小学校
-----	-------------

1 調査結果の分析及び考察

	特長	課題
国語	<ul style="list-style-type: none"> ・図表などを用いて、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができる。 ・自分が聞こうとする意図に応じて、話の内容を捉えることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・目的に応じて、文章と図表などを結びつけるなどして必要な情報を見つけること。 ・事実と感想、意見などとの関係を叙述を基に押さえ、文章全体の構成を捉えて要旨を把握すること。
算数	<ul style="list-style-type: none"> ・伴って変わる二つの数量の関係に着目し、必要な数量を見いだすことができる。 ・角の大きさについて理解している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・分数の加法について、共通する単位分数を見だし、加数と被加数が、共通する単位分数の幾つ分かを数や言葉を用いて記述すること。 ・数直線上で、1の目盛りに着目し、分数を単位分数の幾つ分として捉えること。
理科	<ul style="list-style-type: none"> ・赤玉土の粒の大きさによる水のしみこみ方の違いについて、【結果】や【問題に対するまとめ】を基に、他の条件での結果を予想して、表現することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・身の回りの金属について、電気を通す物、磁石に引き付けられる物があることの知識を身に付けること。 ・レタスの種子の発芽の条件について、差異点や共通点を基に、新たな問題を見だし、表現すること。 ・発芽することに必要な条件について、実験の条件を制御した解決の方法を発想し、表現すること。
質問調査	<ul style="list-style-type: none"> ・いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思っている。 ・自分には、よいところがあると考え、それを先生が認めてくれていると感じている。 ・「人が困っているときに進んで助けたい」「人の役に立つ人間になりたい」と思っている児童が多い。 ・インターネットでの情報収集ができる児童が多い。 ・理科の学習を好きと考えている児童が多い。 ・国語と算数は、無回答率が低く、問題を最後まで解答しようと努力することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の大人と関わっている児童がやや少ないこと。 ・ICT機器を使って情報を整理することがあまりできないと考えている児童が多いこと。 ・国語や算数の学習が「好きではない」「あまり好きではない」と回答している児童が多い傾向にあり、国語は半数の児童があまり得意でないと回答していること。 ・学校の授業時間以外の学習時間が、1時間未満の児童が半分以上であること。 ・読書が「好きでない」「あまり好きでない」と回答する児童が約半分であること。また、「読書を全くしていない」「10分未満」と回答する児童が多いこと。

2① 授業の充実に向けた重点的な取組

<p>【国語】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・基本的な語彙力や文章力をつけることは大切なので、関連図書など多くの文章に触れられるようにする。 ・目的に応じて、文章と図表などを結びつける力や資料を読み取り、活用する力などは、国語だけでなく算数や理科、他教科においても必要な力である。各教科において言語活動の充実を図る。 <p>【算数】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小数や分数の性質を理解し、示された情報の数値などを整理し、筋道を立てて考え、問題の解決方法を式や言葉を用いて説明できるようにしていく。 ・棒グラフや帯グラフの特徴を捉え、グラフや表を読み取る力を付けさせるとともに、考察したことを、グラフのどの部分から考えたのかを明らかにして他者に分かるように伝えることができるようにしていく。 <p>【理科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実験や観察などで具体的な事象に触れ、結果からどのようなことが分かったかをまとめたり伝え合ったりすることで、基礎的な知識を身に付けられるようにしていく。 ・自然の中や日常生活において、理科に関する疑問を持ったり問題を見いだしたりすることができるようにしていく。
--

2② 家庭(地域)への発信内容(協力依頼事項) ※家庭で取り組んでほしい内容や地域の方にとってほしい内容

<p>日頃より児童の健康管理や規則正しい生活習慣の確立、家庭学習へのご支援をいただき、感謝申し上げます。</p> <p>学習について、国語と算数は、無回答率が低く、問題に最後まで解答しようと努力することができています。しかし、国語や算数が「好きではない」「あまり好きではない」と答えている児童が多く、半数の児童は「あまり得意ではない」と考えています。基礎的・基本的な知識・技能の定着を図り、児童が考えたり書いたり話し合ったりする時間を確保し、友達と考えを深め合える学習を通して、各教科に対して児童が自信を持って取り組めるようにしていきたいと考えます。</p> <p>また、読書については半数の児童が読書を「好きではない」、「あまり好きではない」と答えていて、読書時間は10分未満の児童が多くいます。学校では今後も読書タイムなどで読書をする時間を大切にしていきたいので、ご家庭でも読書ができる環境作りへのご協力をお願いします。また、多くの児童がインターネットでの情報収集ができていると考えていますが、ICT機器を使っての活用(情報整理など)についてはあまりできないと考えているようです。ICT機器の適切な使用及びインターネットやSNSの使用についても指導しておりますので、ご家庭でもルールやマナーの徹底と安全対策をお願いします。</p> <p>今後も、児童が自己肯定感を持ち、主体的・継続的に学習に取り組むことを目指して指導してまいります。ご理解とご協力をよろしくお願いいたします。</p>
--

令和7年度全国学力・学習状況調査の結果の分析及び活用について

学校名	伊勢原市立大山小学校
-----	------------

1 調査結果の分析及び考察

	特長	課題
国語	<ul style="list-style-type: none"> ・自分が聞こうとする意図に応じて、話の内容を捉えることができる。 ・話し手の考えと比較しながら、自分の考えをまとめることができる。 ・学年別漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使うことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりするなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫すること。 ・時間的な順序や事柄の順序などを考えながら、内容の大体を捉えること。
算数	<ul style="list-style-type: none"> ・数直線上で1の目盛りに着目し、分数を単位分数のいくつ分かを数や言葉を用いて記述できる。 ・伴って変わる二つの数量の関係に着目し、問題を解決するために必要な二つの数量を見だし、知りたい数量の大きさの求め方を式や言葉を用いて記述できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・角の大きさについて理解すること。 ・台形の意味や性質について理解すること。 ・はかりの目盛りを読むこと。
理科	<ul style="list-style-type: none"> ・水の温まり方について、問題に対するまとめ方を導き出す際、解決するための観察、実験の方法が適切であったかを検討し、表現することができる。 ・顕微鏡を操作し、適切な像にするための技能が身につけている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・レタスの種子の発芽の条件について、差異点や共通点を基に、新たな問題を見だし表現すること。 ・氷がとけてできた水が海に流れていくことの根拠について、理科で学習したことと関連付けて、知識を概念的に理解すること。
質問調査	<ul style="list-style-type: none"> ・先生はあなたのよいところを認めてくれていると考えている。 ・先生は、授業で間違えたところや理解していないところについて分かるまで教えてくれると考えている。 ・地域の大人に授業や放課後などで勉強やスポーツ、体験活動に関わってもらったり、一緒に遊んでもらったりすることがあると考えている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分にはよいところがあると考えていること。 ・将来の夢や目標を持つこと。 ・各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行うこと。 ・理科の授業で学習したことを普段の生活の中で活用すること。

2① 授業の充実に向けた重点的な取組

<p>【国語】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりできるようにしていく。自分の考えがより伝わるような書き表し方の工夫ができるように、相手意識を持ちながら書く学習活動を設けていく。 ・時間的な順序や事柄の順序などを考えながら内容の大体を捉えまとめることができるよう、物語や説明文のおおまかな内容や要旨を記述する活動を設け、指導していく。 <p>【算数】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・角の大きさについて、図形の角に着目したり、はかりを実際に用いて目盛りを読んだりすることを通して、指導していく。 ・台形やその他の図形について学ぶ際、既習の図形をもとに意味や性質について学習する場面を設けていく。 <p>【理科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発芽の条件について実験結果から差異点や共通点を理解し、さらに新たな問題点を考えることができるように差異点や共通点について理解を深め、課題を自ら見つけることができるような活動を設定し指導していく。 ・理科で学習したことと実生活で起こる事象や出来事に関連付けて、知識を概念的に理解することができるように、身の回りの物を使って実験を行ったり、単元の最後に生活と結び付けてまとめを行ったり指導していく。
--

2② 家庭(地域)への発信内容(協力依頼事項)

※家庭で取り組んでほしい内容や地域の方に知っておいてほしい内容

<p>日頃より学校教育へのご支援、ご協力ありがとうございます。</p> <p>1. 学習面 国語の話し合いの場面において、話の内容を捉えたり、話し手の考えと比較しながら自分の考えをまとめたりすることができる児童が多いようです。さらに、自分と違う意見について考えることが楽しいと感じることができています。学校では、少人数学級のよさを生かし、これからも話し合い活動を多く取り入れながら学力の定着を図っていきたく考えますので、ご家庭でも話をしたり相手の考えを聞いたりする機会を設けていただくとありがたいです。</p> <p>2. 生活面 「地域の大人に、授業や放課後などで勉強やスポーツ、体験活動に関わってもらったり、一緒に遊んでもらったりすることがある」と答えた割合が平均を大きく上回っていました。また、「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思う」に対しても肯定的回答の割合が高く、大山小の児童は地域に支えられていることを実感し、自分も積極的に地域とつながっていきたいという意識が育っていることが分かります。</p> <p>一方、「自分にはよいところがある」「将来の夢や目標をもっている」に対して、そうでないと考えている児童もいるようです。学校でも、児童それぞれのよさや得意なことなどに気づくことができるよう支援していきますので、ご家庭でも引き続きお子様を見守り励ましたり、夢や目標を応援したりしていただきたいと思います。</p>
--

令和7年度全国学力・学習状況調査の結果の分析及び活用について

学校名	伊勢原市立高部屋小学校
-----	-------------

1 調査結果の分析及び考察

	特長	課題
国語	<ul style="list-style-type: none"> ・書く内容の中心を明確にし、内容のまとまりで段落を作ったり、段落相互の関係に注意したりして、文章の構成を考えることができている。 ・時間的な順序や事柄の順序などを考えながら、内容の大体を捉えることができている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付けること。 ・話し手の考えと比較しながら、自分の考えをまとめること。
算数	<ul style="list-style-type: none"> ・台形の意味や性質について理解している。 ・伴って変わる二つの数量の関係に着目し、問題を解決するために必要な数量を見だし、知りたい数量の大きさの求め方を式や言葉を用いて記述することができている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・分数の加法について、共通する単位分数を見だし、加数と被加数が、共通する単位分数の幾つ分かを数や言葉を用いて記述すること。 ・数直線上で、1の目盛りに着目し、分数を単位分数の幾つ分として捉えること。
理科	<ul style="list-style-type: none"> ・赤玉土の粒の大きさによる水のしみ込み方の違いについて、結果を基に結論を導いた理由を表現できている。 ・レタスの種子の発芽の条件について、採点や共通点を基に、新たな問題を見だし、表現できている。 ・水の温まり方について、問題に対するまとめを導き出す際、解決するための観察、実験の方法が適切であったかを検討し、表現することが概ね理解できている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・結果を基に考察し、問題に対するまとめの理由を適切に表現すること。 ・電気を通す物、磁石に引き付けられる物があることの知識を身に付けること。 ・ヘチマの花のつくりや受粉についての知識を身に付けること。 ・顕微鏡を操作し、適切な像にするための知識・技能を身に付けること。
質問調査	<ul style="list-style-type: none"> ・人の役に立つ人間になりたいと考える児童が多い。 ・分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することができている児童が多い。 ・地域や社会をよくするために何かしてみたいと思っている児童が多い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・毎日、同じくらいの時刻に寝たり、起きたりしていない児童が一定数いること。 ・友達関係に満足していない児童が一定数いること。

2① 授業の充実に向けた重点的な取組

漢字を文の中で正しく使ったり、応用的な課題を解決したりするための基礎的・基本的な学習内容の確実な定着を目指していく必要がある。そのために、見直したカリキュラムをさらに検討し、繰り返し学習を継続的に取り入れていく。

【国語】自分の考えを文章にまとめて書く作業を引き続き授業の中で取り入れていく。

【算数】計算方法、単位の意味、表やグラフの読み取りなど身に付けたい力を単元の最初に確認してから問いに取り組んだり、関連する学習を始める前や途中で振り返りの練習問題に取り組んだりする。既習の練習問題に継続的に取り組むことで、基礎学力の定着を図り、課題を解決できる経験を増やしていく。

【理科】実験器具の名称や用途を使用する時に、繰り返し確認することで定着を図っていく。

どの教科においても「あたたかい聴き方」「やさしい話し方」を意識し、話し合い活動を中心に互いを認め、自分のよさを見つける活動を意識的に取り入れることで、児童の自己肯定感を高めることができる取組を実施していく。

2② 家庭(地域)への発信内容(協力依頼事項)

※家庭で取り組んでほしい内容や地域の方に知っておいてほしい内容

・質問調査では、「人の役に立つ人間になりたい」「地域や社会をよくするために何かしてみたい」と感じている児童が多くいました。分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することができる考え意欲的に取り組む姿が見られています。

・調査結果より、朝食を食べない児童や寝る時間や起きる時間が決まっていない児童が一定数いることが分かりました。空腹や睡眠時間の減少により、朝から不調を訴える児童も見られます。成長期の子どもたちには、体を動かす遊びや運動の習慣が大切であることも合わせ、ご家庭でも生活習慣について今一度確認していただくと幸いです。

・学校に来ることが楽しい、普段の生活の中で幸せな気持ちになると感じることも家庭や地域で子どもの見守り、健やかな成長を支えていただいているからだと考えています。たくさんのご協力に感謝申し上げます。引き続き家庭や地域と学校が連携し、それぞれの役割を果たしていくことができれば幸いです。

令和7年度全国学力・学習状況調査の結果の分析及び活用について

学校名	伊勢原市立比々多小学校
-----	-------------

1 調査結果の分析及び考察

	特長	課題
国語	<ul style="list-style-type: none"> ・自分が聞こうとする意図に応じて話の内容を捉えることができている。 ・時間の経過による言葉の変化や世代による言葉の違いに気付くことができている。 ・図表などを用いて自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・文章全体の構成を捉えて要旨を把握すること。 ・書く内容の中心を明確にし、内容のまとまりで段落をつくったり、段落相互の関係に注意したりして文章の構成を考えること。 ・目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見つけること。 ・漢字を文の中で正しく使うこと。
算数	<ul style="list-style-type: none"> ・伴って変わる二つの数量の関数に着目し必要な数量を見出すことができている。 ・角の大きさについて辺の開き具合として捉えることができている。 ・棒グラフから項目間の関係を読み取ることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・異分母の分数の加法の計算をすること。 ・数直線上で1の目盛りに着目し、分数を単位分数の幾つ分として捉えること。 ・平行四辺形の性質を基に、コンパスを用いて平行四辺形を作図すること。
理科	<ul style="list-style-type: none"> ・変える条件や変えない条件を整理しながら実験の方法を考えることができる。 ・獲得した知識を基に科学的な根拠のある予想をし、問題を解決することができる。 ・電流がつくる磁力について、電磁石の強さは巻数によって変わることを知識が身に付いている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・身の回りの金属について電気を通す、磁石に引き付けられるなどのそれぞれの性質について理解すること。 ・乾電池で、直列のつなぎ方やその特徴について理解すること。 ・氷が解けてできた水が海に流れていくことの根拠について理科で学習したことと関連付けて考えること。
質問調査	<ul style="list-style-type: none"> ・生活のリズムが整い、先生や周りの大人に困りごとや不安なことをいつでも相談できると思っている児童が多い。 ・日々の生活の中で幸せを感じ、将来の夢や目標をもち、人の役に立つ人間になりたいと思っている児童が多い。 ・PCを使った授業を取り入れて、その扱いに慣れてきている児童が多く、有用性も感じている。 ・算数、理科の勉強は好きで、学習したことを生活の中で生かそうとしている児童が多い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・先生は良いところを認めてくれているが、自分の良いところを認めている児童はやや少ないこと。 ・学校が楽しくないと感じている児童がいること。 ・学校の授業時間以外や休日に学習をしている児童が少ないこと。また、授業時間以外に読書をしている児童が少ないこと。 ・地域の大人に授業やスポーツ、体験活動などで関わってもらったり、遊んでもらったりしている児童が少ないこと。

2① 授業の充実に向けた重点的な取組

<p>【国語】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・当該学年の前に配当されている漢字を書き、文や文章の中で使おうとする習慣を身に付けていく。 ・複数の資料を読む活動を通して、それぞれの資料がどのような関係にあるのか考えながら読んでいく。また、重要な語句や情報を丸で囲んだり、線でつないだりして視覚的に明らかにしながら読む指導を行っていく。 <p>【算数】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・4年生の頃より教科担任制を取り入れ、系統性をもった学習の組み立てや児童が興味をもつような指導の工夫をしてきた。「算数が好き」と答えている児童の割合が高く、その成果が表れていると思う。今後も教科担任制の良さを活かし、「楽しく学べてみんながわかる」ことを意識した授業づくりをしていく。また、基礎基本の定着を図るような学習も取り入れていく。 <p>【理科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今まで通り、観察や実験を取り入れて「なぜ」「どうして」と考える場面を重視した授業を行っていく。
--

2② 家庭(地域)への発信内容(協力依頼事項)

※家庭で取り組んでほしい内容や地域の方にとってほしい内容

<p>先生に良いところを認めてもらっていると感じつつも、「自分には良いところがある」と思っている児童の割合が少なく、自分に自信を持つことができない様子が見られます。一方、将来の夢や目標をもっている児童は多くいます。ご家庭では引き続き、毎日の「早寝、早起き、朝ごはん」の生活リズムを保つことを続けていただき、児童の話に耳を傾け、将来の夢や目標を応援していただけたらと思います。また、学校では地域と協働した児童の健全な育成に今まで以上に力を入れていきたいと思っております。「学校は地域の中心」「子どもは地域の宝」として地域の皆様にも引き続き、見守りや学習活動、体験活動へのご協力をよろしくお願いいたします。</p> <p>学習面ではPCやタブレットを使った学習を多く取り入れ、児童も資料を検索したり、プレゼンをしたりとその扱いに慣れてきています。また、委員会やクラブ活動など学習以外で機器を扱う時間も多くなっています。引き続き、情報モラル等の指導もご家庭と協力して行っていきたいと思っております。反面、読書離れが進んでいるのも心配です。ご家庭でもお声かけをお願いします。</p> <p>児童は理科の実験や観察などが大好きなようです。他教科でも児童の興味、関心を取り入れた体験活動を取り入れながら、さらに「楽しい授業・楽しい学校」を目指して日々、取り組んでいきたいと思っております。</p>
--

令和7年度全国学力・学習状況調査の結果の分析及び活用について

学校名	伊勢原市立成瀬小学校
-----	------------

1 調査結果の分析及び考察

	特長	課題
国語	<ul style="list-style-type: none"> 自分が聞こうとする意図に応じて、話の内容を捉え、話し手の考えと比較しながら、自分の考えをまとめることができる。 漢字を文の中で正しく使うことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付けること。 複数の資料を結び付けてどのような関係にあるかを考えて要旨を捉え、自分の考えをもち、根拠とともに条件に合うように的確にまとめること。
算数	<ul style="list-style-type: none"> 棒グラフから、必要な項目や数値と、その関係を読み取ることができる。 図形に関して、台形の定義や、二つの角の大きさの関係について理解している。 伴って変わる二つの数量の関係に着目し、問題を解決するために必要な数量は何かを見いだすことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 目的に応じて適切なグラフを選択して判断し、その理由を言葉や数を用いて記述すること。 分数について、数直線上で1の目盛りに着目し、単位分数のいくつ分として捉えること。 異分母同士の足し算の計算の仕方について単位分数で考えることを数や言葉を用いて記述すること。 伴って変わる場面において、必要な数量を見いだすことはできるが、その求め方について式や言葉を使って記述すること。
理科	<ul style="list-style-type: none"> 実験の結果や問題に対するまとめを基に、他の条件での結果を予想することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 顕微鏡の操作をし、適切な像にするための技能。 発芽に必要な条件について、実験結果から新たに必要実験を見つけること。 電気を通す物と通さない物の条件を整理し、電気が通る回路を作ること。
質問調査	<ul style="list-style-type: none"> 朝食を毎日食べ決まった時刻に起床するなど、基本的な生活習慣が身に付いている。 先生が自分のよいところを認めてくれていると思っている児童が多い。 友達関係に満足している児童が多い。 ICT機器を活用することによって、分からないことをすぐに調べられ、画像や動画等を活用することによって学習内容がよく分かり、活用できていると考えている。 	<ul style="list-style-type: none"> 困ったことがあっても先生や学校にいる大人に相談しにくいと考えている児童がいること。 国語や算数の学習が将来役に立つと考えているが、好きではないと感じている児童が多いこと。 新聞を読む児童が少なく、読書に関しても後ろ向きな児童が多いこと。

2① 授業の充実に向けた重点的な取組

<p>【国語】 学習の大切さを理解している児童が多いが、好んで学習している児童は多くはないことが分かった。学校研究でも全教科において児童が主体的に学ぶための手立てについて研究を進めてきているため、今後も授業改善を図っていく。また、必要な図などを精選し、自分の考えを根拠とともに的確にまとめることに課題が見られた。様々な情報を精選し、自分の考えを表現できるように支援していく。</p> <p>【算数】 異分母同士の足し算に課題が見られた。計算が確実にできるようにするとともに、その考え方についても具体物や数直線など、またICTを効果的に活用しながら児童自身が考えたり表現したりする学習活動を取り入れ、理解を深める授業を展開していく。</p> <p>【理科】 顕微鏡の使い方や、金属の性質、花のつくりなどの知識に課題が見られた。知識として覚えるだけでなく、実際に触ったり実験したりする機会を大切に、理解を深める授業を展開していく。</p>

2② 家庭(地域)への発信内容(協力依頼事項)

※家庭で取り組んでほしい内容や地域の方にとってほしい内容

<p>子どもたちを日々支えていただき、誠にありがとうございます。</p> <p>1. 活字に親しみ、楽しむような機会を 活字離れが言われて久しいですが、本校の児童においても同様な傾向が続いています。国語の学習が将来に向けて重要であると考えてはいるものの、本や新聞などを読む機会は減っています。活字に触れることで語彙も増え、日本語独特の表現の豊かさを味わうこともできます。自分の考えをもち、それを条件に合うようにまとめ、誰かに伝えることはこれからも必要とされる力です。ご家庭でも、読書に親しみ、感想を伝え合う機会などを設けてはいかがでしょうか。</p> <p>2. 学習に向かう姿勢を前向きに 学習の重要性を理解している児童が多く、大変嬉しく思います。しかし、学習に取り組む姿勢については課題もあります。国語や算数、理科の学習は、とても大切と考えてはいるものの、なかなか前向きに取り組むことができない児童が多いのも現状です。日頃の授業において、学習する楽しさを実感できるよう今後も授業改善に取り組んでいきます。</p>
--

令和7年度全国学力・学習状況調査の結果の分析及び活用について

学校名	伊勢原市立大田小学校
-----	------------

1 調査結果の分析及び考察

	特長	課題
国語	<ul style="list-style-type: none"> ・図表などを用いて自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができている。 ・時間の経過による言葉の変化や世代による言葉の違いに気付くことができている。 ・話し手のことを考えと比較しながら、自分の考えをまとめることが概ねできている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりするなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫すること。 ・目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見つけること。 ・事実と感想、意見などとの関係を叙述を基に押さえ、文章全体の構成を捉えて要旨を把握すること。
算数	<ul style="list-style-type: none"> ・棒グラフから、項目間の関係を読み取ることが概ねできている。 ・異分母の分数の加法の計算をすることが概ねできている。 ・簡単な二次元の表から、条件に合った項目を選ぶことが概ねできている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・目的に応じて適切なグラフを選択して出荷量の増減を判断し、その理由を言葉や数を用いて記述すること。 ・分数の加法について、共通する単位分数を見だし、加数と被加数が、共通する単位分数の幾つ分かを数や言葉を用いて記述すること。 ・伴って変わる二つの数量の関係に着目し、問題を解決するために必要な数量を見だし、知りたい数量の大きさの求め方を式や言葉を用いて記述すること。
理科	<ul style="list-style-type: none"> ・花のつくりや受粉についての知識が身に付いている。 ・顕微鏡を操作し、適切な像にするための技能が概ね身に付いている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・身の回りの金属について、電気を通す物、磁石に引き付けられる物があることの知識が身に付いていること。 ・乾電池のつなぎ方について、直列つなぎに関する知識が身に付いていること。
質問調査	<ul style="list-style-type: none"> ・いじめは、どんな理由があってもいけないことだと、すべての児童が感じている。 ・人の役に立つ人間になりたいと思っている児童が多い。 ・生活の中で、自然の中で遊ぶことや自然観察をした経験のある児童が多い。 ・ICT機器を活用することで、分からないことを直ぐに調べることができたり、学習内容がより分かりやすくなったりすると感じている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・多くの児童が基本的な生活習慣を身に付けているが、朝食を食べていなかったり、起床や就寝の時間が決まっていなかったりする児童が一定数いること。 ・普段の生活の中で、読書をする児童が非常に少ないこと。 ・学校の授業以外に、ICT機器を学習のため使っている児童が少ないこと。 ・ICT機器を活用して、情報を整理したり、自分の考えや意見を分かりやすく伝えたりすることが苦手な児童が多いこと。

2① 授業の充実に向けた重点的な取組

<p>【国語】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国語の学習を苦手と感じている児童が少なくないことが結果から読み取れるので、児童が国語に興味・関心を持ち、前向きに学習に取り組めるように、授業改善に努めていく。 ・文章と図表などを結び付け、目的や意図に応じて相手に伝わるような書き表し方を系統的に指導していくとともに、書く指導を意図的に増やしていく。 <p>【算数】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・目的に応じてグラフを読み取り、それを選んだ理由を記述する力を算数の授業だけでなく、モジュールの時間も活用しながら、自分の考えを記述する学習を多く取り入れていく。 ・共通する単位分数の幾つ分について、視覚的に捉えられるよう具体物を取り入れたり、ICT機器を活用したりしながら、学習を進めていく。 <p>【理科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・観察や実験の結果をまとめる時、具体的な数値などで表し、それを元に自分と他者の違いや共通点を捉え、それを根拠とした考えを記述する学習場面を設定していく。 ・児童が意欲的に学習できるよう、具体物を用いたり、ICT機器を利用したりする活動を多く取り入れ、苦手とする磁石や電気などの「エネルギー」を柱とする領域の充実を図っていく。

2② 家庭(地域)への発信内容(協力依頼事項)

※家庭で取り組んでほしい内容や地域の方にとってほしい内容

<p>ご家庭の皆様、地域の皆様、日頃から、学校教育へのご理解ご協力ありがとうございます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童の質問調査の回答から、「いじめは、どんな理由があってもいけないことだ」と、すべての児童が感じていることが分かりました。学校では、「相手を思いやる気持ち」を道徳や日頃の学校生活の中で培っております。何か起こった時も、担任だけでなく児童指導担当教諭を中心に学校全体で全力で解決に取り組んでいます。また、学校の指導だけでなく、ご家庭でもそのような考えを持ち、お子様に接していただいているからこそその結果だと思えます。今後も、学校と保護者の皆様で手を取り合い、お子様が健やかに成長できるよう、ご協力お願いいたします。 ・児童にとってICT機器はとて身近なものとなっています。学習でも多くの児童がICT機器の活用で学習がより分かりやすくなったと考えています。その反面、スマートフォン、ゲーム機器等の利用のマナー・使用時間など課題があり、年々、ネット上でのトラブルが増えています。なかなか確認できないネット上のトラブルを未然に防ぐには、まずは、ご家庭でお子様と話し合い、安全対策、利用マナー、ルールの徹底を図ることが何より大切と考えます。学校でも、外部講師を招いた情報モラル教室を開催したり、学年にあった指導を行ったりと、トラブルを未然に防げるよう指導しております。 <p>最後に、お忙しい中、地域、保護者の皆様には、登下校の見守りや通学路点検等、児童が安全・安心に過ごせるよう見守りいただきとともに、様々な体験学習にご協力いただき、感謝申し上げます。今後もよろしくお願いいたします。</p>

令和7年度全国学力・学習状況調査の結果の分析及び活用について

学校名	伊勢原市立桜台小学校
-----	------------

1 調査結果の分析及び考察

	特長	課題
国語	<ul style="list-style-type: none"> 話し手の考えと比較しながら、自分の考えをまとめることができる。 書く内容の中心を明確にし、内容のまとまりで段落をつくったり、段落相互の関係に注意したりして、文章の構成を考えることができる。 難易度の高い問題であったが、目的や意図に応じて、日常生活の中から話題を決め、集めた材料を分類したり関係づけたりして、伝え合う内容を検討することができる児童が多かった。 目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりするなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができるようになってきている。 事実と感想、意見などとの関係を叙述を基に押さえ、文章全体の構成を捉えて要旨を捉えることができるようになってきている。 	<ul style="list-style-type: none"> 時間的な順序や事柄の順序などを考えながら、内容の大体を捉えること。 目的に応じて文章と図表などを結びつけるなどして必要な情報を見つけること。
算数	<ul style="list-style-type: none"> 簡単な二次元の表から、条件に合った項目を選ぶことができる。 台形の意味や性質について理解している。 はかりの目盛りを読むことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 数直線上で、1の目盛りに着目し、分数を単位分数の幾つ分として捉えること。 「10%増量」の意味を解釈し、「増量後の量」が「増量前の量」の何倍になっているかを表すこと。
理科	<ul style="list-style-type: none"> 赤玉土の粒の大きさによる水のしみ込み方の違いについて、赤玉土の量と水の量を正しく設定した実験の方法を発想し、表現することができる。 電流がつくる磁力について、電磁石の強さは巻数によって変わることを知識が身につけている。 氷がとけてできた水が海に流れていくことの根拠について、理科で学習したことと関連付けて、知識を概念的に理解している。 	<ul style="list-style-type: none"> 身の回りの金属について、電気を通す物、磁石に引きつけられる物があることへの知識が身に付いていること。 レタスの種子の発芽の条件について、差異点や共通点を基に、新たな問題を見だし、表現すること。 乾電池のつなぎ方について、直列つなぎに関する知識。 ヘチマの花の作りや受粉についての知識が身に付いていること。
質問調査	<ul style="list-style-type: none"> いじめについて、どんな理由があってもいけないことだと理解している児童が多く、当てはまらないと考える児童はいなかった。 人の役に立つ人間になりたいと思っている児童が多い。 将来の夢や目標を持っている児童が多い。 普段の生活の中で、幸せな気持ちになることができている児童が多い。 授業や学校生活では、友達や周りの人の考えを大切に、お互いに協力しながら課題の解決に取り組んでいる。 	<ul style="list-style-type: none"> 規則正しい生活について、課題がある児童が一定数いること。 家庭での学習時間がやや少ないこと。 困りごとや不安があるときに、先生や学校にいる大人に相談しづらい児童がいること。

2① 授業の充実に向けた重点的な取組

<p>【国語】</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分の考えが伝わるように、書き表し方を工夫することができるようになってきている。しかし、目的に応じて、必要な情報を見つけ、結びつけて考えるなどにつながる、読解力については課題が見られるので、「読むこと」を意識した学習計画を立てていく。 <p>【算数】</p> <ul style="list-style-type: none"> 図形を作図したり、工夫して面積を求めることができるようにしていく。 数の構成と表し方に関わる数学的活動を通して、分数が単位分数の幾つ分かで表すことができるようにしていく。 伴って変わる二つの数量に関わる数学的活動を通して、それらの関係に着目し、目的に応じて表や式、グラフを用いてそれらの関係を表現して、変化や対応の特徴を見いだすとともに日常生活に生かせるよう学習計画を立てていく。
--

2② 家庭(地域)への発信内容(協力依頼事項)

※家庭で取り組んでほしい内容や地域の方に知っておいてほしい内容

<p>学校では、全国学力・学習状況調査の結果を職員全体で共有し、指導計画を意識したきめ細やかな指導に取り組んでまいります。また、教科等を横断した指導の充実や、誰もが楽しく学校生活を送ることができるような環境づくりに努めてまいります。各ご家庭では、</p> <ol style="list-style-type: none"> 豊かな表現をはぐくむ言語環境を <ul style="list-style-type: none"> 自分の考えをもち伝えるという活動は、生活面では互いに理解し認め合うために必要です。学習面でも、友達の考えと比べ、深めるためにも大切な活動です。自分の考えや思いを適切な表現で発信するために、語彙を増やしたり、豊かな表現に触れたりすることが必要です。ご家庭でも、読書をしたり会話時間を増やしたりして、豊かな表現をはぐくむ環境づくりにご協力ください。 携帯・スマートフォンやコンピュータの使い方の約束を <ul style="list-style-type: none"> 様々な機器の進歩により生活が便利になる一方で、使い方によっては誰かを傷つけたり、トラブルに巻き込まれたりすることもあります。桜台小学校では、使用についての様々な約束など、ご家庭と共有させていただいております。また、様々な機器を使ったアプリ・通信型のゲームについては、対象年齢を守るなど、使用について十分な注意をお願いします。よろしくお願いします。 <p>今後も、児童の健やかな成長をはぐくむ環境を、学校・家庭・地域の皆様とで創っていけるよう、お力添えいただければ幸いです。</p>
--

令和7年度全国学力・学習状況調査の結果の分析及び活用について

学校名

伊勢原市立緑台小学校

1 調査結果の分析及び考察

	特長	課題
国語	<ul style="list-style-type: none"> 「言葉の特徴や使い方」や「我が国の言語文化」の学習内容が定着している。国語の授業で学習した基礎的な知識が身に付いていると考えられる。 「話すこと・聞くこと」と「書くこと」の学習内容が定着している。自分の意見を論理的にまとめ、言葉にして発信する力や、他者の話を聞いて理解する力が身に付いていると考えられる。 授業内での意見交換やグループディスカッションを通じて、コミュニケーション能力が育まれている。 	<ul style="list-style-type: none"> 単一の文章を読む力は高いものの、複数の情報を比較したり、関連付けたりする、より高度な読解力を育むこと。
算数	<ul style="list-style-type: none"> 基礎的な計算問題能力が身に付いている。日々の繰り返し練習が確実に成果を結び、児童の中に計算や知識の土台がしっかりと築かれていると考えられる。 グラフなどの与えられた情報を正確に処理できる。 図形の基本的な性質を正確に把握できている。 	<ul style="list-style-type: none"> 思考力や表現力を必要とする応用的な問題には、まだ伸びしろがある。 図形の知識を応用して、単に「知っている」だけでなく、「なぜそうなるのか」を論理的に考え、それを言葉で明確に表現すること。 割合などの複雑な問題で、文章を深く読み解き、計算方法を導き出すこと。
理科	<ul style="list-style-type: none"> 実験方法について、単に知識を暗記しているだけではなく、実験を通して得た情報から論理的に考察し、結論を導き出す力が育まれている。 「水の温度変化」や「水の状態変化」について、関連する知識をしっかりと理解している。 実験や観察のデータ(グラフ、表など)から必要な情報を素早く、正確に読み取ることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 基礎知識の定着にムラがあり、科学の土台となる基本的な用語や原理の知識を定着させること。 金属によって磁石に引き付けられる物、電気を通す物があることの知識を身に付けること。 科学的な思考を言語化し、他者に明確に伝えること。
質問調査	<ul style="list-style-type: none"> 朝食を毎日食べている。 起床の時刻や就寝時刻など、規則正しい生活を送っている。 自然の中で遊んだり、学習したりする経験をしている児童が多い。 地域や社会を良くするために何かしてみたい、と考えている児童が多い。 	<ul style="list-style-type: none"> 困りごとや不安があるときに、先生や大人にいつでも相談できること。 毎日新聞を読むなど、活字に触れること。 タブレットやICT機器などを、目的に応じて効果的に活用すること。 学級会などの話し合いを生かして、解決方法やめあてを決めること。

2① 授業の充実に向けた重点的な取組

・基礎学力の定着は、本校で実施しているマイプランの成果が出ていると考えられる。引き続き、自分で計画を立て、自分で考えて学習に取り組む姿勢を大切に、家庭学習においても同様の取組ができるようにしていく。

・教科書だけではなく、新聞記事や身近な資料なども活用し、文章から筆者の意図や背景を深く読み取るようにしていく。

・単に答えを出すだけでなく、「なぜそう考えたのか」を言葉や文章で説明する練習を日常的に取り入れていく。また、授業中の発表やグループディスカッション、ノート、ICT機器などを活用していく。

・単にICT機器を活用するだけではなく、効果的な場面や方法を学年や校内で検討し、より児童の学習意欲や達成感につながるようなものにしていく。

2② 家庭(地域)への発信内容(協力依頼事項)

※家庭で取り組んでほしい内容や地域の方にとってほしい内容

・児童は「早寝・早起き・朝ごはん」といった基本的な生活習慣がしっかりと身に付いています。生活リズムが整っていることは、学習や学校生活への集中力にも良い影響を与えています。

・どの教科も無回答の設問がとても少ないです。一人ひとりが最後まで粘り強く取り組む姿勢をもち持ち、学習に前向きに向き合っている様子がうかがえます。

・児童は、学校でICT機器を使いこなし、学習に役立てています。学習以外では、オンラインゲームやSNS、インターネットなど、利用のルールやマナーの指導とセキュリティ対策がトラブル未然防止のために重要です。学校でも情報モラル指導をしていますが、ご家庭でもルールやマナーの徹底をお願いいたします。

・「地域や社会をよくするために何かしたい」と考える児童が多いです。身近な「ざい」を起点とした協働的な学びを地域の方のご協力のもと推進している成果だと考えます。今後もご家庭では規則正しい生活習慣の継続を、地域の皆様には子どもたちの学びや成長を温かく見守っていただけますよう、ご理解とご協力をお願いいたします。

令和7年度全国学力・学習状況調査の結果の分析及び活用について

学校名	伊勢原市立竹園小学校
-----	------------

1 調査結果の分析及び考察

	特長	課題
国語	<ul style="list-style-type: none"> ・図表などを用いて、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができている。 ・時間的な順序や事柄の順序などを考えながら、内容の大体を捉えることができている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見つけること。 ・学年別漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使うこと。
算数	<ul style="list-style-type: none"> ・棒グラフから、項目間の関係を読み取ることができている。 ・伴って変わる二つの数量の関係に着目し、必要な数量を見いだすことができている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・分数の加法について、共通する単位分数を見だし、加数と被加数が、共通する単位分数の幾つ分かを数や言葉を用いて記述すること。 ・数直線上で、1の目盛りに着目し、分数を単位分数の幾つ分として捉えること。
理科	<ul style="list-style-type: none"> ・赤玉土の粒の大きさによる水のしみ込み方の違いについて、赤玉土の量と水の量を正しく設定した実験の方法を発想し、表現することができている。 ・電流がつくる磁力について、電磁石の強さは巻数によって変わることの知識が身に付いている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・身の回りの金属について、電気を通す物、磁石に引き付けられる物があることの知識を身に付けること。 ・レタスの種子の発芽の条件について、差異点や共通点を基に、新たな問題を見だし、表現すること。
質問調査	<ul style="list-style-type: none"> ・インターネットを使って情報を収集する(検索する、調べるなど)ことができる児童が多い。 ・学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりする児童が多い。 ・先生は、授業やテストで間違えたところや、理解していないところについて、分かるまで教えてくれていると感じている児童が多い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・国語や算数の学習は理解できているが、苦手意識をもっていること。 ・学級活動における学級での話し合いを生かして、今、自分が努力すべきことを決めて取り組むことができないこと。 ・観察や実験の進め方、授業の振り返りなどが十分にできていないこと。

2① 授業の充実に向けた重点的な取組

<p>【国語】目的に応じて、文章と図表などを結び付けることができるようになるために、説明文の読み取りや教科の横断的な学びを通して、積み重ねの学習を更に大切にしていく。学年別漢字配当表に示されている漢字を使えるようになるために、日々の漢字練習だけではなく、日記や感想文など書く活動を通して、今まで以上に丁寧に指導していく。</p> <p>【算数】課題に対して考える時間を十分に確保したり、考える手立てを提示しながら、自分の考えをしっかりと持てるようにする。児童同士で考えを交流する活動や発言する機会を多く設け、自分の考えや友達の考えをノートなどに書く練習を増やしていく。考える、話す、書くという活動を繰り返すことで、記述する力を伸ばせるようにしていく。</p> <p>【理科】身の回りにある物の特性などに目を向け、その中で問題を発見し、予想を立て、実験の進め方などを考えられるようにする。また観察や実験の結果から、差異点や共通点を見いだしたり振り返ったりし、次の活動に生かせるように指導していく。</p>

2② 家庭(地域)への発信内容(協力依頼事項)

※家庭で取り組んでほしい内容や地域の方に知っておいてほしい内容

<ul style="list-style-type: none"> ・日頃の様子を見ていると、自分の話をしたい、聞いてもらいたいと思っている児童が多いように感じます。しかし、伝え方が分からなかったり、思ったことが上手に話せず困っていたりする児童がいます。学校でどんなことがあったのか、どのように感じたのかなど、お子様の話が聞ける時間を増やしていただけると幸いです。 ・読書の習慣を付けるため、学校では、読書タイムを活用したり、国語の授業で読書の幅を広げたりする機会を設けます。ご家庭でも、ゲームやテレビなどの時間を少しでも読書に回せるように声かけをしていただきたいと思います。 ・調査結果を踏まえ、子どもたちの成長につながるよう、学校でもさらに指導をしていきますので、引き続きご家庭や地域の方々のご協力をお願いします。

令和7年度全国学力・学習状況調査の結果の分析及び活用について

学校名	伊勢原市立石田小学校
-----	------------

1 調査結果の分析及び考察

	特長	課題
国語	<ul style="list-style-type: none"> ・図表などを用いて、自分の考えが伝わるように書き方を工夫することができる。 ・時間の経過による言葉の変化や世代による言葉の違いに気づくことができる。 ・ほとんどの児童が、授業内容がわかると答えている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・目的に応じて文章と図表などを結びつけるなどして必要な情報を見つけること。 ・事実と感想、意見などの関係を叙述を基に押さえ、文章全体の構成を捉えて要旨を把握すること。 ・自分の考えをまとめて記述すること。
算数	<ul style="list-style-type: none"> ・異分母の分数の加法の計算ができる。 ・角の大きさについて理解している。 ・伴って変わる二つの数量の関係に着目し、必要な数量を見出すことができる。 ・おおよその児童が、授業内容がわかると答え、学習したことを普段の生活の中で活用しようとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・目的に応じて適切なグラフを選択して出荷量の増減を判断し、その理由を言葉や数を用いて記述すること。 ・分数の加法について、共通する単位分数を見出し、加法と被加法が、共通する単位分数の幾つ分かを数や言葉を用いて記述すること。 ・「10%増量」の意味を解釈し、「増量後の量」が「増量前の量」の何倍になっているか表すこと。
理科	<ul style="list-style-type: none"> ・赤玉土の粒の大きさによって水のしみ込み方の違いについて、赤玉土の量と水の量が正しく設定した実験の方法を発想し、表現することができる。 ・ヘチマの花のつくりや受粉についての知識が身に付いている。 ・乾電池のつなぎ方について、直列つなぎに関する知識が身に付いている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・身の回りの金属について、電気を通すもの、磁石に引き付けられるものがあることの知識を身に付けること。 ・レタスの種子の発芽の条件について差異点や共通点をもとに新たな課題を見出し、表現すること。 ・赤玉土の粒の大きさによる水のしみ込み方の違いについて、結果をもとに結論を導いた理由を表現すること。
質問調査	<ul style="list-style-type: none"> ・朝食を毎日食べてきている児童が多い。 ・友達関係に満足している児童が多い。 ・先生は授業やテストで間違えたところや理解していないところを分かるまで教えてくれると思っている児童が多い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校生活をよりよくするために学級会で話し合い、お互いの意見の良さを生かして解決方法を決めること。 ・学級活動における学級での話し合いを生かして、今、自分が努力すべきことを決めて取り組むこと。 ・理科の授業で仮説をたてたり、実験や観察の進め方や考え方が間違えていないか振り返ったりすること。

2① 授業の充実に向けた重点的な取組

<p>【国語】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習の中で目的に応じて簡単に書いたり、詳しく書いたりするなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫して文章を書くことを増やしていく。 ・日常的に読書に親しむ時間を増やししながら、学習では目的に応じて説明的な文章を読み、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見つける学習を増やしていく。 <p>【算数】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習の中で、どのように考えたかについて説明したり、文章でまとめたりする活動を増やしていく。 <p>【理科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・問題に対して答えがどのようになるか自分で仮説を立てたり、観察や実験の進め方や考え方が間違えていないか振り返ったりする学習を増やしていく。
--

2② 家庭(地域)への発信内容(協力依頼事項)

※家庭で取り組んでほしい内容や地域の方にとってほしい内容

<ul style="list-style-type: none"> ・元気に、学習や遊びに取り組むために欠かせない朝食を、子どもたちが毎朝、食べて学校へ来ていることがよくわかります。また、「人が困っているときに進んで助ける」、「いじめはどんな理由があってもいけない」など、人が人として一番大切にしなければならない、守らなくてはならない「心」を持っていることもよくわかります。人としての「心」は、ご家庭でのお子様への接し方や、お子様の周りの大人の振る舞いから少しずつ育てていくものです。 ・PCやタブレット、スマートフォンなどICT機器を学習でも使っています。それらは「道具」です。安全に使えるよう、保護者の皆様からしっかり使い方を教えてあげてください。今年度、学校もPTAと協力してICT機器の危険性や使い方の講演会を行いました。ぜひご参考にしていただけたらと思います。 ・地域のいろいろな方々と関わることで、子どもたちもいろいろな見方、考え方等が育ち、魅力ある人間に育ちます。「地域で子どもを育てる」視点を今後ももっていかれたらと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

令和7年度全国学力・学習状況調査の結果の分析及び活用について

学校名	伊勢原市立山王中学校
-----	------------

1 調査結果の分析及び考察

	特長	課題
国語	<ul style="list-style-type: none"> ・話の構成を工夫することは概ねできている。 ・文章をみて、適切な言い回しに修正する能力がやや低い傾向がみられる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・日常から、正しい語順で適切な表現を使うことを意識して過ごすこと。 ・相手の立場を考えて、表現や表記を整え、文章を整えること。
数学	<ul style="list-style-type: none"> ・必ず起こる事柄の確率について理解している。 ・全体として無回答率が低く、粘り強く、思考し続けることができている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・式の意味を読み取り、成り立つ事柄を見だし、数学的な表現を用いて説明すること。 ・事象を数学的に解釈し、問題解決の方法を数学的に説明すること。
理科	<ul style="list-style-type: none"> ・収集する資料や情報の信頼性についての知識及び技能が身に付いている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・【考察】をより確かなものにするために、音に関する知識及び技能を活用して、変える条件に着目した実験を計画し、予想される実験の結果を適切に説明すること。 ・大地の変化について、時間的・空間的な見方を働かせて、土地の変化と、地層の様子やその構成物に関する知識及び技能と関連付けて、地層の重なり方や広がり方を推定すること。
質問調査	<ul style="list-style-type: none"> ・「自分には良いところがあり、同時に先生も自分の良いところを認めてくれる」と感じており、普段の生活の中で幸せな気持ちになる生徒が多い。 ・学校に行くのが楽しく、友人関係にも満足している生徒が多く、困りごとや不安がある時は学校で相談できている。 ・自然に親しみがあり、地域の大人との関わりが深い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自ら計画を立て学習に取り組むこと。 ・学習したことを振り返り、次の学習につなげたり、実生活に結びつけて考えたりすることで学習内容を生かすこと。 ・ICT機器を活用し、情報を整理したり、発表したりすること。

2① 授業の充実に向けた重点的な取組

<p>【国語】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・基礎学力の定着に努めていく。 ・相手の立場に立って、自分の考えが伝わるような表現ができるようにしていく。 <p>【数学】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・式や事象の意味を捉え、数学的に説明する力を養う対話的な学習を充実させていく。 ・粘り強く考える姿勢を生かし、多様な解法に気付く探究的な課題に取り組むことを実践していく。 <p>【理科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・基礎的な知識理解の定着を図っていく。 ・自然の事物現象と理科が深く関わっていることを理解し、身近な疑問を見付けられるような授業を行っていく。

2② 家庭(地域)への発信内容(協力依頼事項)

※家庭で取り組んでほしい内容や地域の方に知っておいてほしい内容

<ul style="list-style-type: none"> ・基礎学力及び知識の定着をするためには、家庭学習の充実や学習時間の確保が効果的です。家庭学習の計画を立てることやポイントを絞った学習に苦手意識を持つ生徒が多いようです。まずは、毎日復習することを習慣化し、得意な分野を伸ばしつつ苦手な部分を確認していくなどして、学習に取り組む姿勢をご家庭でお話しいただければと思います。 ・スマートフォンなどの情報機器の扱い方について、ルール(約束)がなかったり守られていなかったりすることがあるようです。ご家庭において、再度ルールをご確認いただきたいと思います。 ・日頃より本校の教育活動にご理解ご協力をいただきありがとうございます。おかげさまで、生徒たちは授業や諸活動に励むことができている。今後とも地域の皆様のご理解ご協力のほど、よろしく願いいたします。
--

令和7年度全国学力・学習状況調査の結果の分析及び活用について

学校名

伊勢原市立成瀬中学校

1 調査結果の分析及び考察

	特長	課題
国語	<ul style="list-style-type: none"> ・短答形式の問題に対しては正答率が高いこと。 ・一問一問を正確に解く力が身に付いている生徒が多いこと。 	<ul style="list-style-type: none"> ・言葉の特徴や使い方に関すること。
数学	<ul style="list-style-type: none"> ・事象に即して、グラフから必要な情報を読み取ることができる。 ・事象の事柄が常に成り立つとは限らないことを説明する場面において、反例を上げることができるかどうか見ることができる。 ・目的において式を変形したり、その意味を読み取ったりして、事柄が成り立つ理由を説明することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・式の意味を読み取り、成り立つ事柄を見だし、数学的な表現を用いて説明すること。 ・不確定な事象の起こりやすさの傾向を捉え、判断の理由を数学的な表現を用いて説明すること。
理科	<ul style="list-style-type: none"> ・身のまわりの事象から生じた疑問や問題を解決するための課題を設定すること。 ・実験等のまとめから新たな疑問や生活との関わりについてまとめること。 	<ul style="list-style-type: none"> ・音に関する知識を活用し、より確かな考察とするための実験を考え、結果を予想すること。
質問調査	<ul style="list-style-type: none"> ・自分には、よいところがあると思っている人が多い。 ・人が困っているときは、進んで助けている。 ・人の役に立つ人間になりたいと思っている。 ・これまでの生活の中で、豊富な自然体験や自然観察を経験しているため、中学校の学習に活かされている。 ・学習に対して、粘り強く取り組み、最後まで考え解答する姿勢を持った生徒が多い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学んだことを実生活に結びつけて、考えたり、生かしたりすること。 ・ICT機器を使って学習内容を、整理したり、発表資料を作成すること。

2① 授業の充実に向けた重点的な取組

【国語】

・問題の全体を見渡し、最後まで解答を終えられるよう見通しを立てられるようにする。正確に解くことと、早く解くことの二点を大切にすることを引き続き指導していく。

【数学】

・基礎問題は解くことができるが、応用問題となると手が止まる生徒が多い。また、数学的な表現に慣れていない生徒が多い。そのため、数学的な表現を多く使いながら授業をするように努める。

【理科】

・学習した知識や技能が身のまわりの事象のどのような場面で利用されているか、考えることができている。一方で、必要な対照実験を考えたり、その結果を考えることが苦手としている生徒が多い。必要な結果を得るための逆算的な思考や実験を考えられるような時間を増やしていきたい。

2② 家庭(地域)への発信内容(協力依頼事項)

※家庭で取り組んでほしい内容や地域の方にとってほしい内容

・日頃より学校の活動にご理解、ご協力いただき厚く御礼申し上げます。
 ・子どもたちは自分に自信を持ちながら、学校生活を送っているようです。特に、他に対して、優しく接し、進んで助けること、人の役に立つことに意義を感じているようです。また、この気持ちを活かしながら、地域に社会貢献をするには何ができるのかなど、広い視野をもった活動を期待します。

令和7年度全国学力・学習状況調査の結果の分析及び活用について

学校名

伊勢原市立伊勢原中学校

1 調査結果の分析及び考察

	特長	課題
国語	<ul style="list-style-type: none"> ・文脈に即して漢字を正しく使うことができる。 ・目的に応じて、集めた材料を整理し、伝えたいことを明確にすることができる。 ・読み手の立場に立って、表記を確かめて、文章を整えることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えが伝わる文章になるように、根拠を明確にして書くこと。 ・資料や機器を用いて、自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫すること。 ・文章の構成や展開について、根拠を明確にして考えること。
数学	<ul style="list-style-type: none"> ・1次関数の変化の割合を理解している。 ・目的に応じて式を変形することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・式の意味を読みとり、成り立つ事柄を見いだすこと。 ・数学的な表現を用いて説明すること。
理科	<ul style="list-style-type: none"> ・粒子を柱とする領域においては、化学変化に関する知識、技能を活用して、実験の結果を分析して解釈し、具体的にイメージできる。 ・全般において、問われている問題の内容を理解し、その内容に対する答えを文章で表現することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・エネルギーを柱とする領域において、仮説を立てて科学的に探究すること。
質問調査	<ul style="list-style-type: none"> ・タブレットなどのICT機器で文章を作成することや情報を収集することに長けている。 ・授業や学校生活において、周りの人の考えを大切に、協力しながら話し合い活動や課題解決に取り組むことができる。 ・困っている人がいたら助けたい、地域や社会を良くするために何かしてみたいと思っている生徒が多い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・得られた情報をICT機器を使って整理することや発表用のスライドを作成すること。 ・学習した内容を次の学習につなげること。 ・読書は好きだと思っている割合が高い一方で、読書をする時間が少ないこと。

2① 授業の充実に向けた重点的な取組

【国語】

・表現の仕方を考えたり資料を適切に引用したりするなど、自分の考えが分かりやすく伝わる文章になるように工夫できるようにしていく。
 ・情報を取り出したり活用したりする際に行う整理の仕方やそのための具体的な手段について、言語活動の中で使うことができるようにしていく。

【数学】

・数学的な表現を用いて説明することができるよう、基礎基本の定着に努める。

【理科】

・日常の科学的事象に関心をもてるようにし、学習内容とのつながりを授業の中で共有し、理解したり説明したりする活動を充実させていく。

2② 家庭(地域)への発信内容(協力依頼事項)

※家庭で取り組んでほしい内容や地域の方にとってほしい内容

・日頃より、本校の教育活動にご理解ご協力をいただきありがとうございます。
 ・ご家庭による日々のご支援により、基本的な生活習慣は概ね定着しており、生徒は、落ち着いて授業を受けることや意欲的に学校の諸活動に取り組むことができている。
 ・スマートフォンやタブレットなどのICT機器を使用する場面が増えています。適切な利用時間やより良い活用方法などについて、時々ご家庭でも話をする機会を設けていただきたいと思います。
 ・より多くの生徒が地域とのつながりを深められるよう、今後も地域の行事やボランティア活動への参加を呼びかけていただくことや、子どもたちの生活を地域のみなさんで見守っていただければと思います。

令和7年度全国学力・学習状況調査の結果の分析及び活用について

学校名	伊勢原市立中沢中学校
-----	------------

1 調査結果の分析及び考察

	特長	課題
国語	<ul style="list-style-type: none"> ・登場人物の人物像を読み取ることができる。 ・文章の内容を読み取り、その内容をまとめて文章にすることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・言葉の意味の理解、語彙を豊かにすること。 ・内容をより分かりやすく伝えるための工夫について自分の考えを書くこと。
数学	<ul style="list-style-type: none"> ・やや複雑な問題設定を読み取ることができ、解法を数学的に考えることができる。 ・確率の単元では、事象の起こりやすさについて、求めた確率を用いて考察することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・文字式を用いて数を表現することや、数の性質を説明すること。 ・与えられた図や問題文から情報を読み取り、図形の性質を証明すること。
理科	<ul style="list-style-type: none"> ・大地の変化や気象に関する現象を理解し、問題に取り組むことができる。 ・科学的な探究を通してまとめたものを他者が発表する学習場面において、探究から生じた新たな疑問や身近な生活との関連などに着目し、表現することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・実験を計画し、予想される結果を説明すること。 ・生命を維持する働きに関する知識を十分に身に付けること。
質問調査	<ul style="list-style-type: none"> 「いじめはどんな理由があってもいけない」と考えている生徒や、「学校に行くのが楽しい」と答えている生徒が多い。 ・平日、土日ともに家庭学習の時間が長い生徒が多く、読書が好きと答えた生徒も多い。 「自分の考えを発表する機会では自分の考えが上手く伝わるように資料や文章、話しの組み立てなどを工夫して発表した」、「道徳の授業では、自分の考えを深めたり、学級やグループで話し合ったりする活動に取り組んだ」と肯定的に答えている生徒が多い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の大人との関わりや、体験活動への関わり、自然との関わりが少ないこと。

2① 授業の充実に向けた重点的な取組

<p>【国語】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えを伝えるために用いる語句や表現の推敲、また書いた文章を読み合せて書き手の意図と読み手の受け止め方がかみ合っているか確かめる機会をグループワーク等で設定していく。 <p>【数学】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・連続する2つの3の倍数を指導する際、3の倍数は3で割ったときにあまりが0になる整数であることや、2数の差が3であることなど、数量のもつ特徴を確認していく。その上で、$3n$や$3n+3$などと表し、さらにnに具体的な数を当てはめて、正しく表現できることを確認する活動をしていく。 <p>【理科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実験授業を行う際に、実験ノートを用いて実験を計画する機会を増やしていく。 ・振り返り小テストを実施し、基礎基本の定着に努めていく。
--

2② 家庭(地域)への発信内容(協力依頼事項)

<ul style="list-style-type: none"> ・ご家庭のご協力のおかげで、「自分には良い所がある」と感じている生徒が非常に多いです。また朝食を毎日きちんと食べている生徒が多いです。 ・1日当たりの家庭学習が平日、土日ともに長い生徒が多いです。 ・反面、地域の大人との関わりや自然の中で過ごす時間が短い生徒が多いです。地域とのつながり、社会をよくするために何ができるかを、経験を踏まえつつ考える機会を増やしていけると良いと思います。
--

令和7年度 伊勢原市学校・地域連絡調整会議
兼 コミュニティ・スクール研修会について（報告）

令和7年11月 教育指導課

令和7年度伊勢原市学校・地域連絡調整会議兼コミュニティ・スクール研修会を開催しましたので、その概要を次のとおり報告します。

1 日 時 令和7年11月4日（火） 午後3時00分から午後4時40分

2 場 所 伊勢原市役所2階 2CD会議室

3 参加者

- ・各校の学校運営協議会代表者
 - ・小学校長会長、中学校長会長
 - ・教育委員会職員
- 計23名

4 主な内容

(1) 基調講話（教育長） 「これからの学校を考える～『熟議』真面目な雑談」

- 伊勢原の強み…スケールメリット（10小学校 4中学校）
地域と学校の「顔の見える関係」 地域とともに「おらが学校」
→今後も続くよう二つの「仕組み」を設置
- 課題認識①…コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の「新たな段階」へ
 - ・様々な活動に各地域団体等が全力投球しているのは、伊勢原の強みである。
 - ・様々な価値ある活動があるが、活動を行うこと自体が目的になってはいけない。
 - ・めざす「これからの学校」を共有するための「熟議」が必要である。
- 課題意識②…不登校を考える
 - ・不登校はどの子どもにも起こり得る。多様な要因・背景により結果的に不登校状態となっている。不登校の子どもの問題（甘え、怠け、弱い）として捉えない。
 - ・不登校の子ども（保護者）には、「学校内外における多様な居場所・学びの場」「心理・医療・福祉等による支援」が必要。これらの支援により当該の子どもや保護者の不安や困難を軽減したい。
 - ・さらには、「学校が楽しいと思えない、自分に良いところがあると思えない」という1～2割の子どもたちに着目し、新たな不登校が生まれないような「これからの学校づくり」が不登校対策の肝。
- めざすべき「これからの学校像」
～多様な人と社会との関わりの中で、児童生徒の一人ひとりの可能性を引き出す学校～

(2) グループ別「熟議」 (全参加者)

テーマ	子ども一人ひとりの可能性を引き出す関わりとは… 理念でも具体策でも 今ある活動で何ができるか 工夫・アイデアを
-----	--

主な話題・意見 (抜粋)

< Aグループ >

- ・学校は子どもが通いたい、保護者が通わせたい、子ども一人ひとりが活きる場であることが大切。
- ・大人と子どもと一緒に楽しみ、学べる活動を通じて、子どもの様子を学校・保護者・地域で共有できるとよい。
- ・朝の挨拶など日常的に地域の人々の目や声があると、子どもにとって見守ってくれているという安心感につながる。
- ・先生が子どもとじっくり向きあう時間と場の確保ができるような地域や保護者の協力があると良い。

< Bグループ >

- ・「子どもをほめる、認める」ことが第一。地域や家庭、学校で、子どもの話をよく聴いてその気持ちを受け止めることが、自己肯定感を高め、よりよい成長に導く。さらには地域を盛り上げることにもつながるのではないか。
- ・子どもと地域の方が話すきっかけとなる場 (地域行事や学校の活動) が欠かせないが、併せて「何がいつどのように行われているか」の情報共有も大切。

< Cグループ >

- ・大切にしたいことは「たくさん味方がいることを伝え」「楽しいことを通して人や地域とのつながりを味わって」「その中での自己肯定感を高める声かけ」など。そのための場として、今ある活動を存分に活かせるように考えていけるとよい。
- ・例えば、各学校のふれあい祭り、フェスタなどでは、子どもも大人も活躍 (出番と役割) する場を設け、自分の好きなことや得意なことを伸ばしたり、認めてもらったりするような取組にする。そこに先生方も参加して、つながりが持てるとよい。

< Dグループ >

- ・学校と地域が協働できそうなこととして、合同防災訓練、プール清掃へのボランティア協力などがありそう。
- ・小中交流や商店街での交流なども地域的にできそうだが、教職員の働き方改革ということを考えると「やりましょう」とはなかなか言えない面がある。
- ・子どもの可能性を引き出すには、一人ひとりを認めること、コミュニケーションをとることなど、子どもだけでなく大人同士でも必要だねという話。

(3) まとめ (教育長)

- ・学習指導要領改訂に向けたこれからの数年間は、各学校が、忙しさの中でも「学校本来の使命や魅力」を再確認し、「新たな指導観」のもと、新たな教育課程を編成する、大切な、絶好の期間。
- ・この取組は、全教職員はもとより、保護者・地域・子どもたちを加え、それぞれの思いや考えを交し合うプロセスにこそ価値がある。各校の学校運営協議会が「熟議」の母体となることを願っている。